

## ポスター発表 A1 8月26日(火)

8号館地下1階ホール

在席責任時間: 奇数番号(前半)9:40~10:25

偶数番号(後半)10:25~11:10

### 原理・認知・感情

- |      |   |                               |  |    |
|------|---|-------------------------------|--|----|
| A1-1 | 「ダンス・リサイクル」に創造性はあるのか?<br>—コンテンポラリーダンスにおける再構成的<br>創造性の構造分析—            | ○ 来田宣幸 1<br>権野めぐみ 2<br>阪本麻郁 3 | (1 京都工芸繊維大学)<br>(2 名古屋葵大学)<br>(3 四国学院大学) | 31 |
| A1-2 | 東洋大学第 12 代学長:高嶋米峰の偉大性<br>について<br>高嶋正士生誕 100 年を記念する:高嶋正士<br>と偉大性心理学(4) | ○ 藤田主一                        | (日本体育大学)                                 | 32 |
| A1-3 | 「〇〇らしさ」の認知プロセス —人間と深層<br>学習モデルの意味処理順序の比較による検<br>討—                    | ○ 下條朝也                        | (コニカミノルタ株式会社)                            | 33 |
| A1-4 | A.H.マズローの言う「自己実現」が殆ど見ら<br>れない世界について —現代の所謂「自己実<br>現」社会との比較において—       | ○ 三島斉紀                        | (神奈川大学)                                  | 34 |

### 教育・発達・人格

- |      |  |   |   |    |
|------|--|---|---|----|
| A1-5 | ロール・プレイングの可能性<br>—教育現場をささえる取り組み③—  | ○ 時田学   | (日本大学)  | 35 |
| A1-6 | 障害者の趣味活動とウェルビーイングの関連<br>性:質的研究による考察  | ○ 成井隆友 1<br>時田学 2   | (1 日本大学大学院)<br>(2 日本大学)                             | 36 |
| A1-7 | 中学校部活動への所属が心理社会的成長に<br>与える影響の縦断的検討:教員の働き方改<br>革と部活動の地域移行期における教育的意<br>義の再評価             | ○ 大門耕平 1<br>駒田淑久 2<br>来田宣幸 3                                  | (1 東北学院大学)<br>(2 近江兄弟社中学校)<br>(3 京都工芸繊維大学)          | 37 |
| A1-8 | 接客業における顧客対応力尺度の開発 —<br>カスタマーハラスメント対策施策の効果計測<br>に向けて—                                   | ○ 岩崎翔 1<br>設楽一碩 1<br>吉岡隆宏 1<br>紺野剛史 1<br>島田恭子 2,3<br>桐生正幸 2,3 | (1 富士通株式会社)<br>(2 一般社団法人ココロバ<br>ランス研究所)<br>(3 東洋大学) | 38 |
| A1-9 | AI 技術と心理学の融合によるカスタマーハラ<br>スメント対応教育プログラムの開発と実証 —<br>コールセンター従業員を対象とした実証実験<br>による教育効果の検証— | ○ 紺野剛史 1<br>岩崎翔 1<br>設楽一碩 1<br>吉岡隆宏 1<br>島田恭子 2,3<br>桐生正幸 2,3 | (1 富士通株式会社)<br>(2 一般社団法人ココロバ<br>ランス研究所)<br>(3 東洋大学) | 39 |

## ポスター発表 AI・BI 8月26日(火)

8号館地下1階ホール

在席責任時間: 奇数番号(前半)9:40~10:25

偶数番号(後半)10:25~11:10

### 教育・発達・人格

- |       |   |   |   |   |    |
|-------|---|---|---|---|----|
| AI-10 | カスタマーハラスメント体験 AI ツールを用いた訓練が従業員の対応力と主観的生産性に及ぼす長期的影響<br>—コールセンターにおける実証研究— | ○ | 設楽一碩 1<br>岩崎翔 1<br>吉岡隆宏 1<br>島田恭子 2,3<br>桐生正幸 2,3 | (1 富士通株式会社)<br>(2 一般社団法人ココロバランス研究所)<br>(3 東洋大学) | 40 |
|-------|---|---|---|---|----|

### 臨床・福祉・相談

- |      |  |   |                            |  |    |
|------|--|---|----------------------------|--|----|
| BI-1 | 自傷行為の経験と解離傾向の関連の検討 — 一般健常群との比較から                         | ○ | 今井田貴裕 1<br>小鹿袖祐 2          | (1 仁愛大学)<br>(2 人間環境大学心理学部)             | 41 |
| BI-2 | 社会人以降の対人関係と孤独感—職場と職場外におけるハラスメント被害経験の影響—                  | ○ | 藤後悦子 1<br>大橋恵 1<br>井梅由美子 1 | (1 東京未来大学)                             | 42 |
| BI-3 | 中学受験をめぐる親子の心理的葛藤② — 中学受験経験者に聞いた受験当時の親子関係と現在の幸福感—         | ○ | 井梅由美子 1<br>藤後悦子 1<br>大橋恵 1 | (1 東京未来大学)                             | 43 |
| BI-4 | Social Networking Addiction Scale 日本語版の開発 — 因子構造と信頼性の検討— | ○ | 中谷智美 1<br>福井義一 2<br>堀孝司 3  | (1 名古屋産業大学)<br>(2 甲南大学)<br>(3 甲南大学大学院) | 44 |
| BI-5 | 大学生における行動的感情制御方略のスタイルと抑うつ・不安の関連                          | ○ | 村田康德 1<br>加藤佳子 1           | (1 神戸大学大学院)                            | 45 |
| BI-6 | 単身中高年者における孤独感と時間的切迫感が将来展望に及ぼす影響                          | ○ | 清水佐紀 1<br>村山陽 2            | (1 和洋女子大学)<br>(2 東京都健康長寿医療センター研究所)     | 46 |

### 健康・看護・医療

- |      |                                     |   |                             |                                 |    |
|------|-------------------------------------|---|-----------------------------|---------------------------------|----|
| BI-7 | カロリー・塩分量の栄養表示が選択行動に与える影響            | ○ | 杉山聡一 1<br>幸田仁志 2<br>来田宣幸 2  | (1 京都工芸繊維大学大学院)<br>(2 京都工芸繊維大学) | 47 |
| BI-8 | タッチングによる快体験の様相 ~時間的変化と身体感覚・感情への気づき~ | ○ | 小西奈美 1<br>内堀恵美 2<br>大久保千恵 2 | (1 明治国際医療大学)<br>(2 京都橘大学)       | 48 |

## ポスター発表 B1・C1 8月26日(火)

8号館地下1階ホール

在席責任時間: 奇数番号(前半)9:40~10:25

偶数番号(後半)10:25~11:10

### 健康・看護・医療

- |       |  |                               |                         |    |
|-------|--|-------------------------------|-------------------------|----|
| B1-9  | 花を用いた心理療法で撮影された生け花画像に関する距離分析と印象評価分析の検討                   | ○ 内田誠也 1<br>田中英明 1<br>本村明嘉 1  | (1 一般財団法人 MOA 健康科学センター) | 49 |
| B1-10 | 介護士を対象としたソーシャルスキル尺度の階層構造の検討                              | ○ 三宅沙侑美 1<br>山野洋一 2<br>田中共子 1 | (1 岡山大学)<br>(2 京都産業大学)  | 50 |
| B1-11 | コロナ禍を過ごしてきた大学生の友人ネットワークと大学適応過程 —2019年度・2020年度入学者の TEM 図— | ○ 上田仁 1<br>松浦均 2              | (1 愛知県庁)<br>(2 星槎大学)    | 51 |
| B1-12 | 子育て期におけるワーク・ライフ・バランスの関連要因の検討(1) 職場認知と子育て意識の関連            | ○ 池田琴恵 1<br>谷口まち子 2           | (1 豊田工業大学)<br>(2 南山大学)  | 52 |
| B1-13 | 子育て期におけるワーク・ライフ・バランスの関連要因の検討(2) 仕事と子育ての両立のバランスの再構成のプロセス  | ○ 谷口まち子 1<br>池田琴恵 2           | (1 南山大学)<br>(2 豊田工業大学)  | 53 |

### 犯罪・社会・文化

- |      |   |                               |                        |    |
|------|---|-------------------------------|------------------------|----|
| C1-1 | 留学生との交流における意思決定バランスと行動変容ステージの関係             | ○ 田中共子 1<br>山野洋一 2<br>三宅沙侑美 1 | (1 岡山大学)<br>(2 京都産業大学) | 54 |
| C1-2 | 「きょうだい児」に関する態度分析 — YouTube のコメント欄を用いて—      | ○ 工藤咲                         | (立正大学大学院)              | 55 |
| C1-3 | 17 歳身長分布での変動係数の経年増大等—関与及び影響する諸領域での応用心理学的考察— | ○ 廣島克佳                        | (マンション管理士)             | 56 |
| C1-4 | アタッチメントと他者のユーモアに対する魅力に関する日中調査               | ○ 中尾達馬 1<br>李同帰 2             | (1 琉球大学)<br>(2 北京大学)   | 57 |
| C1-5 | ありのまま信念が新規職場適応に与える影響                        | ○ 谷口淳一                        | (帝塚山大学)                | 58 |
| C1-6 | マッチングアプリに対して大学生が持つ印象—地域差と NIMBY の関連—        | ○ 井川純一                        | (東北学院大学)               | 59 |

## ポスター発表 C1 8月26日(火)

8号館地下1階ホール

在席責任時間: 奇数番号(前半)9:40~10:25

偶数番号(後半)10:25~11:10

### 産業・交通・災害

- |       |   |                                      |   |    |
|-------|---|--------------------------------------|---|----|
| C1-7  | 若手リーダーはいつ「矛盾」を活かせるのか?<br>—パラドキシカル・リーダー行動に与える年上部<br>下比率の曲線効果と外向性の調整効果— | ○ 竹内規彦                               | (早稲田大学商学学術院)                            | 60 |
| C1-8  | 押し活の行動的側面の構造と推しの対象の関<br>連について —探索的因子分析と多重コレスポ<br>ンデンス分析による検討—         | ○ 山村豊 1<br>菅野智子 2<br>大森哲至 3<br>田宮憲 3 | (1 桜美林大学)<br>(2 立正大学)<br>(3 帝京大学)       | 61 |
| C1-9  | 押し活の心理的側面と行動的側面の関連につ<br>いて<br>—クラスター分析とコレスポンス分析による<br>検討—             | ○ 菅野智子 1<br>大森哲至 2<br>田宮憲 2<br>山村豊 3 | (1 立正大学)<br>(2 帝京大学)<br>(3 桜美林大学)       | 62 |
| C1-10 | あおり運転を誘発する運転行動の要因の検討<br>—STAXIを用いた怒り表出傾向との関連—                         | ○ 今井靖雄 1<br>小島治幸 2                   | (1 金沢大学大学院)<br>(2 金沢大学)                 | 63 |
| C1-11 | チーム・パラドックス・マインドセット尺度作成の<br>試み—パラドキシカル・リーダー行動の影響を中<br>心に—              | ○ 新保智之 1<br>竹内規彦 2                   | (1 早稲田大学大学院)<br>(2 早稲田大学商学学術院)          | 64 |
| C1-12 | フロー体験が導く主観的キャリア成功 —ポジテ<br>ィブ感情と外部参照型目標難易度の媒介メカニ<br>ズム—                | ○ 劉徳嘯 1<br>竹内規彦 2                    | (1 デルテクノロジーズ株式会<br>社)<br>(2 早稲田大学商学学術院) | 65 |

### スポーツ・生理

- |       |   |   |                          |    |
|-------|---|---|--------------------------|----|
| C1-13 | 大学剣道男子部員の心理的特性と身体的特性<br>の研究                 | ○ 井上雄貴 1<br>新里知佳野 1<br>古澤伸晃 1<br>百田尚史 1<br>八木沢誠 1<br>軽部幸浩 2<br>藤田主一 1 | (1 日本体育大学)<br>(2 東京富士大学) | 66 |
| C1-14 | 大学剣道部員の心理的特性と身体的特性の研<br>究<br>—男子部員と女子部員の比較— | ○ 新里知佳野 1<br>古澤伸晃 1<br>井上雄貴 1<br>百田尚史 1<br>八木沢誠 1<br>軽部幸浩 2<br>藤田主一 1 | (1 日本体育大学)<br>(2 東京富士大学) | 67 |

## ポスター発表 C1 8月26日(火)

8号館地下1階ホール

在席責任時間: 奇数番号(前半)9:40~10:25

偶数番号(後半)10:25~11:10

### スポーツ・生理

- |       |  |   |   |  |    |
|-------|--|---|---|--|----|
| C1-15 | 大学柔道競技者が捉える「柔道の魅力」とは何か(1)<br>—因子分析の検討—         | ○ | 岡崎祐史 1<br>大藤潤也 2<br>大関貴久 3<br>森脇保彦 4<br>軽部幸浩 5<br>藤田主一 6            | (1 武庫川女子大学)<br>(2 至誠館大学)<br>(3 東日本国際大学)<br>(4 国士館大学)<br>(5 東京富士大学)<br>(6 日本体育大学) | 68 |
| C1-16 | 大学柔道競技者が捉える「柔道の魅力」とは何か(2)<br>—男女間における魅力の差について— | ○ | 大藤潤也 1<br>岡崎祐史 2<br>大関貴久 3<br>森脇保彦 4<br>軽部幸浩 5<br>藤田主一 6            | (1 至誠館大学)<br>(2 武庫川女子大学)<br>(3 東日本国際大学)<br>(4 国士館大学)<br>(5 東京富士大学)<br>(6 日本体育大学) | 69 |
| C1-17 | 大学柔道競技者が捉える「柔道の魅力」とは何か(3)<br>—共起ネットワークによる分析—   | ○ | 大関貴久 1<br>岡崎祐史 2<br>大藤潤也 3<br>森脇保彦 4<br>軽部幸浩 5<br>藤田主一 6            | (1 東日本国際大学)<br>(2 武庫川女子大学)<br>(3 至誠館大学)<br>(4 国士館大学)<br>(5 東京富士大学)<br>(6 日本体育大学) | 70 |
| C1-18 | 大学生における剣道の寒稽古が心理的能力に及ぼす可能性                     | ○ | 百田尚史 1<br>古澤伸晃 1<br>新里知佳野 1<br>井上雄貴 1<br>八木沢誠 1<br>軽部幸浩 2<br>藤田主一 1 | (1 日本体育大学)<br>(2 東京富士大学)   | 71 |
| C1-19 | 大学生の武道に対するイメージの研究 —初発反応の内容について—                | ○ | 井上航人 1<br>軽部幸浩 1<br>藤田主一 2  | (1 東京富士大学)<br>(2 日本体育大学)   | 72 |
| C1-20 | 大学生の武道に対するイメージの研究(2) —最も強いイメージについて—            | ○ | 軽部幸浩 1<br>井上航人 1<br>藤田主一 2  | (1 東京富士大学)<br>(2 日本体育大学)   | 73 |
| C1-21 | 日体大版剣道イメージ尺度(NIKS(ニックス))の作成(5) —信頼性について—       | ○ | 古澤伸晃 1<br>新里知佳野 1<br>井上雄貴 1<br>百田尚史 1<br>八木沢誠 1<br>軽部幸浩 2<br>藤田主一 1 | (1 日本体育大学)<br>(2 東京富士大学)   | 74 |

# 「ダンス・リサイクル」に創造性はあるのか？

## コンテンポラリーダンスにおける再構成的創造性の構造分析

○来田宣幸<sup>1</sup> 権野めぐみ<sup>2</sup> 阪本麻郁<sup>3</sup>  
(<sup>1</sup>京都工芸繊維大学 <sup>2</sup>名古屋葵大学 <sup>3</sup>四国学院大学)

キーワード：知識工学、創作、持続可能性

【目的】創造性は心理学・芸術学で重視され、「新規性」や「独自性」を基盤とする理論が多く提示されてきた。特に心理学領域では創造性を個人の特性や問題解決能力として捉えるアプローチから状況的・社会的要因を含むプロセス論的視点への関心が高まりつつある。芸術領域では、「ゼロから新たなものを生み出す」という生成モデル的な創造性観は根強い。一方で、近年では既存の素材や表現を再構成・再文脈化する手法にも注目が集まっている。しかし、芸術実践において「再構成」を伴う創作がどのような判断・構造・関係性の中で行われているのかの実証的・理論的研究は少なく、創造性研究においては位置づけが不十分である。

本研究は、コンテンポラリーダンスの創作において過去の作品を素材として再構成する「ダンス・リサイクル」実践に着目する。この手法は、既存の動きやテーマを単に再利用するのではなく、解体・再構成を通して新たな意味や構造を生成する。本研究はこの実践において、創作者がどのように素材を選び、意味を再構成し、創造的判断しているのかを質的に記述・分析する。特に、創作に内在する美的・社会的・身体的な多層的な判断や創造性のプロセス構造を明らかにすることで再構成的創造性の理解枠組みに理論的貢献を試みる。

【方法】調査対象者は、コンテンポラリーダンスの分野で長年にわたり創作・指導活動を行い、「ダンス・リサイクル」という手法を実践している振付家・阪本麻郁氏とした。

2025年4月から5月に研究者2名がオンライン形式で半構造化インタビューを実施し、録音・逐語記録の同意のもと、約90分の語りを得た。質問項目は素材選択の基準、構成判断、意味の再文脈化、価値観、教育的意義等のテーマを設定し、自由な語りを重視した。得られた逐語録から重要語句や概念を抽出し、構成原理や創造的判断を導出した。特に「素材選択」、「構成原理」、「意味再生成」、「価値判断」の4視点に着目しカテゴリー化・理論化を行い、創作プロセスに内在する創造性の構造モデルを探索的に導出した。

【結果および考察】対象者の語りから「ダンス・リサイクル」の実践に内在する創造性の構造を検討した結果、以下の4つの主要カテゴリーが抽出された。1つ目に、「素材の潜在可能性を見出す視点」として、対象者は既存の作品や要素を単に再利用するのではなく、それらに含まれる未顕在の価値や意味に着目し、新たな文脈や構造へと変容させる創作判断を行っていた。特に、「リユース」、「リメイク」、「リサイクル」といった枠組みの違いを、原作品からの逸脱の程度や再構成への介入レベルとして整理し、創作の自由度や責任の在り方に応じた判断を行っていた。すなわち、リサイクルとは、既存の素材を一度構造的に解体し、それを再構築することで新たな意味や価値を生成する創作的実践であり、単なる再利用とは異なり、原型を保持しない変容プロセスを伴う点が特徴といえる。また、素材に潜在する創造的可能性を見出し、それを意味的・構造的に再文脈化する過程は、リサイクル的創作に内在する創造性の中核であり、既存の表現を基盤としつつ新たな価値を生成する営みとして評価できる。

2つ目は「判断基準の多層性」である。創作における判断は、自己の美学や感性に基づくだけでなく、元作品の振付家に対する敬意、出演者・スタッフや観客との関係性、教育的再利用の可能性、著作権や表記に関する配慮など、複数の文脈的要因に支えられていることがうかがえた。作品の再構成

に際して、対象者は「どこまで変更することが許されるか」、「何を記録・明記すべきか」といった問いに対し、表現の自由と倫理的責任とのバランスをとる判断を慎重に行っていた。リサイクル的創作においては、元の作品に対する一方的な「再利用」ではなく、多面的な視点に基づいた判断と選択が求められる。その判断は、単なる模倣や引用とは異なり、創作者自身の価値観や他者への配慮、社会的文脈を統合する高度な創造的営みである。したがって、たとえ出発点が既存の作品であったとしても、そこに至る選択と再構成の過程には、独自の創造性が内在しているといえる。

3つ目は「即興と構成」である。創作における素材の抽出段階では、偶発的な気づきや即興的な動きが重要な起点となっていた。一方で、作品として観客に提示するためには、構成の整合性や再現性が求められ、振付として一定の秩序と形を与える作業が不可欠であった。対象者は、即興と構成、自由と制約のバランスの中で、創作判断を柔軟に調整しながら、段階的に作品を構築していた。このプロセスは、「自由な発想」と「構造化された表現」の創造性のダイナミズムであり、素材が既存のものであったとしてもその取り出し方、組み立て方、展開の仕方において独自の創造的判断が求められていた。リサイクル的創作であっても、即興と構成を往復し新たに生成する実践は、創造的営みとして評価できる。

4つ目は「循環構造としての創造性」である。創造性は一方向的な「生み出す行為」ではなく、既存の表現を受け取り、意味や構造を再構成し、他者に再利用可能な形で開くという、継続的な創作プロセスとして捉えられていた。対象者は、作品に含まれる素材・ツールを抽出・再文脈化することで、単なる再演ではなく、次の創作の出発点として活用していた。このような再構成された作品は、今度は新たな「素材」として他者に共有され、再び創作の中で展開されることが期待されていた。特に、保存・再現が困難で、消失しやすいコンテンポラリーダンスにおいて、開かれた再構成的営みは、創造性の持続可能性という観点から極めて意義深い。リサイクル的創作は既存の表現を活用しているものの、一方向で閉じるのではなく、開く実践であるという点において、本質的な創造性を有する営みとして位置づけることができる。

以上の分析から、「ダンス・リサイクル」における創造性は、素材と構成に関する多層的判断、即興と構成、美的・教育的な視座の重層によって支えられた再構成的営みとして捉えられる。その創作プロセスには、従来の「完全な新規性」や「独自性」を基盤とする創造性概念では捉えきれない、関係性的かつ動的な創造性が顕在化している。「リサイクル」という語には「古いものの使い回し」という否定的なイメージがあるが、ダンス・リサイクルは創造性の本質に関わる実践であり、コンテンポラリーダンスが本来的に有する「同時代性」、「再構成的」、「多義性」といった性質に照らせば、この手法はまさにその芸術の本質を体現する実践であり、創造性の観点からも意義深いものであるといえる。

【利益相反】特になし。

【引用文献】

阪本麻郁・権野めぐみ・来田宣幸、「ダンス・リサイクル」  
♻️—実践とその可能性—、第76回舞踊学会大会抄録、  
2024

(きだ のりゆき・ごんの めぐみ・さかもと まや)

# 東洋大学第12代学長：高嶋米峰の偉大性について

## — 高嶋正士生誕100年を記念する：高嶋正士と偉大性心理学（4） —

藤田主一

（日本体育大学）

キーワード：高嶋米峰、高嶋正士、香川葆晃、偉大性

### 1. 研究の背景と目的

高嶋米峰（たかしまべいほう：1875-1949）は、哲学館（現東洋大学）の出身で、卒業後、井上円了の助手になり、のちに東洋大学第12代学長（1943年7月～1944年11月）を務めた社会教育家、仏教学者である（以下米峰とする）。

米峰は、1875（明治8）年1月15日、新潟県頸城郡竹直村（現在の上越市吉川区）において、親鸞聖人を宗祖とする浄土真宗本願寺派真照寺の第十三世住職宗明の長男として誕生した（幼名を大円という）。米峰という名前は、幼少期に朝晩眺望していた標高993mの霊峰・米山（よねやま）の美称で（図1）、大正10年には戸籍上も幼名の大円を米峰に改名している。米峰は、父宗明の晩年に誕生した唯一の男子で、本来なら第十四世住職になるはずであるが、出生したときにはすでに第十四世住職が決まっていたため、住職になることができなかったのである。



図1 霊峰：米山

高嶋正士（たかしままさし：1925-2021、日本応用心理学会名誉会員、真照寺第十六世住職、以下正士とする）からみると、米峰は大伯父（正士の父親の伯父）にあたり4親等（正士は筆者の伯父であるため、筆者から米峰は5親等）である。

ここでは、日本応用心理学会第91回大会が東洋大学で開催されるのを機会に、米峰の偉大性について回顧することを目的とする（本文中の敬称略）。

### 2. 研究の方法

米峰が残した多数の書籍や論説、年譜、正士の著述類、筆者所有の資料、各種メディアの資料、後世の『高嶋米峰自叙伝』（復刻）などを基にして論考する。

### 3. 結果と考察

米峰は、2003（平成15）年3月31日発行の新聞「上越タイムス」の特集記事「世紀を越えて：上越の偉人」の一人に取り上げられている（図2）。

（1）履歴：米峰は8歳のとき、父宗明の実弟である香川葆晃（かがわほうこう）に伴われて京都へ行き、郷里の小学校から転校を経験する。葆晃は、明治期に勤王僧の一人として行動し、のちに大学林（現龍谷大学）の総長、西本願寺執行長（現在の総長）などの要職を務め、勸学（同派最高の学階位）であった人物である。

米峰は、両親と死別後、自身の疾病のため一時郷里へ帰るが、14歳のときに再び葆晃の誘いがある京都へ戻り、西本願寺立普通教校（改称して大学林）に入る。18歳で新潟県出身の井上円了の哲学館に入学して学問の道へ進み、21歳で第七期教育学部を卒業し、井上の助手になる。23歳で哲学館近くの京華尋常中学校の国語作文科教師になる（日本大学心理学科を創設した渡辺徹は、米峰の教え子）。その後、多数の活動を経て、68歳のときに東洋大学第12代学長となる。1949（昭和24）年10月25日、三鷹市の自宅で永眠する。

（2）業績：米峰の経歴として特筆すべきことは、24歳のころから哲学館の同士とともに既成教団の腐敗を攻撃し、その改革を目的として「新仏教運動」を起こしたことであろう。正士は、「米峰はお経を読むことが嫌いだったが、父や叔父の

行動や態度、業績を常日頃見ていたので、寺に生まれたご縁から新仏教運動へ心を寄せたのだろう。親鸞聖人の『悲僧非俗』の立場に近い考えをもっていたのではないかと述べている。また米峰は、当時の廃娼や禁酒、禁煙運動には先頭に立って活動し、東京吉原花魁道中の禁止を訴えた。（2025年NHK大河ドラマ「べらぼう」のなかで、吉原花魁道中の一部が放映された。）米峰の書物（単著）は60冊に及び、その半数以上は、60歳以降のものである。なかでも『聖徳太子正伝』（1948年：明治書院）は、天皇・皇后・皇太后・皇太子に献上された。執筆した論文や論説の数は数百になる。



図2 「上越タイムス」（平成15年3月31日）

（3）人物：米峰の人格を語るとき、乳幼児期の家庭環境の影響が大きいといわれる。米峰に一貫して見られる精神は「正義と正論」でなかったか。正士によれば、「何ごとにつけても単刀直入で、はっきりさせる性格を備えて外向性が強く自己に厳しかった」ようだ。幼いころから弁舌に長けていた米峰は自らの宗教観を国民に語りかけているが、その語り口は大変な反響があり、ラジオでの講演等で人気が高かったという。

本研究に関する利益相反はありません。

### 【引用文献】

- 高嶋米峰小誌（1975）. 廿七回忌・生誕百年記念、非売品。
- 高嶋米峰没後五〇年記念顕彰書籍刊行会編（2000）. 高嶋米峰、ピーマンハウス。
- 高嶋正士（2016）. 出会いとご縁、クロスロードエッセイ：私と応用心理学、応用心理学のクロスロード vol.8, 30-31.
- 藤田主一（2021）. 追悼：高嶋正士先生を偲んで、応用心理学研究第47巻第1号, 54-57. （ふじた しゅいち）

# 「〇〇らしさ」の認知プロセス： 人間と深層学習モデルの意味処理順序の比較による検討

下條朝也

(コニカミノルタ株式会社)

キーワード：ブランド・アイデンティティ、ブランド認知、視覚的注意

【目的】パッケージデザインは、企業のブランド・アイデンティティ (BI) を象徴するメディアであり、視覚的印象が消費者の態度形成や購買意思決定に大きな影響を与える

(Kapferer, 1994)。従来、色彩、ロゴ、タイポグラフィなど明示的な要素が議論されてきたが、こうした視覚的印象に対する人間の反応を、機械学習モデルと比較する試みが進展している。

特に、モデルが画像内のどの領域に注目しているかを可視化できるようになり、人間の視線データや主観評価と対応させることで、注視位置や視線の時系列変化がモデルと人間でどれほど一致しているかを評価する検討が進められてきた (Guo et al., 2021; Müller et al., 2024)。しかし、現時点の多くの研究は、視線位置や Grad-CAM マップの重なりといった、出力の一致度の検証にとどまり、情報選択と判断の順序構造に踏み込めていない。

また、Grad-CAM はモデルの出力勾配に基づいた事後的な可視化であり、情報処理の因果構造そのものを示すものではない。さらに、モデルが注目している箇所が人間と似ていても、それが異なる目的関数や報酬設計に基づいて導かれている可能性がある以上、外見的な注意の一致は構造的対応を保証しない。

そこで、本研究は、BI 処理過程における入力情報に対して、どの意味的特徴が選択され、それがどの順序で処理・評価されていくのかという認知的な情報処理の流れが、人間とモデルの間でどれほど共通しているかを検討する。具体的には、視覚的特徴の選別、意味の解釈、価値づけ、判断という一連の処理において、選好や評価の計算的枠組みに共通性が見られるかを検証する。処理構造が類似する場合、単なる出力結果の一致ではなく、モデルが人間のような情報選択と価値判断のパターンを内包していることを示唆し得る。

【方法】本実験では、2つの筆記具ブランド（以下「ブランドA」「ブランドB」）のパッケージデザインを対象とし、深層学習モデルと人間の視覚的処理構造の対応関係を検証した。

**Grad-CAM によるフィルタ視覚化** データセットには、歴史が100年以上ありBIが確立されていると考えられる筆記具ブランドのパッケージ画像を各1000枚、計2000枚収集した。ブランド名が明示されている箇所はPhotoshopでマスク処理を行い、視覚的特徴による判別が可能な状態とした。VGG16をベースとし、最終全結合層の出力ユニット数を2に変更して転移学習を実施した。訓練データ70%、検証データ30%に分割し、Adam最適化器、学習率 $1e-5$ 、エポック数200で訓練した。最終的な検証精度は86.3%となった。

上記モデルの判断根拠を可視化するため、Grad-CAMを適用した。対象は「block5\_conv3」層であり、出力クラスに対する勾配情報をもとに、入力画像上に重要領域をヒートマップとして重ねた。各刺激画像について、モデルがブランドAに分類した際のGrad-CAMマップを保存し、後述の比較に用いた。

**視線計測実験と主観評価** 成人参加者6名（男性4名、女性2名、平均年齢39.8歳±7.9）に対し、視線計測を実施した。訓練には用いなかった各ブランド10枚の画像（計20枚）を1枚5秒間ずつ表示し、注視を指示した。表示順はランダムであり、顎台を用いて頭部を固定した上で、UCAM-C750FBBKカメラとGazeRecorderソフトウェアにより視線データを収集した。画像ごとに、対象がブランドAである確信度（0-100%）をVAS形式で回答させ、70%以上の試行に限定して分析対象とした。

次に、画像内の視覚的意味カテゴリとして、「ロゴ」「色調」「質感」「材質」「形状」「構図」「余白」「影」など10カテゴリを設定し、専門家2名によってラベリングを実施した。視線データおよびGrad-CAMマップの高強度領域が、時間順にどのカテゴリを通過したかを抽出し、意味処理系列として記録した。

そして、BIに関連すると考えられる意味特徴（例：「高級感」を与える光沢）に対し、3条件（元画像、当該要素マスク、当該要素置換）を作成した。参加者およびモデルに対しそれぞれ提示し、ブランドAらしさスコア（VAS形式）を収集。スコア変化量を計算し、人間とモデルの間での評価反応の一致度を比較した。

## 【結果】

**意味処理順序の一致度** DTW距離により算出した意味ラベル系列の対応度では、被験者とモデルの系列類似度スコアは平均0.76（相関係数ベース正規化、 $SD=0.09$ ）であり、順序構造においても部分的な対応が観察された。特に「質感→ロゴ→色調」の順序は、被験者群の約83%およびモデル出力の約78%に共通して出現していた。

意味要素をマスクまたは置換した画像に対して、被験者およびモデルの評価スコアの変化量（ $\Delta$ スコア）を比較した結果、ピアソン相関係数は $r=0.64$  ( $p<.01$ )であり、有意な一致が確認された。特に「高級感」の減衰処理に対しては、人間・モデルともにスコア低下が大きく、価値評価の因果構造に共通性が見られた。これは、深層学習モデルが表面的な分類を超え、意味的・価値的判断構造を内部的に獲得している兆候と捉えられる可能性がある。

【利益相反】なし。

【引用文献】

- Kapferer, J. (1994). *Strategic brand management: New approaches to creating and evaluating brand equity*. Simon and Schuster.
- Guo, S. S., Zhang, R., Liu, B., Zhu, Y., Ballard, D., Hayhoe, M., & Stone, P. (2021). Machine versus human attention in deep reinforcement learning tasks. *Advances in neural information processing systems*, 34, 25370–25385.
- Müller, R., Dürschmidt, M., Ullrich, J., Knoll, C., Weber, S., & Seitz, S. (2024). Do humans and convolutional neural networks attend to similar areas during scene classification: Effects of task and image type. *Applied Sciences*, 14(6), 2648.

(しもじょう あさや)

# A.H.マズローの言う 「自己実現」が殆ど見られない世界について

—現代の所謂「自己実現」社会との比較において—

三島齊紀

(神奈川大学 経済学部)

キーワード：マズロー、自己実現、現代社会

【研究背景】心理学や経営学に関する種々の著作を手にとると、“現代社会は、自己の有する能力を大いに発揮することが求められる、所謂「自己実現」社会である”…とのフレーズを間々目にする。そうして、この「自己実現 (Self-Actualization)」なる用語の前後に、その概念を提唱したとされる心理学者 A.H. マズローの名と、彼が提唱した欲求階層説について概説されることが多い。

ところで、当のマズローは日記をつける習慣があった。そうした彼の日々の走り書きを読んでいくと、晩年である 1969 年 11 月 28 日(死去する約半年前)に、「自己実現」が殆ど見られない社会について彼がメモ書きしていたものを見いだすことができる(34 の小段落から成る箇条書きの紙面である)。彼はそうした世界を「弱肉強食社会(jungle world)」、または「協働など見られないゼロサムゲーム、敵意に満ちた、悉無律な勝ち負け的社会観 (antisynnergic、zero-sum-game、adversary、win-lose Weltanschauung)」のもとにあるとしている(以下より、括弧内数字は日記内の段落順を指す)。

【彼が記した日記の内容の検討】マズロー曰く、そうした弱肉強食的な社会の根底には、「競争(competition)」(1)と「対立(Rivalry)」(1)があるという。「最も適した者が生き残ること = 生き残る者こそが勝者であること、生存のために個々が争い合うこと(“Survival of the fittest” = whoever survives & wins. Individual struggle for survival.)」(22)という考え方が浸透しており、故に他者との「共同作業が有効なものとして機能しない」(34)という。そうした社会では「人を馬鹿にし、他者に対して生のままの力を見せつけるかのような行動をとり、他者を従属させ他者の上に「乗る」(7)。そうした勝敗こそが重視される社会においては、「困惑と疑念、不信と混乱」(16)が彼方此方で見られる。換言すれば「世界は危険に満ちた場所」(30)であり、もって「危険から保護されるということがなにより重視される(Protection against dangers is first)」(30)「安全レベルの世界観」(30)のもとにあるという。優位な立場にいる「強い者(卓越した者)が全てのものを奪取し、力を手にし、服従をも手にする」(27)、「強い者には喰らう権利があり、弱い者は喰われるべき」(27)という考え方がそこにはある。そうした「弱肉強食社会における政治とは、力、地位、富、これらを得るための闘争」(29)に他ならないとマズローはする。

また、そうした「弱肉強食社会における経済は、自分が得られる全てのものを手中にする権利(Jungle economics = you have a right to everything you can get)」(28)が主張される、と。「これは俺様のものだ」という絶対的な立場(“It’s mine” = absolute statement)」(28)からものを言い、「他者への義務など何もなく(no obligation to others)」(28)、「他者への責任感の無さ(No responsibility to others)」(2)が蔓延っている。「自分にとって良い事とは何なのか(What’s good for me ?)」(2)だけが注視され、従業員が「報われないことに対する責任感など見られない」(2)。それどころか「徳を積むこと、正直であること、寛大であることには、あまりにも大きな

コストがかかってしまう」(26)。「ある人は、それを行うことで懲罰を受ける」(26)ことさえある。そこでは「俗的な生き方」(25)、「低次元な快樂」(25)を追い求める生き方が流布している、と。

こうした競争・対立を根底に置いた世界では、彼曰く、「踏みこじること、支配的な闘争」(24)が繰り返されるという。そのため人々は「嘘をつくこと」(24)も当然のことであると考えられる。そうした「視野が狭く」(13)、「疑念に基づき」(13)、「弱いのか強いのか」(13)だけの「二分法」(18)的な見方がなされることから、疑り深さが人々に観察される。「力、地位、富こそが究極的なもの」(21)であり、それらを有している者は、「いかなる気まぐれさや衝動を解き放つ」(21)ことも可能である。「陰では悪を称賛し、自分を肉食獣、虎であるかのようにみなし」(10)、そうした感覚を持つことに「恥ずかしいとする感覚も見られない」(10)。そこは「人間を買うこと(buying people)」(7)ができる世界である、と。

この種の弱肉強食社会で「なにより重要な原則となるものは、自分への忠誠(First principle = loyalty to self)」(3)に他ならず、結果として、人は「鎧兜を身につけ」(14)、「背中後ろに誰も立たせない」(14)ようになる。「自分一人だけ」(5)で悩み苦しみ、「リラックスなどできず、遊び心もなく、いつも心配で不安」(14)な状態に留め置かれる。もって、何をやっても無駄だ…と「怠惰(laziness)」(32)が見られるようになり、「馬鹿で無能力、だらだら過ごすことを好む(stupid、incapable ; prefers idleness)」(32)ようになっていき、「報酬もしくは懲罰によって動機づけられる」(32)ようになっていく。

こうした社会においては、「他者を認めず、他者を気にかけて、他者の意見に耳を傾けることはなく」(4)、「自慢し、俺は大物なのだ」(15)と「偉そう」(15)に振る舞い、「誰かを助けてあげようという衝動などない」(15)者が多数見られる。また、そうした世界では、性が従属を表したり、支配を示すための道具ともなる(9)、と。

【結果】上記までを概観すると、我々が日々目の当たりしている所謂「自己実現」社会と呼ばれるものが、実際のところは、マズローが「自己実現」が殆ど見られないとする世界と非常に近似したものであると感じざるを得ないのではなからうか。

【考察】ここまで見てくると、著者であるマズローが主張した「自己実現」が殆ど見られないとする世界と、現状の所謂「自己実現」社会と呼ばれるものの間には、どうしてこれほどの近似性が見られるのか…という疑問が生まれてこざるをえない。言い換えれば、彼の言う自己実現の原義は何であるのかを再度、丁寧に渉猟していく必要があるのは明らかな今般ではなからうか。

【引用文献】Lowry, R. J. (1979), *The Journals of A. H. Maslow, Volume II*, C.A.: Brooks/Cole Publishing Company., pp. 1208-1211.

(みしま むねのり)

# ロール・プレイングの可能性

## 教育現場をささえる取組み(3)

○時田 学

(日本大学商学部)

キーワード:ロール・プレイング・学校教育・教師

【目的】 文部省は1965年に「生徒指導の手引き」(文部省, 1965)を公刊し, 教育現場での活用に使っていた。その後, 1981年に「生徒指導の手引」として改訂が行われ, 生徒指導の基本的な指導・資料として使われていた(文部科学省, 1981)。さらに, 2010年に「児童生徒にかかわるすべての教職員や, 教育委員会をはじめその他教育にかかわる多くの関係者などに読まれ, 具体的な指導や研修に大いに活用されることで, 生徒指導の一層の充実が進められること」(文部科学省, 2010)として「生徒指導提要」(文部科学省, 2010)が示された。その後の社会状況, 法整備等の状況変化を背景として「生徒指導提要」(改訂版)という改訂版が示された(文部科学省, 2022)。この中では, 特に「近年, いじめの重大事態や暴力行為の発生件数, 不登校児童生徒数, 児童生徒の自殺者数が増加傾向にあるなど」(2022, 文部科学省)という事態に対する今日的な対応がなされていると指摘されている(高橋, 2023)。

一方, 今回の改訂の主たる目的の一つと考えられる「いじめ」の記述の中で, 「学校においては, 道徳科や学級・ホームルーム活動などの時間に, 実際の事例や動画などを教材に児童生徒同士で検討したり, いじめ場面のロールプレイを行ったりするなど, 体験的な学びの機会を用意することが求められます」(文部科学省, 2022, P.132)という箇所が認められる一方で, 中学校道徳指導書(1962)では「生徒を当惑させ, その感情を傷つけるような役割を演じさせることは避けるべきである」との記述が劇化に対する注意として示されており, 体験的な学びの実施時に慎重さが求められるのではないかと考えられる。

「生徒指導提要」(改訂版)(文部科学省, 2022)の趣旨から鑑みると, 本書の教育の現場における影響力は大きいと推察される。そこで, 上記の記述に関する研究の現状について検討するため, 昨年度に続いて, 現時点での同書籍に対する研究動向について調査し, 基礎的資料収集を目的として, 以下の検討を行った。

【方法】 「生徒指導提要」(改訂版)(文部科学省, 2022)の現在における研究動向, 特にロール・プレイング(同書ではロールプレイと表記), と学習指導要領(文部科学省, 2017)で使用されている役割演技などの語句について, 文献・資料上の出現状況, を確認した。確認対象としては, 大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立情報学研究所(NII)の提供しているCiNii(NII 学術情報ナビゲータ)を用いて行った。検索時期は, 2025年5・6月時点の複数回行った。

【結果】 はじめに「生徒指導提要」を検索語として検索を行ったところ, すべての著作物:391件, 研究データ0件, 論文342件, 本40件, 博士論文0件, プロジェクト9件という結果が示された。昨年度から比較すると全体で72件(22.1%)件の増加となっている。

次に, 「生徒指導提要」(改訂版)を検索語として検索を行ったところ, すべての著作物:64件, 研究データ0件, 論文56件, 本7件, 博士論文0件, プロジェクト1件0件という結果が示された。論文の区分が全体で10件(21.2%)の増加となっている。また, 「生徒指導提要」(改訂版)と「いじめ」を検索語として検索を行ったところ, す

べての著作物:4件, 研究データ0件, 論文4件, 本0件, 博士論文0件, プロジェクト0件という結果が示された。わずかながら増加がみられた。一方, 生徒指導提要と役割演技・ロールプレイ・ロール・プレイング(ロールプレイングを含む)を検索語として検索を行ったところ, すべての著作物:2件, 研究データ0件, 論文2件, 本0件, 博士論文0件, プロジェクト0件という結果が示された。しかし, 生徒指導提要(改訂版)と, 役割演技・ロールプレイ・ロール・プレイング(ロールプレイングを含む)を検索語として検索を行ったところ, いずれの場合も, すべての著作物:0件, 研究データ0件, 論文0件, 本0件, 博士論文0件, プロジェクト0件という結果が示された。

【考察】 「生徒指導提要」(改訂版)(文部科学省, 2022)が刊行された時期を考慮すると, 現時点の検索結果として論文に区分される著作物がいまだ約20%以上増加していることは, 刊行年から引き続き本発行物への教育関係者の関心の高さを示すものと考えられる。

一方で, 検索語として, 役割演技・ロールプレイ・ロール・プレイング(ロール・プレイングを含む)を検索語に加える形で同書の検索を行った結果については, 論文が2件確認されたが, (改訂版)を検索語に加えた場合は有効な著作物は確認されなかった。この2件について, その内容を確認したところ, いずれも教員を養成する課程における技法の使用にとどまっており, 実際の教育現場での児童・生徒に対する体験的な使用ではなかったことが明らかになった。これは, 体験的な学びを取り入れる場合に, 十分な配慮, 例えば劇化を取り入れる際の注意点(文部省, 1962)や, ロール・プレイングを実施する場合, 多数の留意点(時田, 2019)があることなどを踏まえた結果であるとも考えられるが, ロール・プレイングや役割演技についての有効な活用法や, 学校現場での活用にあたって留意すべき点などを具体的かつ明確化し, それらの情報を集積・提供していくことが早急に求められている。その一助となるよう, 即興劇的技法やアクションメソッドを用いて行う治療的, 教育的集団技法の研鑽に努めている, 「日本心理劇学会」では, 特に学校におけるロール・プレイングのよりよい活用に向けてその, 方法や在り方について資料もまとめており(日本心理劇学会, 2024)それらの活用なされるようさらに内容を充実させていきたいと考えている。

【利益相反】 本研究における利益相反(COI)は認められない。

### 【引用文献】

文部省 1962 中学校道徳指導書

文部省 1965 生徒指導の手引き

文部省 1981 生徒指導の手引(改訂版)

文部科学省 2010 生徒指導提要

文部科学省 2017 小学校学習指導要領

文部科学省 2022 生徒指導提要(改訂版)

日本心理劇学会 2024 学校におけるロール・プレイングのよりよい活

用に向けて<https://psychodrama.jp/iinkai/studentguideline/>

高橋典久 2023 概要解説「生徒指導提要(改訂版)」の概要 生徒指導提要(改訂版)前文と解説 学事出版 10-13

時田 学(2019)ロール・プレイングを教育現場の中で生かすために 日本応用心理学会第86回大会発表論文集 81

本研究は, 日本大学商学部の研究助成を受けた。記して感謝する。

(ときた がく)

# 障害者の趣味活動とウェルビーイングの関連性：質的研究による考察

○成井 隆友<sup>1</sup> 時田 学<sup>2</sup>

(<sup>1</sup> 日本大学大学院総合社会情報研究科人間科学専攻 <sup>2</sup> 日本大学商学部)

キーワード：障害者 趣味活動 ウェルビーイング

【目的】本研究の目的は、障害者が日常的に取り組む趣味活動（大坊, 2005）が、ウェルビーイングを構成する幸せの4因子のうち、「ありのまま因子（佐伯・蓮沼・前野, 2012）」との関係に対し、質的手法を用いて明らかにすることである。本研究が「ありのまま因子」に着目したのは、障害者にとってこの因子が自己肯定感や自分らしさの受容と深く関係しており、趣味活動がそれを支える重要な手段（佐伯・蓮沼・前野, 2012）であると考えられるためである。本調査の設計においては、インタビュー項目の妥当性を確認するため、先行調査として健常者に対する予備的インタビューを実施する。最終的な研究対象は（聴覚障害者、知的障害者、脳の障害者、発達障害者の方々を障害者と定義する）障害者ではあるが、対象者に適切なインタビュー内容であるかについて検討を行うために、健常者へのインタビュー調査を行う。

具体的には、趣味活動が健常者の幸福度（ありのまま因子）に与える影響を明らかにすることを目指す。これは、健常者へのインタビュー調査を行うために、障害者のデータと比較するための基準を確立し、趣味活動が幸福度に与える影響について多様な視点を得ることを通じて、質問内容や方法が適切かを事前に確認し、研究結果を広範な集団に一般化するために重要である（荒尾・潮見, 2014）。

【研究背景】障害者のウェルビーイングに関する研究は、近年益々注目を集めている。例えば、林ら（2025）は、特別支援教育の支援策といった福祉的な観点を視野に入れ、ウェルビーイングの向上に寄与することを示している。また、ウェルビーイング学会（2025）は、ウェルビーイングに関する研究を推進して障害者おり、趣味活動がその一環として重要視されている。これらの研究（林他, 2025）（ウェルビーイング学会, 2025）は、趣味活動が障害者（杉野, 2009）のウェルビーイングに重要な役割を果たすことを示唆している。更に、一般社団法人日本リハビリテーション工学協会（2025）は、趣味活動が身体的健康にも寄与することを示している。このように、趣味活動が障害者の全体的なウェルビーイングに与える影響についての理解を深めることが重要である。

【方法】調査対象は健常者（男性6名・女性4名, 平均年齢54歳（8～66歳））とし、趣味活動についてインタビュー調査を行った。障害者についての趣味活動とウェルビーイングの関連性についての研究を行う前段階として、今回は健常者の趣味活動についてインタビュー調査（質的データ分析：テーマ分析法、質的データ整理技法）を行った。また、前野ら「幸せの四つの因子（佐伯・蓮沼・前野, 2012）を参考に【やってみよう因子（やりがい・強み）関連】、【ありがとう因子（つながり・感謝）関連】、【なんとかなる因子（前向き・楽観）関連】、【ありのまま因子（独立性・自己肯定感）関連】を基に、インタビュー内容を構築し、上記の理由により、基本情報、「ありのまま因子」のインタビューのみ検討した。以下にインタビュー内容を示す。

基本情報：あなたの名前、年齢を教えてください。  
趣味活動：あなたが現在取り組んでいる趣味活動を教えてください。【ありのまま因子（独立性・自己肯定感）関連】  
・あなたは趣味活動をしているとき、自分らしさを感じることはありますか。

## 【結果】

	趣味活動 年代 性別	調査内容をまとめ小見出しをつけた
A	スキー40 女	自分が楽しむ
B	ギター60 男	他者とのつながりの中で
C	園芸 20 男	自分でアレンジできる庭
D	登山 40 男	自分のペースで登る
E	着物 50 女	自分に集中できる
F	キャンプ 20 男	自分だけのキャンプ
G	占い 50 女	自分の力を皆に伝える
H	野球 10 以下男	野球を通して自分らしさを発揮できる
I	土壌改良男	自分に集中してゾーンに入る
J	園芸・食事 50 女	自分の好きな通りにできる。

Fig1: 「ありのまま因子」の分析結果。縦軸（A～J）は回答者（Hは10歳未満により保護者による回答、障害者インタビュー調査でも若年層を扱う。横軸は「ありのまま因子」のテーマ分析結果で、趣味活動のある各年代の男女を対象とし、調査内容をまとめ小見出しを作成）。

【考察】結果より、参加者の多くが、趣味活動を通じて「自分のペースでできる」「自分に集中できる」といった体験を語り、他者に左右されずに自己を肯定する傾向が見られた。これは「ありのまま因子」の特性と一致しており、趣味活動がこの因子の促進に寄与する可能性が示唆された。本研究では「ありのまま因子」のみに焦点を当てた。これは全ての因子を同時に扱うことで分析が分散し、趣味活動と自分らしさとの関係に関する検討が不十分となる可能性があるためである。予備調査としての性質上、参加者の負担や調査時間の観点からも、対象因子を限定する必要があった。他の因子については、今後の本調査にて段階的に検討し障害者にも同様の調査を行い、趣味活動を通じた自分らしさの実感、幸福度の向上に寄与する可能性があるため趣味活動がウェルビーイングに与える影響をさらに明らかにしていく必要がある。

【利益相反】利益相反：無。

## 【引用文献】

- 荒尾 雅文・潮見 泰藏(2014). 障害者の幸福度は健常者と差があるのか? 第49回日本理学療法学会大会(横浜).
- 大坊郁夫(2005). 趣味活動と主観的ウェルビーイングの関連. 心理学評論, 48(1), 45-62.
- 林尚示, 安井一郎, 鈴木樹, 眞壁玲子, 元笑予, 下島泰子(2025)「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を図る特別活動の実践課題. 東京学芸大学教育実践研究推進本部.
- 一般社団法人日本リハビリテーション工学協会(2025). 身体活動とウェルビーイング 障害者スポーツから自然体験活動まで. 日本リハビリテーション工学協会.
- 佐伯・蓮沼・前野(2012). 主観的well-beingとその心理的要因の関係 日本心理学会大会発表論文集, 76, (0).
- 杉野聖子(2009). 障害のある人の余暇活動の保障とその支援における現代的課題—教育と福祉の連携について—日本体育大学紀要, 9 (1), 59-70.
- ウェルビーイング学会(2025). ウェルビーイングレポート 日本版 2025. ウェルビーイング学会. (なるいたかとも・ときたがく)

# 中学校部活動への所属が心理社会的成長に与える影響の縦断的検討：

## 教員の働き方改革と部活動の地域移行期における教育的意義の再評価

○大門耕平<sup>1</sup> 駒田淑久<sup>2</sup> (非会員) 来田宣幸<sup>3</sup>

(<sup>1</sup>東北北学院大学 <sup>2</sup>近江兄弟社中学校 <sup>3</sup>京都工芸繊維大学)

キーワード：部活動、中学校、心理社会的成長

**1.【目的】**本研究は、現代の部活動が抱える課題（教員の長時間労働問題や指導者の専門性不足、不適切な指導）を認識した上で、中学校における部活動が生徒の成長を促進する重要な教育的機会であることを、客観的なデータに基づき実証することを目的とする。具体的には以下を明らかにする。

### 1.部活動所属の有無が生徒に与える影響の解明。

調査初期（春）および調査後期（冬）のそれぞれの時点において、部活動に所属する生徒と所属しない生徒の間で、自己肯定感、ソーシャルスキル、学校での不安感、学校での存在感の各項目に統計的に有意な差が存在するかを検証する。

### 2.部活動への所属が春から冬にかけての期間における生徒の心理社会的な変化に与える影響の解明。

各測定項目について、部活動に所属する生徒と所属しない生徒の間で、春から冬への変化量に統計的に有意な差があるかを検証し、部活動への所属が、これらの心理社会的な側面の成長や改善を促進する効果を有するかを明らかにする。

上記の実証分析結果に基づき、少子化や教員の働き方改革、地域移行といった外部環境の変化に直面する中学校部活動が依然として有する教育的意義を明確にする。これにより、今後の学校教育における部活動の適切な位置づけ、より効果的な活動内容の検討、および生徒の健全な発達を支援するための指導体制の構築に向けた基礎的な知見を提供することを目指す。

## 2.【方法】

**2.1 調査対象と期間：**対象は、近畿圏のA中学校に在籍する1年生から3年生までの生徒とし、2022年度の春期から2024年度の冬期までの3年間、計6回データを収集した。

**2.2 調査項目：**質問紙調査では、生徒の心理社会的な成長を測定するため、自己肯定感、ソーシャルスキル、学校での不安感、学校での存在感の4つの指標を用いた。

**2.3 データ分析：**SPSS Statistics 23.0を用いて分析した。主な分析方法は以下の2点とした。

**1. 特定時点における群間差の検証：**春期および冬期の各調査時点において、部活動所属群と非所属群の間で各心理社会的な指標の平均値に統計的に有意な差があるかを分析した。

**2. 経時的変化における群間差の検証：**各生徒の「冬期の値 - 春期の値」を「変化量」と定義し、この変化量を用いて部活動所属群と非所属群の間で独立サンプルt検定を実施し、これにより、部活動への所属が、心理社会的な側面の成長や改善を促進する効果を有するかを検証した。

## 3.【結果】

### 3.1 春期および冬期における群間比較

表1. 各心理社会的指標の部活動所属有無による平均値の比較

	所属あり			所属なし			t検定
	母数	平均値	±標準偏差	母数	平均値	±標準偏差	
春期							
不安感	895	3.38	± 1.16	175	3.30	± 1.14	
存在感	929	3.43	± 1.05	182	3.30	± 0.97	**
自己肯定感	929	1.64	± 0.91	182	1.74	± 0.95	
ソーシャルスキル	895	3.81	± 0.74	176	3.62	± 0.78	
冬期							
不安感	724	3.64	± 1.13	126	3.54	± 1.09	
存在感	831	3.63	± 0.89	138	3.50	± 0.91	**
自己肯定感	831	1.63	± 0.89	138	1.70	± 0.90	
ソーシャルスキル	815	3.88	± 0.75	136	3.73	± 0.90	

\*p<.05, \*\*p<.01

春期および冬期の各調査時点における部活動所属群と非所

属群の心理社会的指標の平均値を比較し、表1に示した。

その結果、存在感については、春期および冬期のいずれの時点においても、部活動所属群の生徒は非所属群の生徒と比較して有意に高い値を示した。その他においては部活動所属群の値が良い傾向ではあったが有意差は認められなかった。

### 3.2 経時的変化における群間比較

春期から冬期への各心理社会的指標の変化量について、部活動所属群と非所属群の間で比較した。その結果、存在感の変化において部活動所属群の生徒は非所属群の生徒と比較して、有意な増加を示した。また、自己肯定感の変化においても部活動所属群の生徒は非所属群の生徒と比較して、有意な増加を示した。不安感の変化およびソーシャルスキルの変化については、有意な増加はみられなかったが、部活動所属群の生徒の変化量の値が高い傾向がみられた。

表2. 経時的変化における群間比較

	所属あり			所属なし			t検定
	母数	平均値	±標準偏差	母数	平均値	±標準偏差	
不安感の変化	780	0.03	± 0.85	175	-0.01	± 0.79	
存在感の変化	750	0.07	± 0.56	182	-0.01	± 0.64	*
自己肯定感の変化	729	0.46	± 1.01	182	0.36	± 1.25	**
ソーシャルスキルの変化	780	0.15	± 0.90	176	0.06	± 0.82	

\*p<.05, \*\*p<.01

## 4.【考察】

本研究では、中学校部活動への所属が生徒の心理社会的成長に与える影響を、特定の時点での状態差および経時的変化の観点から縦断的に検討した。

### 4.1 特定時点における部活動所属の意義

特定時点における部活動所属の有無と心理社会的指標との関係では、春期および冬期のいずれにおいても、部活動所属生徒は非所属生徒と比較して、学校での存在感が有意に高い値を示した。これは、部活動が学校内での生徒の帰属意識や居場所の感覚を育む上で、非常に重要な役割を果たしていることを示唆している。

### 4.2 経時的変化における部活動の成長促進効果

本研究の最も重要な発見は、部活動への所属が、春から冬にかけての生徒の存在感と自己肯定感の有意な増加（成長）に寄与している点である。この結果は、部活動が単に生徒の心理社会的な状態を良好に保つだけでなく、実際にこれらの側面を積極的に育成・促進する機能を持っていることを強く示唆している。

### 4.3 結論

本研究は、中学校部活動が生徒の学校での存在感の維持・向上、そして自己肯定感の成長を促進する重要な教育的機会であることを実証した。この知見は、部活動の持続可能な発展と、生徒の健全な発達を支援するための今後の教育実践に資する基礎的なデータを提供するものである。

【利益相反】利益相反 (conflict of interest; COI) 無し。

### 【参考文献】

- 吉田浩之 来田宣幸 2014 中学校における日常的な学習・生活場面・時間帯を想定した生徒指導 学校心理学研究。  
Rosenberg, M. (1965) Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ: Princeton University Press  
菊池章夫、「Social Skill 尺度の作成」、『東北心理学研究 38号』、東北心理学会、1998、67-68  
(おおかど こうへい・こまだ としひさ・きだ のりゆき)

# 接客業における顧客対応力尺度の開発

## カスタマーハラスメント対策施策の効果計測に向けて

○岩崎翔<sup>1</sup> 設楽一碩<sup>1</sup> 吉岡隆宏<sup>1</sup> 紺野剛史<sup>1</sup> 島田恭子<sup>2,3</sup> 桐生正幸<sup>2,3</sup>

(<sup>1</sup>富士通株式会社 <sup>2</sup>一般社団法人ココロバランス研究所 <sup>3</sup>東洋大学)

キーワード：顧客対応力尺度，因子分析，カスタマーハラスメント

**【目的】**近年，カスタマーハラスメント（カスハラ）が深刻な社会問題となっている。サービス業従事者の46.8%が直近2年以内にカスハラ被害を受け、その半数が心身に持続的な悪影響を感じている（UAゼンセン，2024）。国や自治体は対策を強化しており，組織でも従業員を守る取り組みが求められている。しかしながら，従業員の顧客対応力を計測可能な心理尺度はなく，従業員研修等の施策の効果を適切に評価できないことが課題である。そこで本研究では，顧客対応業務における冷静な対応やストレス管理力を計測する「顧客対応力尺度（Customer Responsiveness Rating Scale, CRRS）」を開発する。

### 【方法】

**項目生成** 関連する既存尺度 Customer Service Skills Self Assessment (CSSSA)，Kikuchi's Scale of Social Skills (KiSS-18)，ストレスマネジメント自己効力感尺度 (SMSE-20)，コーピング特性簡易尺度 (BSCP) などを参照し，心理学またはカスタマーハラスメントに精通した専門家6名によるKJ法で44項目を作成した。5件法（1＝とてもそう思う～5＝全くそう思わない）で評定。解析時は逆転符号化し，値が大きいほど顧客対応力が高いものとした。

**サンプル** オンライン調査により回答を収集した。日本の人口統計に沿って抽出したオンライン調査回答者19,000名から接客業従事者2,383名をスクリーニングし，質的チェックを経て1,299名を解析対象とした。なお，オンライン調査にあたっては，調査の目的，回答の任意性，途中での回答中止の自由，ならびに個人情報保護について説明を行い，これらに同意した参加者のみから回答を収集した。

### 分析手順

- ① 記述統計量を算出し極端な偏り（天井／床効果を含む）のある項目を除外。ただし，該当項目はなかった。
- ② 因子数決定については，並行分析・BICとも6因子を支持（MAP=5因子，調整MAP=8因子）。最終的に，解釈容易性を考慮し6因子を採用した。
- ③ 因子抽出は最尤法を，回転はプロマックス回転を使用。
- ④ 主負荷量  $|\lambda| \geq .50$ ，副因子への負荷量  $|\lambda| < .30$  を満たす30項目のみを残し，それ以外の14項目は交差負荷項目として除外した。
- ⑤ 探索的モデルの自己評価として，同一データに対してモデル適合度（CFIおよびRMSEA）を算出した。また，信頼性（内の一貫性），妥当性（並存的妥当性）についても評価した。

なお，本研究は東洋大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：P240044）。

### 【結果】

**因子構造** 表1に因子別サマリを示す。ストレスマネジメント関連（F1,F5,F6）と対応スキル関連（F2-F4）とに大別された。6因子で累積分散説明率は54.5%であった。

**モデル適合度** CFI=.909, RMSEA=.060 (90%CI .058-.063) と概ね適合水準を満たした。

**信頼性** 6つの全ての下位尺度でクロンバックの $\alpha$ 係数が0.7以上であり，十分な内の一貫性を有する。

**並存的妥当性** 以下の4つの関連尺度を用いた：日本語版顧客関連ソーシャルストレス尺度（CSSJ）（島田・桐生・Dormann, 2023），Kessler Psychological Distress Scale (K6)，Utrecht Work Engagement Scale (UWES)，およびWHO-HPQ（主観的生産性指標）。CRRS総得点はCSSJ（ $\tau = -.165$ ,  $p < .001$ ）およびK6（ $\tau = -.309$ ,  $p < .001$ ）と弱い負の相関を示し，一方でUWES（ $\tau = .346$ ,  $p < .001$ ）およびWHO-HPQ（ $\tau = .368$ ,  $p < .001$ ）とは弱い正の相関を示した。これらの結果は，「対応力が高いほどストレス指標は低下し，業務エンゲージメントおよび生産性は向上する」という事前仮説と整合的であった。

**【考察】**本研究は，困難な顧客や状況に直面した際に自身のストレスを調整しつつも適切に対応できる力を測る，顧客対応力尺度（CRRS）を提案した。適合度を同一データで検証した点と，接客業全体を対象としたため業種横断の一般化が未確認であることは課題である。今後は現場導入し，カスハラ研修の効果指標として従業員が自らの顧客対応力を可視化・自己モニターする支援に活用したい。

**【謝辞】**本研究において，富士通株式会社の飯田智絵氏には多大なるご助力を賜りました。心より感謝申し上げます。

**【利益相反】**本研究は富士通株式会社の研究費で実施した。

### 【引用文献】

UAゼンセン：「カスタマーハラスメント対策アンケート調査結果」記者レクチャー資料，2024。Available at <https://uazensen.jp/wp-content/uploads/2024/06/6.5記者レク資料.pdf>

島田恭子，桐生正幸，Christian Dormann：顧客関連ソーシャルストレス日本語版尺度作成の試み，2023年度日本行動医学会学術集会，2023。

（いわさき しょう・しだら かずひろ・よしおか たかひろ・この たけし・しまだ きょうこ・きりう まさゆき）

表1. 因子別サマリ。

因子	下位概念	項目数	Cronbach's $\alpha$	代表項目
F1	ストレスの自己管理	8	0.885	イライラしそうなときでも，リラックスすることができる。
F5	楽観性	2	0.793	問題が生じたとき，「何とかなる」と希望を持つ。
F6	自己肯定感	2	0.757	自分のことをそれなりに評価できる。
F2	コミュニケーション力	7	0.904	客が怒っている時に，上手く落ち着かせることができる。
F3	ホスピタリティ	6	0.839	思いやりをもって，人と接するようにしている。
F4	問題解決力	5	0.773	問題が生じたとき，今までの体験を参考に考える。

# AI 技術と心理学の融合によるカスタマーハラスメント 対応教育プログラムの開発と実証

コールセンター従業員を対象とした実証実験による教育効果の検証

○紺野剛史<sup>1</sup> 岩崎翔<sup>1</sup> 設楽一碩<sup>1</sup> 吉岡隆宏<sup>1</sup> 島田恭子<sup>2,3</sup> 桐生正幸<sup>2,3</sup>  
(<sup>1</sup>富士通株式会社 <sup>2</sup>一般社団法人ココロバランス研究所 <sup>3</sup>東洋大学)

キーワード：心理尺度、ロールプレイ訓練、カスタマーハラスメント

【目的】近年、サービス業従事者に対するカスタマーハラスメント（以下、カスハラ）は、深刻な社会課題として注目されている。UA ゼンセン（2024）の調査によれば、直近2年以内にカスハラ被害を経験した従業員は46.8%にのぼり、そのうち約半数が心身に持続的な悪影響を受けていると報告されている。こうした状況を受け、厚生労働省は2023年にカスハラによる精神障害を労災認定基準に追加し、東京都では2024年に全国初のカスハラ防止条例が制定されるなど、制度的な対策が進展している。一方、企業や組織においては、従業員のストレス軽減や生産性維持の観点から、実効性のあるカスハラ対応教育の整備が急務である。しかし、現状では有効性が科学的に検証された研修プログラムは乏しく、対応力の育成が困難な状況にある。

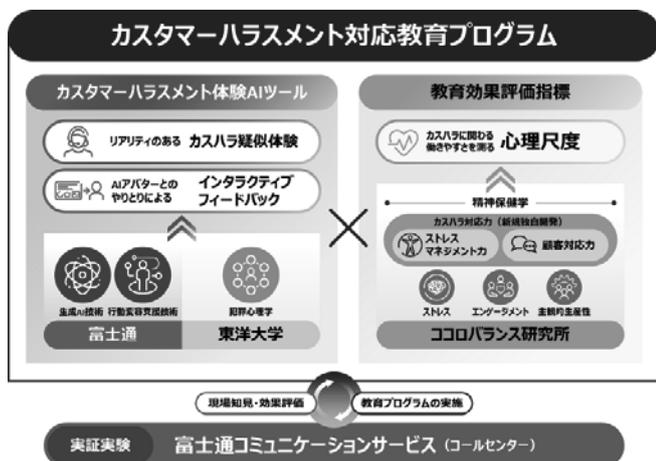
本研究の目的は、AI技術と心理学的知見を融合した「カスタマーハラスメント対応教育プログラム」を開発し、その有効性を実証的に検証することである。具体的には、AIを活用したロールプレイ訓練と、新たに開発した顧客対応力尺度（Customer Responsiveness Rating Scale: CRRS）を用いて、従業員の対応力、心理的負担、生産性への影響を多面的に評価する。

【アプローチ】本研究は、富士通株式会社、東洋大学、一般社団法人ココロバランス研究所の三者による産学連携の枠組みで実施された（Figure 1）。

富士通株式会社は、生成AI技術と行動変容支援技術を活用した「カスハラ体験AIツール」を開発した。本ツールは、体験者のバイタルデータ（心拍・呼吸）や発話内容をリアルタイムに解析し、AIアバターが個別にフィードバックを提供する。さらに、インタラクティブな対話機能を備え、体験者の納得感を高める設計となっている。

東洋大学は、犯罪心理学の知見に基づき、カスハラの典型的なシナリオを反映した訓練内容とフィードバック設計を担当した。

Figure 1  
実証実験のイメージ図



ココロバランス研究所は、教育効果を測定するための新規心理尺度（CRRS）を開発し、ストレス、エンゲージメント、主観的生産性などの指標と組み合わせて、プログラムの効果を多角的に評価した。

## 【方法】

### 1. 顧客対応力尺度（CRRS）の開発

既存の対人スキル尺度やストレス対処尺度を参考に、カスハラ状況における対応行動を測定する44項目を作成。日本の人口構成比を考慮したオンライン調査により、接客業従事者1,299名からデータを収集した。因子分析（最尤法・プロマックス回転）により因子構造を抽出し、クロンバッチの $\alpha$ 係数により信頼性を既存尺度との相関により妥当性を検証。

### 2. ロールプレイ訓練の効果検証

富士通コミュニケーションサービス株式会社（CSL）のコールセンターに勤務するオペレーター12名（女性10名、男性2名、平均年齢43歳）を対象に、2024年12月3日から2025年3月31日までの期間で実証実験を実施。参加者は介入群（カスハラ体験AIツール使用）と統制群（特殊詐欺体験AIツール使用）に分け、2回のロールプレイ訓練を実施した。訓練前、訓練直後、1か月後の3時点で、CRRS、CSSJ（顧客満足度）、K6（心理的苦痛）、WHO-HPQ（主観的生産性）を用いたアンケートを実施。介入効果は群間比較により検証し、訓練中の成功体験の有無と対応力の変化量の関連も探索的に分析した。本研究は東洋大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施された（承認番号: P240044）。

【結果】介入群において、1か月後のCRRSスコアが有意に向上した（ $t=2.10$ ,  $p=0.045$ , Hedges'  $g=0.29$ ）。また、主観的生産性も有意に改善された（ $t=2.23$ ,  $p=0.04$ , Hedges'  $g=0.44$ ）。これらの結果は、AIツールによる訓練が長期的に対応力と業務効率の向上に寄与する可能性を示している。

【考察】本研究は、AI技術と心理学的アプローチを融合した教育プログラムが、カスハラ対応力と主観的生産性の向上に有効であることを実証的に示した。特に、AIアバターとの対話を通じたフィードバックが、行動変容意欲を高め、長期的なスキル向上につながる可能性が示唆された。

【利益相反】本研究は富士通株式会社の研究費で実施した。

## 【引用文献】

UA ゼンセン：「カスタマーハラスメント対策アンケート調査結果」記者レクチャー資料，2024。Available at <https://uazensen.jp/wp-content/uploads/2024/06/6.5記者レク資料.pdf>

島田恭子，桐生正幸，Christian Dormann：顧客関連ソーシャルストレスサー日本語版尺度作成の試み，2023年度日本行動医学会学術集会，2023。

（このん たけし・いわさき しょう・しだら かずひろ・よしおか たかひろ・しまだ きょうこ・きりう まさゆき）

# カスタマーハラスメント体験 AI ツールを用いた訓練が 従業員の対応力と主観的生産性に及ぼす長期的影響

## コールセンターにおける実証研究

○設楽一碩<sup>1</sup> 岩崎翔<sup>1</sup> 紺野剛史<sup>1</sup> 吉岡隆宏<sup>1</sup> 島田恭子<sup>2,3</sup> 桐生正幸<sup>2,3</sup>  
(<sup>1</sup>富士通株式会社 <sup>2</sup>一般社団法人ココロバランス研究所 <sup>3</sup>東洋大学)

キーワード：ロールプレイ訓練, 生成 AI, カスタマーハラスメント

**【目的】**近年、サービス業従事者に対するカスタマーハラスメント（以下、カスハラ）による、従業員のストレス増加・生産性低下が深刻な社会課題として注目されている。UA ゼンセンの調査によれば、直近2年以内にカスハラ被害を経験した従業員は46.8%にのぼり、そのうち約半数が心身に持続的な悪影響を感じている。こうした状況を受け、厚生労働省は2023年4月には東京都等で全国初のカスハラ防止条例が施行されるなど、国や自治体による対策が進んでいる。

一方で、企業や組織においても、従業員を守るための具体的な対応力育成が求められている。しかし、現状カスハラ対策に有効な研修等がなく、対策が困難である。

本研究の目的は、AI技術と心理学の知見を融合した「カスタマーハラスメント体験 AI ツール」を開発し、その有効性を実証的に検討することを目的とした。具体的には、開発したAIツールを活用したロールプレイ訓練と新規開発した顧客対応力尺度（Customer Responsiveness Rating Scale: CRRS）を用いて、対応力、心理的負担、生産性への影響を評価する。

**【方法】**AIツールを活用したロールプレイ訓練と、新規開発した尺度CRRS、および、関連する既存尺度を用いて、従業員のカスハラ対応力、心理的負担、主観的生産性への長期的影響を評価する。

**参加者:**富士通コミュニケーションサービス株式会社(CSL、現パーソルコミュニケーションサービス)のコールセンターに勤務する現役オペレーター12名(女性10名、男性2名、平均年齢43歳)を対象とした。

**実験計画:**参加者を介入群(カスハラ体験AIツール使用)と統制群(特殊詐欺体験AIツール使用)に分け、2回のAIロールプレイ訓練を実施した。訓練前・直後・1か月後の3時点でアンケート調査を行った。

### 介入:

介入群:カスハラ体験AIツールを使用し、カスハラ顧客への対応をロールプレイ形式で体験。架空の専門家を模したAIアバターからフィードバックを受ける。

統制群:特殊詐欺体験AIツールを使用し、特殊詐欺顧客への対応をロールプレイ形式で体験。架空の専門家を模したAIアバターからフィードバックを受ける。

### 測定指標:

- CRRS (顧客対応力尺度):顧客対応力とストレスマネジメント能力を測定
- CSSJ (顧客関連ソーシャルストレス尺度):困難な顧客との遭遇頻度を測定
- K6 (心理的ストレス反応)
- WHO-HPQ (主観的生産性の尺度)
- 行動変容意欲:顧客対応を変えようとする意欲を測定(独自質問)

### 分析方法:

群間比較による介入効果の検証に加え、訓練中の成功体験(カスハラに対処できたと感じた経験)の有無と対応力の変化量の関連を探索的に分析した。統計解析には、対応のあるt検

定、対応のないt検定を用いた。効果量の指標としてHedges'  $g$ を算出した。

本研究は東洋大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施された(承認番号:P240044)。

**【結果】**介入群において、1か月後のCRRSスコアが有意に向上した( $t(5) = 2.10, p = 0.045, \text{Hedges}' g = 0.29$ )。また、主観的生産性も有意に改善された( $t(5) = 2.23, p = 0.04, \text{Hedges}' g = 0.44$ )。これらの結果から、AIツールの私用による長期的な対応力と業務効率の向上への寄与が示唆された。

一方、訓練直後の短期的な効果は限定的であったが、行動変容意欲は介入群で有意に高まった( $t(10) = 2.08, p < 0.05, \text{Hedges}' g = 1.11$ )。さらに、訓練中に成功体験を得た参加者は、対応力の向上が大きい傾向が見られた( $t(9) = 1.24, p = 0.12, \text{Hedges}' g = 0.71$ )。

参加者からは、AIツールによる客観的評価の有用性、実業務に即したシナリオの導入、リアルタイムアドバイス機能の追加など、改善に向けた具体的な提案が寄せられた。

**【考察】**本研究は、AI技術と心理学のアプローチを融合した教育プログラムが、カスハラ対応力と主観的生産性の向上に有効であることを実証的に示した。特に、AIアバターとの対話を通じたフィードバックが、行動変容意欲を高め、長期的なスキル向上につながる可能性が示唆された。一方で、短期的な効果が限定的であったことから、訓練設計にはさらなる工夫が求められる。成功体験の重要性が示されたことを踏まえ、難易度調整やリアルタイム支援の導入が、学習効果を高める鍵となる。また、参加者のフィードバックに基づき、実業務に即したシナリオやAIツールの応答精度の向上も今後の課題である。

統制群と比較して顧客対応力に有意な向上が見られなかった理由として、統制群が元々カスハラへの関心が高い傾向にあったことや、特殊詐欺という異なる種類の問題への対応を体験したことが自身の対応について見直すきっかけになった可能性が考えられる。

本プログラムは、従来のマニュアル型研修では得られにくい実践的な対応力を育成する新たな手段として、企業の人材育成やメンタルヘルス対策に貢献する可能性を持つ。

**【利益相反】**本研究は富士通株式会社の研究費で実施した。

### 【引用文献】

UA ゼンセン:「カスタマーハラスメント対策アンケート調査結果」記者レクチャー資料, 2024. Available at [https://uazensen.jp/wp-content/uploads/2024/06/6.5\\_記者レク資料.pdf](https://uazensen.jp/wp-content/uploads/2024/06/6.5_記者レク資料.pdf)

島田恭子, 桐生正幸, Christian Dormann: 顧客関連ソーシャルストレス尺度日本語版尺度作成の試み, 2023年度日本行動医学会学術集会, 2023.

(しだら かずひろ・いわさき しょう・こんの たけし・よしおか たかひろ・しまだ きょうこ・きりう まさゆき)

# 自傷行為の経験と解離傾向の関連の検討

一般健常群との比較から

○今井田貴裕<sup>1</sup> 小鹿祐祐<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>仁愛大学人間学部 <sup>2</sup>人間環境大学心理学部犯罪心理学科)

キーワード：自傷行為・解離傾向・確認的因子分析

## 【目的】

自傷行為は自分を傷つける行為の総称である。これまでに、自傷行為は心理的苦痛を緩和するために行われること (e.g., 井上, 2017) や、自傷行為者は自己否定的であること (今井田・福井, 2021) がわかっている。既存の自傷行為の尺度は、自傷行為を行う傾向の強さを捉えることが目的である (土井, 2013) ために自傷行為の経験頻度を捉えることができなかつたり、項目数が多い (岡田, 2002) ために心理的負担の懸念があつたりした。したがって、既存の自傷行為に関する尺度では、臨床実践における自傷行為のアセスメントツールとして用いにくいと考えられる。そのため、心理臨床実践で活用できる自傷行為に関する尺度の条件として、自傷行為の経験を少数項目でとらえることが不可欠であつた。

そこで、著者らは8項目で構成される自傷行為の経験尺度 (Measure of Experience Level of Self-Injury: MELSI) を開発した (今井田・小鹿, 2024)。MELSI は、精神疾患を有する人々のデータセットから、自傷の方法 (頭や手足・口・道具) で分類された3因子構造が見いだされた (今井田・小鹿, 2024)。しかし、この3因子構造の再現性を未検討である。

ところで、自傷行為の背景に解離の問題がある点がこれまでに指摘されてきた (e.g., Calati et al., 2017; Rallis et al., 2012)。解離とは、思考や感情などの心的過程が切り離されることにより一時的または持続的に人格の統合性が失われる体験のことである (田辺, 1994)。解離傾向が高まるにつれて、うつや自殺の可能性が高まるとされている (Maaranen et al., 2008)。なお、解離傾向の測定にはしばしば解離体験尺度 (Dissociative Experiences Scale: DES) が用いられるが、DESのカットオフ得点は30点であり、得点がそれ以上になると解離性障害の疑いがあるとされている (Bernstein & Putnam 1986)。よって、自傷行為を経験する人々の解離傾向の程度をそうでない人々と比較した上で把握する必要がある。

そこで、本研究では、自傷行為の経験する人々を対象にMELSIの因子構造の再現性を検討するとともに、自傷行為の経験する人々とそうでない人々の解離傾向の差を検討した。

## 【方法】

**調査協力者** Web調査サービスのSurveroidに依頼して、Web上の質問票調査を実施した。省力回答者を抽出する項目に不備のなかった740名 (男性228名、女性512名) の協力を得た。平均年齢は24.36歳 ( $SD=3.46$ ) であつた。

**質問票** 自傷行為の経験をMELSI (今井田・小鹿, 2024) で測定した。同尺度は、頭や手足による自傷行為 (項目例、頭を壁や柱にぶつける)、口による自傷行為 (項目例、手や足を噛む)、道具による自傷行為 (項目例、刃物で体を傷つける) に関する8項目で構成され、回答は5件法 (1. 経験なし、2. ほとんどしなかつた、3. した、4. かなりした、5. 頻繁にした) であつた。解離傾向をDES (Bernstein & Putnam, 1986) の日本語版 (田辺・小川, 1992) で測定した。同尺度は、解離傾向 (項目例、まるでそれが実際に起こっていることに思えるほど、空想や白昼夢に引き込まれることがある) に関する28項目で構成される。回答は11件法 (「1.0%」, 「2.10%」, 「3.20%」 ~ 「10.90%」, 「11.100%」) であつた。

**倫理的配慮** 本研究は第一著者の前所属先の研究倫理審査委員会の許可を得た (倫理審査許可番号: 2024E-001)。

## 【結果】

まず、本研究のデータセットを自傷行為の非経験群と経験群に分類した。MELSIの全ての項目に1と回答した232名を自傷行為非経験群に、MELSIのいずれかの項目に2~5と回答した508名を自傷行為経験群にそれぞれ分類した。

その後、自傷行為経験群を対象にMELSIに対する確認的因子分析を実施した。その結果、適合度の指標は概ね良好 ( $\chi^2(17)=44.51, p<.001, CFI=.98, TLI=.97, SRMR=.03, RMSEA=.06$ ) であつた。他方、信頼性分析を行った結果、頭や手足による自傷行為 ( $\alpha=.78, \omega=.80$ )、道具による自傷行為 ( $\alpha=.83, \omega=.83$ ) は良好であつたが、口による自傷行為 ( $\alpha=.67, \omega=.66$ ) は低かつた。また、頭や手足による自傷行為 ( $M=2.06, SD=0.89$ )、口による自傷行為 ( $M=2.25, SD=0.91$ ) は左寄りのデータを示し、道具による自傷行為 ( $M=1.81, SD=1.01$ ) は床効果を示した。以上の結果をTable 1に示した。

Table 1

自傷行為経験群を対象としたMELSIの確認的因子分析の結果

NO	項目	M	SD	F1	F2	F3	$h^2$
1	顔や頭を殴る	1.85	1.08	.85			.72
2	爪を噛む	2.30	1.25		.52		.27
3	刃物で体を傷つける	1.89	1.14			.80	.64
4	頭を壁や柱にぶつける	1.95	1.05	.86			.73
5	唇を噛む	2.47	1.13		.55		.30
6	大量に服薬する	1.72	1.05			.89	.79
7	手や足を噛む	1.99	1.15		.81		.65
8	物を殴ったり蹴ったりする	2.38	1.08	.54			.29

注) F1は頭や手足による自傷行為、F2は道具による自傷行為、F3は口による自傷行為を示す

最後に、群別で解離傾向の差を検討した。Welchのt検定の結果、自傷行為非経験群 ( $M=7.49, SD=13.80$ ) よりも自傷行為経験群 ( $M=19.44, SD=19.86$ ) の解離傾向のほうが有意に高かつた ( $t(621.46)=-9.46, p<.001, d=-0.66$ )。

## 【考察】

本研究で用いたデータセットの740名の68.65%である508名が何らかの自傷行為を行っていた。よって、自傷行為が一般健常群にも広く蔓延している可能性が示された。これは、先行研究 (e.g., 井上, 2017; 山口, 2021) と同様の結果であつた。

また、確認的因子分析の結果、MELSIは良好な適合度を示した。しかし、口による自傷行為の内的整合性が低く、道具による自傷行為に床効果が確認された。自傷行為者の多くが複数の方法を選択しない点 (関本・朝倉, 2019) を考慮すれば、MELSIの因子構造については、さらなる検討が必要であろう。

また、解離傾向は、自傷行為経験群のほうが自傷行為非経験群よりも有意に高かつた。これは、自傷行為の背景に解離傾向がある臨床事例 (加藤, 2018) や基礎的研究 (岡田, 2003) を裏付ける結果であつたといえよう。なお、近年ではDESのカットオフの値について、15~25程度の値を用いることを推奨する報告 (e.g., 猪飼・大河原, 2013; Wise et al., 2000) も少なくない。その点を考慮すると、一般健常群の自傷行為者であっても病的解離の可能性を考慮する必要がある。

## 【利益相反】

利益相反関係にある企業はない。

## 【引用文献】

今井田貴裕, 小鹿祐祐 (2024) 自傷行為の経験尺度 (MELSI) と否定的自己概念尺度 (SSNS) の作成, 日本健康心理学会第37回大会抄録集. (いまいだ たかひろ・こじか ゆずゆ)

# 社会人以降の対人関係と孤独感

## ——職場と職場外におけるハラスメント被害経験の影響——

○藤後悦子 大橋恵 井梅由美子  
(東京未来大学こども心理学部)

キーワード：ハラスメント被害、成人期、孤独感

**【目的】**社会人以降もメンタルヘルスの問題は重要である。社会人は、学生時代と比べると職場外でも家族内や親族、近所、子育ての親同士など多様な対人関係が存在する。対人関係のトラブルによる被害経験は、ハラスメントの文脈で語られることが多く、これらは、職場の中では徐々に顕在化されているが、職場外の地域や日常生活の実態はあまり明らかになっていない。

また、近年の成人期の問題に「孤独」がある。「令和5年版厚生労働白書」(厚生労働省, 2023)では、「孤独」と感じている年齢は男性では50代(47.6%)、女性では20代(50.3%)が高かった。対人関係のハラスメントを受け、孤立し、孤独を感じている可能性もある。そこで本研究では、成人期の孤独感に社会人以降の対人関係のハラスメント被害経験がどのように関連するのか検討することとした。

**【方法】**1. 予備調査：2023年11月に通信制大学の子育てに関する演習授業を受講している社会人24名( $M = 44.3$ ,  $SD = 16.22$ ; 男性3名, 女性21名)に社会人以降のハラスメント被害経験の有無を尋ねた。その結果、75%が被害経験ありと回答した。被害の発生場所は、職場が最も多く、続いて地域活動、親戚となった。

2. 本調査：研究期間と手続き：2024年2月下旬にオンライン調査を実施した。

調査参加者：4000名(男性1674名;  $M = 44.21$ ,  $SD = 12.43$ , 女性2326名;  $M = 50.60$ ,  $SD = 12.43$ )であった。うち既婚者60.5%, 子どもがいる者52.7%であった。

調査項目：デモグラフィック要因(年齢, 性別, 年収, 混居の有無, 子どもの有無), 職場及び職場外でのハラスメント被害経験の有無, 職場ハラスメント被害尺度(10項目)5件法, 職場外ハラスメント経験尺度(15項目)5件法, 日本語版 short-form UCLA 孤独感3項目版(Arimoto & Tadaka, 2019)を用いた。

倫理的配慮：東京未来大学の倫理審査の承認を得た。匿名性の担保, ネガティブな想起を伴うこと, 自由意思, 途中辞退が可能なこと, 学術的使用について参加者から同意を得た。

**【結果】**要約統計量：10代8名(0.2%), 20代345名(8.6%), 30代733名(18.3%), 40代1077名(26.9%), 50代1020名(25.5%), 60代以上817名(20.4%)であった。職業は、会社員1706名(42.7%), 会社員(契約・派遣)228名(5.7%), 経営者・役員96名(2.4%), 公務員117名(2.9%), 自営業182名(4.6%), 自由業59名(1.5%)等であった。

ハラスメント被害経験の実態：ハラスメント被害経験なしは2683名(67.1%)であった。ハラスメント被害経験ありと回答した1317人の内訳(複数回答)は、職場560名(42.5%), 家族248名(18.8%), 友人関係217名(16.5%), 近所181名(13.7%), 地域の間人関係(12.5%), 親同士の関係146名(11.1%), 親族123名(9.3%), 趣味のコミュニティ95名(7.2%), ネットの間人関係90名(6.8%)となった。

尺度構成と回帰分析：職場ハラスメント被害経験を因子分析(最尤法, プロマックス回転)し, 因子負荷量0.4以下, ダブルローディングの項目を削除し再度因子分析した結果,

固有値3.87, 1.05, 0.99, 0.64...と2因子が確認でき, 精神的攻撃6項目( $\alpha = .82$ ), 身体的攻撃2項目( $\alpha = .83$ )の2因子に分類された。

続いて, 職場外ハラスメント被害経験を同様に因子分析した結果, 1因子構造(15項目,  $\alpha = .95$ )が確認された。

次に孤独感を目的変数, その他の変数を説明変数としてロバスト回帰分析を実施した(Table 3)。その結果, モデルは有意であり( $F(7,691) = 12.17, p < .001$ ), VIFは2.3以下

であり多重共線性は問題なかった。職場ハラスメント被害経験の精神的攻撃( $\beta = .30, p < .001$ )の効果があり, 職場で精神的攻撃の被害に遭った者ほど, 孤独感が強かった。

**【考察】**社会人以降のハラスメントの被害経験は, 職場外被害も一定数いたものの, 職場での精神的攻撃が孤独感と関連していた。孤独感には精神的疾患や自殺, ひきこもりなど様々な問題につながる要因であるため, 積極的に職場のハラスメント予防を行う必要性が示唆された。

**【利益相反】**本研究における利益相反はない。

**【引用文献】**

- Arimoto, A. & Tadaka, E. (2019). Reliability and validity of Japanese versions of the UCLA loneliness scale ver 3 for use among mothers with infants and toddlers: a cross-sectional study. *BMC Women's Health*, 19,105.DOI:10.1186/s12905-019-0792-4
- 厚生労働省 (2023). 令和5年版厚生労働白書 <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/22/dl/zentai.pdf> (とうごえつこ・おおはしめぐみ・いうめゆみこ)

Table1

職場ハラスメント尺度の因子分析(最尤法, プロマックス回転)

項目	F1	F2	共通性
<b>F1 精神的攻撃(<math>\alpha = .82</math>)</b>			
人格を否定するような言動を行われた。	.78	-.18	.47
できないことを強制的に押し付けられた。	.69	.05	.52
長時間にわたって叱責を繰り返行われた。	.65	.10	.52
集団で無視された。	.57	.11	.41
不当な噂を流された。	.54	.05	.33
自分だけ必要な連絡をもらえなかった。	.53	.11	.37
<b>F2 身体的攻撃(<math>\alpha = .83</math>)</b>			
たたいたり、けられたりなど、身体的暴力を振るわれた。	-.04	.90	.77
物を投げつけられた。	.04	.79	.66
因子間相関	F2	.61	

Table2

職場外ハラスメント尺度の因子分析(最尤法, プロマックス回転)

項目	F1	共通性
自分だけ必要な連絡をもらえなかった。	.81	.65
自分だけ行事や飲み会などに誘われなかった。	.79	.63
仕事や役割には関係ない私的な雑用を強制的に行わされた。	.79	.63
できないことを強制的に押し付けられた。	.79	.62
プライベートの内容についてしつこく聞かれた。	.76	.58
長時間にわたって叱責を繰り返行われた。	.76	.57
集団で無視された。	.75	.56
物を投げつけられた。	.75	.56
たたいたり、けられたりなど、身体的暴力を振るわれた。	.75	.56
性的な嫌がらせをされた。	.74	.55
家族に対して、嫌なことを言われたり、されたりした。	.74	.55
不当な噂を流された。	.74	.54
SNSで誹謗・中傷された。	.73	.53
子どもに対して、嫌なことを言われたり、されたりした。	.72	.52
人格を否定するような言動を行われた。	.67	.45

Table3

ロバスト回帰分析の結果

変数名	孤独3項目
精神的攻撃	.30 **
身体的攻撃	-.05
職場外ハラスメント	.06
性別	-.04
結婚有無	-.05
子ども有無	.08 +
世帯年収	-.07 +
$R^2$	.11 **

\*\*  $p < .01$ , +  $p < .10$

性別：1男性, 2女性 婚姻：1既婚, 2未婚 子ども：1あり, 2なし

# 中学受験をめぐる親子の心理的葛藤②

## 中学受験経験者に聞いた受験当時の親子関係と現在の幸福感

○井梅由美子, 藤後悦子, 大橋 恵  
(東京未来大学)

キーワード: 中学受験, 教育マルトリートメント, 主観的幸福感

### 【目的】

年初の受験シーズンになると、ニュース等でも話題となるが、首都圏では20%程度の小学生が中学受験を経験する(首都圏模試センター, 2025)。中学受験には地域差も大きく、私立中学に通う生徒の全国平均は7.9%であるが、東京都では26.3%と(文部科学省, 2025)、一部の子のみが体験する特別なイベントではなくはなっている。中学受験は専門の塾に通うなど多くの学習をこなす必要があり、子どもの年齢も幼いことから親が過干渉になりやすい。そのため、教育虐待や教育マルトリートメントにつながる危険性もある(浅見, 2024)。こうした中学受験の経験はその後の心の健康にどのような影響を及ぼすのであろうか。

そこで本研究では、中学受験を経験した成人男女を対象にオンライン調査を実施し、中学受験時の親子関係やモチベーション等が現在の幸福感に与える影響について検討した。

### 【方法】

調査対象者 19~39歳の中学受験経験者700名。  
調査時期と手続き 2025年1月末~2月初旬に調査会社に依頼し、オンラインにて実施した。  
調査内容 ①フェイス項目として年齢、性別、就業形態、婚姻の有無、最終学歴、年収、中学受験の可否等を尋ねた。②現在の主観的幸福感についてDienerら(1985)の尺度を用いて尋ねた(5項目、5件法)。さらに、中学受験時を振り返ってもらい、③中学受験時のモチベーション(4項目、5件法)、④父母の教育マルトリートメント(浅見, 2024)(各10項目、5件法)、⑤親の受験への関与(7項目、5件法)、⑥中学受験の影響(大橋, 投稿中)(12項目、5件法)、⑦家族雰囲気(5項目、6件法)について等尋ねた。  
倫理的配慮 東京未来大学の倫理審査の承認を得た。調査の実施にあたって参加は自由意思であること、匿名性が担保されること、学術的な利用のみ行うこと等を説明した。

### 【結果】

回答に不備があった者を除き、男性338名(M=30.22歳, SD=5.46)、女性335名(M=29.71歳, SD=5.29)、計673名を分析対象とした。

はじめに、各尺度について項目分析を行い、使用する項目を選定した。教育マルトリートメント尺度(父母それぞれ)、主観的幸福感、受験へのモチベーション、親の受験への関与、家族雰囲気については一因子でのまとまりが確認された。受験の影響については、因子分析の結果、2因子が得られた。第1因子は「中学受験のための勉強をしたことで

人間として成長できた」など「ポジティブな影響」、第2因子は「中学進学後、無気力になった」などが見られ、「ネガティブな影響」とした。各尺度のα係数、平均値、および標準偏差はTable1に示す通りである。平均値の性差は、父母の教育マルトリートメント、受験の影響の2因子、家族雰囲気で見られ、いずれも男性の方が高かった。

つぎに、現在の主観的幸福感に関連する要因を明らかにするために、受験時の親や家族関係、受験の影響、モチベ

Table2  
重回帰分析結果

	男性	女性
(中学受験時)	β	β
教育マルトリートメント		
父合計	.252 **	.284 **
母合計	-.022	-.166
家族雰囲気	.351 **	.364 **
受験への関与	-.046	.082
受験の影響		
ポジティブ	.339 **	.251 *
ネガティブ	-.177 *	-.180 *
受験モチベーション	-.038	-.064
受験結果	-.065	-.099
(現在)		
婚姻状況	.100	.130 *
最終学歴	-.015	-.037
年収	-.014	.015
調整済R <sup>2</sup>	.351	.387

ョン、受験結果、フェイス項目等を説明変数として、男女それぞれ重回帰分析を行った(Table2)。分析の結果モデルは有意であり(男性F(11, 223) = 8.37, p < .01; 女性F(11, 179) = 6.70, p < .01)、多重共線性も問題なかった。男女とも父親のマルトリートメントがあるほど、家族雰囲気が良いほど、受験について良い影響を感じているほど、悪い影響を感じていないほど

現在主観的幸福感が高いことが分かった。さらに女性では、既婚であることが幸福感を高めていた。

### 【考察】

本研究では、中学受験経験者に当時の状況を振り返り回答してもらったことで、受験の経験が現在の幸福感に及ぼす影響について検討した。男女とも現在の幸福感に最も影響していたのは家族関係であり、家族の仲の良さやくつろいだ雰囲気が幸福感を高めていた。また、受験結果や最終学歴、年収等実際の結果ではなく、受験を自らを成長させる良い経験であったと考える等、捉え方の方が重要であることが推測された。ただし、女性は婚姻の有無が幸福感に影響していた。最後に、教育マルトリートメントは、父親に限っては予想に反してプラスに働いていた。これは父親の熱心さと受け止めたためであろうか。この点については今後さらなる検討が必要である。

【利益相反】 記すべき利益相反はない。

### 【引用文献】

浅見里咲(2024). 中学受験期に起きるエデュケーショナル・マルトリートメント 日本教育心理学会第66回総会  
Diener, E. et al (1985). The Satisfaction with Life Scale. Journal of Personality Assessment, 49, 71-75.  
首都圏模試センター(2025). 受験情報ブログ

<https://www.syutoken-mosi.co.jp/blog/entry/entry004634.php>

文部科学省(2025). 令和6年度学校基本調査

【付記】 東京未来大学特別研究助成により行われた。

(いうめ ゆみこ・おおはし めぐみ・とうご えつこ)

Table1

各下位尺度のα係数, 平均値(標準偏差)

下位尺度名	α	男性	女性	t値
教育マルトリートメント				
父合計	.963	2.37 (1.06)	1.99 (0.99)	4.65 **
母合計	.960	2.36 (1.08)	2.10 (1.05)	3.01 **
幸福感	.906	3.02 (1.03)	2.94 (0.99)	0.97
受験モチベーション	.816	2.96 (0.94)	2.95 (0.95)	0.11
受験の影響				
ポジティブ	.902	3.15 (0.88)	2.99 (1.00)	2.21 *
ネガティブ	.904	2.72 (0.98)	2.37 (0.97)	4.66 **
受験への関与	.891	3.09 (1.11)	2.91 (1.10)	1.87
家族雰囲気	.922	3.93 (1.25)	3.67 (1.37)	2.53 *

\*\* p<.01 \*p<.05

# Social Networking Addiction Scale 日本語版の開発

## —因子構造と信頼性の検討—

○中谷智美<sup>1</sup> 福井義一<sup>2</sup> 堀 孝司<sup>3</sup>

(<sup>1</sup>名古屋産業大学 <sup>2</sup>甲南大学 <sup>3</sup>甲南大学大学院人文科学研究科)

キーワード: SNS 依存, Social Networking Addiction Scale, 尺度開発

### 【目的】

全世界的規模のインターネット普及には、功罪両面がある。インターネットやスマホへの依存、ゲーム障害などは、悪影響の典型例であると言える。わが国におけるインターネット利用は、特に他者との交流を目的とした Social Networking Service (SNS) に偏っていることから、こうした依存の大半は SNS 依存であると言っても過言ではない。今後、わが国において SNS 依存の実態を捉え、エビデンスに基づいた対策を講じるには、それを正確に測定可能な尺度が必要不可欠であるが、現状ではそうした尺度は見当たらない。

そこで本研究では、SNS 依存を行動依存モデル (Griffiths, 2005) の 6 つの構成要素 (突出, 気分変容, 耐性, 離脱症状, 葛藤, 再燃) で捉えることが可能な Social Networking Addiction Scale (Shahnawaz & Reman, 2020) の日本語版 (SNAS-J) を作成し、その因子構造と信頼性を確認することを目的とした。

### 【方法】

**調査協力者:** 一般成人と大学生の協力を得た。因子構造の検討のために 1,788 名 (男性 1,008 名, 女性 770 名, その他 10 名,  $Mage = 35.10$  ( $SD = 14.45$ )) の、再検査信頼性の検討のために、852 名 (男性 486 名, 女性 361 名, その他 5 名,  $Mage = 37.46$  ( $SD = 14.36$ )) のデータを使用した。

**使用尺度:** 試作された SNAS-J (加堂他, 2023a, b; 澤田他, 2024) の一部の項目の翻訳を修正した。なお、質問票には他の尺度も含まれていた。

**手続き:** 事前にインフォームド・コンセントが得られた者だけが、オンライン調査に参加した。

Table 1 18項目を対象とした探索的因子分析 (最小二乗法・オブリミン回転) の結果

No.	項目	因子番号	I	II	III	IV	V	VI	共通性
<b>I: 突出 (<math>\alpha=.89</math>)</b>									
03.	勉強中でも、仕事中でも、SNSの更新をチェックしてしまう		.85	-.02	.01	.01	.04	-.02	.77
04.	どんな課題や活動を始める前であっても、自分のSNSアカウントをチェックしてしまう		.85	.03	.03	-.02	-.05	-.02	.71
02.	朝、目が覚めたら、すぐにSNSを開く		.71	-.01	-.04	.02	.12	.03	.61
01.	勉強中でも、仕事中でも、頭の中ではSNSのことを考えてしまう		.70	.06	.05	.04	-.05	.03	.62
<b>II: 離脱症状 (<math>\alpha=.91</math>)</b>									
12.	SNSにログインできないときには、いつでもイライラする		-.02	.91	-.00	-.01	-.05	-.04	.71
11.	SNSにログインできる状況にないと、悲しく感じる		.01	.86	-.05	.01	.03	.01	.74
13.	SNSを使えないと、もどかしく感じる		.01	.72	.03	.02	.08	.06	.72
14.	SNSのための時間をとらないと、落ち着かなくなる		.10	.65	.11	.04	-.00	.08	.74
<b>III: 再燃 (<math>\alpha=.93</math>)</b>									
19.	SNSを使うのを止めようとしたのに、失敗したことがある		-.02	-.02	.94	-.03	-.02	-.01	.78
21.	何度もSNSにかかる時間を減らそうと試みたが、ことごとく失敗に終わった		.06	.02	.84	.04	-.04	.01	.82
18.	SNSにかかる時間を削るのに失敗したことがある		-.03	-.01	.83	.04	.05	.01	.75
20.	自分では、どうしてもSNSにかかる時間を削ることができない		.13	.10	.61	.05	.09	.03	.77
<b>IV: 葛藤 (<math>\alpha=.81</math>)</b>									
16.	両親や他の人からSNSの利用状況について尋ねられたら、嘘をつく必要がある		.04	-.03	-.02	.82	-.02	.01	.66
15.	自分がSNSにかけている時間の長さを隠そうとする		-.05	.05	.04	.80	.03	-.01	.70
<b>V: 耐性 (<math>\alpha=.85</math>)</b>									
09.	昔に比べると、SNSにかかる時間が増えた		.02	.03	.02	.03	.85	.00	.82
08.	近頃、SNSにかかる時間が増える一方だ		.24	.05	.11	.07	.46	.14	.76
<b>VI: 気分変容 (<math>\alpha=.81</math>)</b>									
07.	SNSをしているときには、いつでもリラックス感がある		.03	-.03	-.05	.03	-.05	.91	.77
06.	SNSは、気分を上げるのに役立つ		-.04	.08	.09	-.03	.08	.70	.64
<b>因子間相関</b>									
		I	.69	.65	.57	.63	.49		
		II	—	.58	.59	.50	.55		
		III		—	.66	.53	.38		
		IV			—	.45	.33		
		V				—	.52		

**倫理的配慮:** 本研究は、第二著者の所属先のヒトを対象とした研究倫理審査の承認を得て実施された (承認番号 24-06)。

### 【結果】

全 21 項目を対象とした探索的因子分析 (最小二乗法・オブリミン回転) の結果、原版と同様の 6 因子構造が得られたが、項目 5 「イライラしたり、取り乱したりして、こころが落ち着かないときには、いつでも SNS を開く (気分変容)」, 10 「充足感を得るには、以前よりも長い時間、SNS をする必要がある (耐性)」, 17 「SNS をしなければならない、またはしたいがために、眠るべきだと分かっているのに、自分をごまかしてでも続けてしまう (葛藤)」が原版の想定とは異なる因子に高い因子負荷量を示した。そこで、これらの 3 項目を削除した 18 項目に対して同様の探索的因子分析を実施した結果、原版通りの単純構造が得られた。その結果を、Table 1 に示した。次に、21 項目版と 18 項目版を対象に、それぞれ確認的因子分析を実施した。その際、6 因子間に共分散を設定したモデルと、共分散ではなく一般因子  $g$  を設定した階層的因子分析モデルの計 4 モデルで比較した。その結果、18 項目を対象とした階層 6 因子モデルの適合度が最も良好であった。Table 2 に各モデルの適合度を示した。

Table 2 確認的因子分析

構造	項目数	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	SRMR	AIC	CAIC
6因子	21	.913	.885	.946	.071	.048	1845.81	2158.70
	18	.949	.927	.971	.058	.032	941.94	1221.90
階層 6因子	21	.943	.922	.967	.056	.035	1243.92	1589.75
	18	.956	.936	.976	.054	.034	824.03	1120.46

また、内的整合性を検討した結果、Cronbach の  $\alpha$  係数は十分な値を示した (総得点:  $\alpha = .95$ , 突出:  $\alpha = .89$ , 気分変容:  $\alpha = .81$ , 耐性:  $\alpha = .85$ , 離脱症状:  $\alpha = .91$ , 葛藤:  $\alpha = .81$ , 再燃:  $\alpha = .93$ )。さらに、再検査信頼性を検討した結果、気分変容 ( $r = .64$ ) を除いて、高い値が示された (総得点:  $r = .86$ , 突出:  $r = .80$ , 耐性:  $r = .77$ , 離脱症状:  $r = .77$ , 葛藤:  $r = .70$ , 再燃:  $r = .82$ )。

### 【考察】

本研究から、SNAS-J は SNS 依存を行動依存の構成要素モデル (Griffiths, 2005) に基づいて測定可能な信頼性の高い尺度であることが確認された。ただし、除外された 3 項目が、原版と異なる因子に負荷した理由を、方法論的な誤謬や文化的差異、項目内容自体の問題のいずれかに帰すべきかを特定し、尺度のさらなる改善につなげる必要があるだろう。

### 【利益相反】

この発表に関連し開示すべき利益相反関係にある企業等はありません。

(なかたに とみみ・  
ふくい よしかず・  
ほり たかし)

本研究は、一般社団法人安心ネットづくり促進協議会 2023 年度研究支援事業による助成を受けて実施された。

# 大学生における行動的感情制御方略のスタイルと抑うつ・不安の関連

○村田康徳 加藤佳子

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

キーワード：行動的感情制御 抑うつ 不安

## 【目的】

感情制御方略がメンタルヘルスに与える影響は広く知られており、適応的・不適応的な方略についても研究されている。しかし通常個人は複数の方略を組み合わせて使用すると考えられる。そして、どのような行動的感情制御方略の組み合わせがあり、そのスタイルが抑うつ・不安とどのように関連するかは十分に検証されていない。本研究では Behavioral Emotion Regulation Questionnaire (BERQ) が測定する 5 つの行動的感情制御方略についてクラスター分析でスタイル (以下、BER スタイルとする) を検討し、さらに各 BER スタイルにおける抑うつや不安のレベルを比較することを目的とした。

## 【方法】

**手続きと分析対象者** 関西地方の国立大学生を対象として質問紙調査を実施した。最終的な分析対象者は 367 名 (男性：148 名，女性：219 名， $19.31 \pm 0.90$  歳) であった。

## 調査内容

**行動的感情制御方略** Kraaij & Garnefski (2019) の BERQ を翻訳した「日本語版 BERQ (加藤他, 2021) (20 項目)」を使用した。① Seeking Distraction (SD) ( $\alpha = .75$ )、② Withdrawal (WD) ( $\alpha = .84$ )、③ Actively Approaching (AA) ( $\alpha = .83$ )、④ Seeking Social Support (SSS) ( $\alpha = .89$ )、⑤ Ignoring (IG) ( $\alpha = .81$ ) の 5 つの感情制御方略を使用する頻度を測定した。

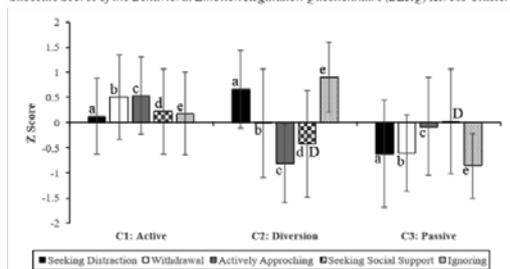
**抑うつ症状** 抑うつを測定する尺度として「Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D) 日本語版 (島他, 1985) ( $\alpha = .87$ )」(20 項目)を使用した。

**状態不安** 不安を測定する尺度として State-Trait Anxiety Inventory (STAI) 日本語版 (清水・今榮, 1981) を用いた。なお、本研究では「状態不安」を測定する A-State ( $\alpha = .91$ ) の 20 項目を使用した。

**分析方法** BERQ の 5 つの下位尺度得点を標準化し、Ward 法による階層的クラスター分析をおこなった。その後、デンドログラムからクラスター数を決定した。

また抑うつおよび不安について、シャピロ・ウィルク検定を行ったところ、抑うつ ( $p < .001$ )・不安 ( $p < .001$ ) とともに正規分布に従うとは言えなかった。そのためクラスター間の抑うつおよび不安の分散分析として、クラスカル=ウォリス検定をおこない、Bonferroni 補正付き Dunn 検定による多重比較をおこなった。

Figure 1  
Subscale Scores of the Behavioral Emotion Regulation Questionnaire (BERQ) Across Clusters



Note. Lowercase letters indicate  $p < .001$ ; uppercase letters indicate  $p < .01$ . (error bars show standard errors).

## 【結果】

### クラスター分析によるスタイルの分類 (Figure 1)

デンドログラムより、3 つのクラスターに分かれると判断した。クラスター1は AA や WD が高く、積極的に対処する「アクティブ型 (155 名)」，クラスター2は SD や IG が高く AA が低い、問題回避的な行動が特徴的な「ディバージョン型 (88 名)」，クラスター3はいずれの得点も低く、あまり行動を取らない「パッシブ型 (124 名)」と命名した。

### BER スタイルでの抑うつ・不安の特徴 (Table 1, Table 2)

BER スタイルを独立変数、抑うつを従属変数とした分散分析の結果、BER スタイルによる主効果が認められた。多重比較の結果、アクティブ型 ( $17.52 \pm 9.27$ ) はディバージョン型 ( $14.44 \pm 8.72$ ) やパッシブ型 ( $13.94 \pm 8.41$ ) よりも抑うつの程度が有意に高かった。

また、不安を従属変数とした場合でも分散分析の結果、BER スタイルによる主効果が認められた。多重比較の結果、アクティブ型 ( $40.55 \pm 10.12$ ) はディバージョン型 ( $37.39 \pm 8.98$ ) よりも不安の程度が有意に高かった。

Table 1  
Means, Standard Deviations, and Kruskal-Wallis Test of Depression and Anxiety Scores by Behavioral Emotion Regulation Questionnaire Clusters

Cluster	n	Depression		Anxiety	
		M	SD	M	SD
Active	155	17.52	9.27	40.55	10.12
Diversion	88	14.44	8.72	37.39	8.98
Passive	124	13.94	8.41	38.74	9.67

Kruskal-Wallis —  $H(2) = 12.92, p = .002, \epsilon^2 = .03$   $H(2) = 7.99, p < .018, \epsilon^2 = .02$

Note.  $N = 367$ . Depression was measured with the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale. Anxiety was measured with the State Anxiety subscale of the State-Trait Anxiety Inventory.

Table 2  
Results of Bonferroni-Adjusted Dunn Tests for Depression and Anxiety Scores

Comparison	z	p.unadj	p.adj	r
Depression				
Active - Diversion	2.62	0.009	0.027	.14
Active - Passive	3.31	0.001	0.003	.17
Diversion - Passive	0.35	0.725	1.000	.02
Anxiety				
Active - Diversion	2.71	0.007	0.020	.14
Active - Passive	1.83	0.067	0.202	.10
Diversion - Passive	-1.01	0.311	0.933	.05

## 【考察】

アクティブ型は他の 2 群と比較して、抑うつおよび不安のスコアが有意に高いことが示された。積極的に課題へ踏み込む姿勢は、現代の大学生が抱えるストレス (学業・就職・対人関係など) を顕在化させやすいことが考えられる。一方で、気晴らしや無視といった BER スタイルは感情的な負荷を回避し、抑うつ・不安を軽減していると考えられる。しかしながら、AA や SSS の活用の低さが問題解決を遅らせる懸念もある。

## 【利益相反】

本研究に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

## 【引用文献】

加藤 佳子・伊藤 俊樹・岡崎 香奈・山根 隆宏 (2021). 日本語版 Behavioral Emotion Regulation Questionnaire の開発 (2) 心理測定特性、信頼性、妥当性の検証 日本心理学会大会発表論文集, 85. [https://doi.org/10.4992/pacjpa.85.0\\_PB-045](https://doi.org/10.4992/pacjpa.85.0_PB-045) (むらた やすのり・かとう よしこ)

# 単身中高年者における孤独感と時間的切迫感が将来展望に及ぼす影響

○清水佐紀<sup>1,2</sup> 村山陽<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>和洋女子大学人文学部心理学科 <sup>2</sup>東京都健康長寿医療センター研究所)

キーワード：単身中高年者、孤独感、時間的切迫感、将来展望

## 【目的】

単身中高年者の孤立や貧困リスクの高さが示されており、その対策が求められている（西村，2021）。余暇時間に充実した活動を行うことはどの年代にも良い影響をもたらすことが多くの研究から示されている。その一方で、時間に余裕がない状態である時間的切迫感はストレス要因の1つである（Peter et al, 2025）。内閣府の令和6年版高齢者白書によると、本邦の65歳以上の就業者数は20年連続で上昇しており、従来と比べ中高年者の余暇時間が減少することが予想される。心理学の領域では個人の将来に対する認識は将来展望と呼ばれ、個人のwell-being（Zhang J et al, 2019）や人生満足度（Brianza E et al, 2019）への肯定的な影響が示されているが、村山ら（2021）によれば、単身男性中高年者は中年後期から高齢期に至るまで将来に対する展望を諦める意識が強いことが示されている。

そこで本研究では、単身中高年者の孤独感と時間的切迫感が将来展望の諦めや不安に及ぼす影響について検討することを目的とした。

## 【方法】

40-60代の調査会社Aのモニター1320人にWeb調査を行った。時間的切迫感の測定には、Time pressure scale

（Roxbutgh, 2004）を逆翻訳して用いた（9項目4件法）。孤独感には、UCLA孤独感尺度（豊島・佐藤，2021）を用いた。将来展望については、将来不安と将来諦めという2因子からなる将来展望意識尺度（村山ら，2021）を用いた。生活時間の測定は、平日の睡眠時間、余暇時間を尋ねた。各尺度の得点は、時間的切迫感尺度は得点が低いほど時間に余裕がなく、UCLA孤独感尺度は得点が高いほど孤独を強く感じており、将来展望意識尺度は得点が低いほど将来に対する諦め、不安を感じていることとなる。

研究実施にあたり、東京都健康長寿医療センター倫理審査委員会の承認を受けた（承認番号：30健イ事第1647号）。

## 【結果】

協力者の属性は男性660名（50%）、女性660名（50%）、平均年齢は54.2歳であった。雇用形態は正規雇用が367名（27.8%）、非正規雇用が599名（45.3%）、自営業等（7%）であった。Spearmanの相関分析の結果をTable1に示した。将来展望（諦め）は孤独感との間に弱い正の相関（.227）が見られた。将来展望（不安）と各変数間では、孤独感との間に弱い正の相関（.384）、時間的切迫感との間に弱い正の相関（.328）、将来展望（諦め）との間に弱い正の相関（.367）が見られた。

将来展望（諦め）を従属変数、属性と平日の睡眠時間ならびに余暇時間、孤独感、時間的切迫感を独立変数として重回帰分析を行った（Table2）。その結果、性別、年齢は将来展望（諦め）に有意で正の影響を、平日余暇時間と孤独感将来展望（諦め）に有意で負の影響を与えていることが示された。調整済み決定係数の値は、0.061であった。次いで、将来展望（不安）を従属変数、属性と平日の睡眠時間ならびに余暇時間、孤独感、時間的切迫感を独立変数として重回帰分析を行った（Table3）。その結果、性別、年齢は将来展望（不安）に有意で正の影響を、平日余暇時間と孤独感将来展望（諦め）に有意で負の影響を与えていることが示された。調整済み決定係数の値は、0.303であった。

Table1 変数間の相関関係

変数	2	3	4	5	6	7	8
1 性別	-.03	.034	-.006	-.04	-.001	.088**	.002
2 年齢		.074**	.224**	-.075**	.231**	.079**	.090**
3 平日睡眠時間			-.002	-.018	.232**	.031	.048
4 平日余暇時間				-.085**	.230**	-.029	.044
5 孤独感					-.202**	-.227**	-.384**
6 時間的切迫感						.095**	.328**
7 将来展望（諦め）							.367**
8 将来展望（不安）							

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table2 重回帰分析の結果（従属変数：諦め）

変数	B	$\beta$	P値
性別	0.448	0.081	0.001**
年齢	0.022	0.063	0.016*
平日睡眠時間	0.000	0.006	0.811
平日余暇時間	-0.001	-0.065	0.014*
孤独感	-0.113	-0.078	0.004**
時間的切迫感	-0.022	-0.043	0.126
将来展望（不安）	0.394	0.377	0.001**
$R^2$ （調整済み）	0.173		

従属変数：将来展望（諦め）

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table3 重回帰分析の結果（従属変数：不安）

変数	B	$\beta$	P値
性別	-0.220	-0.042	0.072*
年齢	-0.002	-0.005	0.830
平日睡眠時間	-1.922	-0.001	0.973
平日余暇時間	0.000	-0.002	0.388
孤独感	-0.372	-0.269	0.001**
時間的切迫感	0.123	0.245	0.001**
将来展望（諦め）	0.304	0.318	0.001**
$R^2$ （調整済み）	0.303		

従属変数：将来展望（不安）

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

## 【考察】

将来展望意識尺度の各因子を従属変数に設定して重回帰分析を行った結果、各因子共に孤独感と関連があることが示された。一方で、諦めは余暇時間の長さに関連があり、不安は時間的切迫感と関連があるという相違が示された。単身中高年者の「自分の人生はどうなっても構わない」という将来への諦めに対しては余暇時間の確保、「先のことを考えると暗くなる」という将来への不安に対しては時間的切迫感の軽減が有効である可能性が示唆された。今後は、余暇時間の活動内容や時間的切迫感の軽減の方法について検討する必要がある。

## 【利益相反】

本発表に関し、開示すべき利益相反事項はない。

## 【主要引用文献】

村山陽・山崎幸子・長谷部雅美・高橋知也・小林江里香（2021）. 単身中高年者における将来展望を抑制する意識の検討 老年社会科学, 43（1）, 26 - 35.  
西村幸満（2021）. 生活不安定層のニーズと支援：シングル・ペアレント, 単身女性, 非正規就業者の実態 勁草書房  
Peter, M., Rigotti, T., Holtmann, J., Vahle-Hinz, T.（2025）. I'll be back! Examining adaptive change processes in emotional exhaustion and time pressure. J Occup Health Psychol, 30(1), 1-15.

（しみずさき・むらやまよう）

# カロリー・塩分量の栄養表示が選択行動に与える影響

○杉山聡<sup>1</sup> 幸田仁志<sup>2</sup> 来田宣幸<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 <sup>2</sup>京都工芸繊維大学基盤科学系)

キーワード：健康、カロリー、塩分

【目的】近年、健康意識が高まるなか、飲食産業全般では、栄養情報を表示する取り組みが進められている。栄養表示により、消費者自身が健康に配慮した食品を選択することで、将来的な疾患のリスク低減につながると期待される。

ただし、栄養表示の効果は、その表示方法によって消費者の注意の向き方や選択行動に違いが生じる。井上(2022)は、カロリー情報の表示位置が消費者の食品選択に及ぼす影響について検討した結果、注目されやすい位置にカロリー情報を表示することで低カロリーの食品が選ばれやすくなる傾向を確認している。しかし、これらの報告における実際の摂取量の差は小さく、行動変容としての効果は限定的であった。この要因として、表示する栄養素を「カロリー」にした点が影響している可能性があり、行動変容を促す上では、表示する栄養素の種類についても検討する必要がある。

特に、塩分の過剰摂取は、世界的に重要な健康課題の1つである。日本WHO協会では、成人の世界平均ナトリウム摂取量が食塩相当量で1日当たり約10.78gといわれているが、これはWHOが推奨する5g未満という基準を大きく上回っている。また、厚生労働省の食事摂取基準2025年度版において、食塩(ナトリウム)は、「国民の栄養摂取の状況からみてその過剰な摂取が国民の健康に影響を与えている」として注目されている。したがって、栄養素のなかでも塩分量の表示が、行動変容に影響を及ぼす可能性がある。

そこで本研究の目的は、カロリーのみならず塩分量の表示が食品選択に与える影響を検討することとする。また、メニュー上で確認できる栄養表示の多さが選択行動に与える影響についても検討した。

【方法】対象者は、一般の大学生40名であった。対象者には、「食事をとる前のお腹がすいた状態を想像してください」と指示したうえで、提示されたメニューから食品を選択させた。メニューは、縦書き形式とし、各メニューには、定食(10種類)、小鉢(5種類)、デザート(5種類)の3項目(20種類)を記載し、それぞれのカテゴリから1品ずつ選択する形式とした。料理名の上部には、カロリー(kcal)及び塩分量(食塩相当量、g)を表示した。栄養情報及び料理名は、実際の飲食店のメニューとその栄養成分を参考に作成した。価格は全て1500円で統一した。メニュー選択時の栄養表示条件は、以下の4条件を設定した。カロリーと塩分量を表示する条件(カロリー・塩分条件)、カロリーのみを表示する条件(カロリー条件)、塩分量のみを表示する条件(塩分条件)、カロリーも塩分量も表示しない条件(なし条件)の4つとした。対象者はメニューの異なる4つのメニュー群に対して4条件で実施した。また、本研究は京都工芸繊維大学倫理審査委員会の承認(承認番号：2025-26)を受けて実施した。

【結果および考察】表示形式の違いによるメニュー選択行動の傾向を評価するため、選択されたメニューのカロリーおよび塩分量を表示形式別に示した。選択されたメニューのカロリーについては、表示なし条件(905 ± 238 kcal)と比較して、カロリー条件で低い値であった(780 ± 232 kcal)。また、塩分量についても、表示なし条件(5.91 ± 2.35 g)と比較して、塩分条件で低い値であった(4.85 ± 2.36 g)。この結果から、カロリーおよび塩分量表示によって高

カロリー・高塩分の食品の選択を抑制する行動に影響する可能性が示唆された。

カロリーと塩分の比較に関して、カロリー条件では、カロリー数は表示なし条件に対して86.2%であったのに対して、塩分については、塩分条件では、表示なし条件に対して82.0%を示し、塩分量のほうがより低下していた。このことは、カロリーと比較して、塩分の表示の方が、食品選択行動に与える影響が大きかった可能性を示唆している。この背景には、日本においてカロリー過多よりも塩分過多がより健康の課題と認識されていることが影響している可能性が考えられる。

次に、提示する情報量が多かった場合の影響について検討する。塩分のみを表示した条件を100%とした場合、塩分とカロリーの両方が表示された条件のカロリーは95.9%であった。同様に、カロリーのみを表示した条件を100%とした場合、塩分とカロリーの両方を表示した場合のカロリーは93.3%であった。単一の栄養成分のみが表示された条件では80%台まで低下したのに対し、複数表示の場合にはどちらも90%台であり、食品選択行動に与える影響が小さかったといえる。また、カロリーと塩分量の低下率の差については、単独での効果と比較して複数の情報が提示された場合で、その差は小さい値となった。このことは、複数の栄養成分が同時に表示されることで、それぞれへの意識が分散し、行動選択への影響が弱まる可能性を示唆している。

以上より、カロリー、塩分の栄養成分の表示は、表示された成分の摂取を抑える方向での行動変容を一定程度促進する効果が確認された。また、カロリーと比較して塩分でその効果がやや大きかった点は、対象者の食生活に関する健康状況に依存する可能性が示唆される。さらに、提示される情報量が増加すると、行動変容の効果が低下することが示されたことから、行動選択に対する栄養表示については、多様な要因が影響していることを示すものである。

表1 表示形式別のカロリーと塩分

	なし	カロリー	塩分	カロリー&塩分
	M ± SD	M ± SD	M ± SD	M ± SD
カロリー(kcal)				
定食	573 ± 191	509 ± 195	547 ± 182	518 ± 205
小鉢	102 ± 84	94 ± 73	104 ± 99	82 ± 75
デザート	230 ± 145	177 ± 66	212 ± 109	228 ± 134
計	905 ± 238	780 ± 232	864 ± 266	828 ± 263
塩分(g)				
定食	4.29 ± 1.89	3.96 ± 1.67	3.48 ± 1.59	3.48 ± 1.60
小鉢	1.32 ± 1.00	1.38 ± 1.03	1.11 ± 0.96	1.31 ± 0.99
デザート	0.31 ± 0.37	0.14 ± 0.12	0.26 ± 0.27	0.32 ± 0.34
計	5.91 ± 2.35	5.48 ± 2.06	4.85 ± 2.36	5.11 ± 1.84

【利益相反】特になし

【引用文献】

井上裕珠(2022). カロリー情報の表示位置が消費者の食品選択に及ぼす影響. 日本応用心理学研究, 47(3), 165-177.

(すぎやま そういち・こうだ ひとし・きだ のりゆき)

# タッチングによる快体験の様相

～時間的变化と身体感覚・感情への気づき～

○小西奈美<sup>1</sup> 内堀恵美<sup>2</sup> (非会員) 大久保千恵<sup>3</sup> (非会員)

(<sup>1</sup> 明治国際医療大学看護学科 <sup>2</sup> 京都橘大学臨床検査学科 <sup>3</sup> 京都橘大学総合心理学科)

キーワード：タッチング 気づき 身体感覚

【目的】ふれるケアは、対象者の不安や疼痛緩和を図る看護ケア技術の一つであり、対象者にとって心身ともに安全に実施される必要がある。しかし、逆境体験や特性による感覚の乏しさや鋭敏さを有している場合もあり、ふれている時だけでなくその後の影響も考慮する必要がある。そこで今回、ふれるケアのなかでも身近に取り入れやすいタッチングを実施し、その体験における被タッチング者の気分や身体・感情への気づきについて経時的に検討した。

## 【方法】

1. 研究参加者：A 大学大学生・大学院生合計 34 名（男性 15 名、女性 19 名）。平均年齢 21.76 (1.13) 歳。

2. データ収集方法：

1) 質問紙：

(1) 二次元気分尺度 (Two-Dimensional-Mood-Scale-Short Term 以下、TDMS-ST) 8 項目から構成され「活性度」「快適度」「安定度」「覚醒度」の下位尺度が算出される。

(2) 内受容感覚への気づきの多次元的評(Multidimensional Assessment of Interoceptive Awareness(以下、MAIA)

32 項目の質問紙から構成され、8 つの下位尺度「気づき」「気が散らない」「心配しない」「注意制御」「感情への気づき」「自己制御」「身体を聴く」「信頼する」が得られる。

(3) NRS によるタッチングの快-不快評価

タッチングを受けた感覚について、0 (不快) から 10 (快) までの 11 段階で評価を求めた。

(4) タッチングを受けた感想自由記述

被タッチング中に考えたり感じたりしたことや、過去の経験など思い出したことがあったかなど受けた感想について記述を求めた。

2) データ測定手順

タッチングの有無別クロスオーバー試験とした。タッチングは座位の状態で行い、参加者とは初対面の女性看護師が、机にうつぶせをしている参加者の両肩に背後から 5 分間両手を置いた。統制群 (以下、うつぶせ群) は、タッチングを受けずうつぶせをして過ごした。タッチング前に、不快時には遠慮なく申し出ること、自由に体勢を変えてよいこと、両足の足底は床につけることを伝え、衣類の締め付けなど苦痛がなく安楽な状態であることを確認して実施した。質問紙調査は、タッチングまたはうつぶせ実施前、直後、20 分後、24 時間後に TDMS-ST を、実施前 (以下、実施前 MAIA) と 24 時間後に MAIA (以下、実施後 MAIA) を調査した。NRS と自由記載は、タッチング終了後に記入を求めた。

3. 分析方法

群別の気分状態・変化を検討するため、TDMS-ST の各下位尺度について、実施前の値から実施直後、20 分後、24 時間後の値の差を求め、その差を用いて二要因分散分析を行った。MAIA も同様に、実施前後の差について 2 群の比較を行った (t 検定)。さらに、不快-快感覚と自身への気づきを検討するため、NRS 評価と MAIA との相関を検討した。有意水準  $\alpha < 0.05$  とした。

3. 倫理的配慮

京都橘大学研究倫理委員会の承認 (承認番号 23-31) を得て実施した。

## 【結果】

実施中に不快感を訴える参加者はいなかった。

## 1. TDMS-ST 下位尺度の時間的变化 (図 1)

いずれの下位尺度も交互作用はみられなかったが、時間的な変化がみられた。「活性度」「覚醒度」は両群とも実施 20 分後にいったん低下するが 24 時間後には実施前より上昇した。ただし、タッチング群の「活性度」については、タッチング直後は実施前より上昇し、その後低下した。「快適度」は、タッチング群とうつぶせ群との間に有意な差がみられ、タッチング群は上昇するがうつぶせ群は低下していた。「安定度」は、両群とも 24 時間後に低下していた。

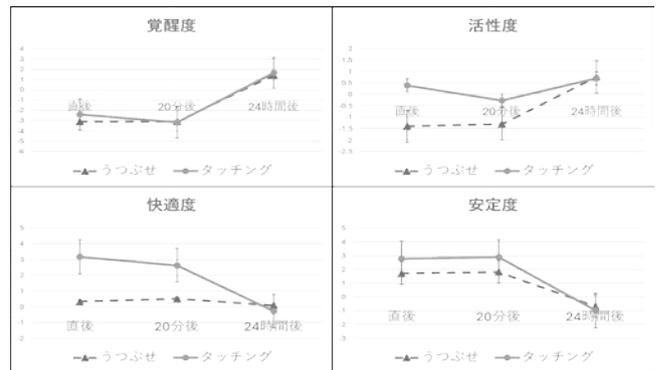


図 1. TDMS-ST 下位尺度の群別変化

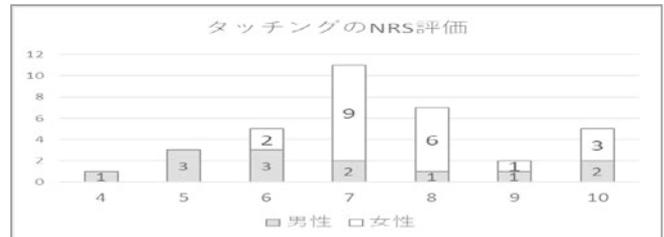


図 2. NRS によるタッチングの快-不快評価

## 2. MAIA

実施前後の変化について、両群に有意な差はみられなかった。

## 3. NRS によるタッチングの快-不快評価 (図 2)

最頻値は「7」(11 名)、次に多かったのは「8」(7 名)で、最小値「4」1 名であった。また、女性は「6」以上の評価をつけていたが、男性は低評価もみられた。

## 4. NRS 評価と MAIA との関連

NRS 評価と実施前 MAIA との関連はみられなかった。NRS 評価と実施後 MAIA の下位尺度「気づき」( $r=0.47$ )「感情への気づき」( $r=0.36$ ) とに有意な正の相関がみられた。

## 【考察】

今回のタッチングによる快感覚は 20 分程度持続し、快体験により「快不快の身体感覚への気づき」や、「身体感覚と感情状態との関連性への気づき」が高まる可能性が示唆された。また、手のあたたかさを感じ、母親や保健室、友人から受けたケアを思い出す者もいた。心身への気づきに乏しい患者への気づきを高めるケアを行う際には、過去に受けたあたたかい経験の有無や性別についても考慮し、思い出してもらいながらふれることでケアにつながる可能性が示唆された。

## 【利益相反】利益相反 (conflict of interest; COI) 無し

(こにし なみ・うちぼり えみ・おおくぼ ちえ)

# 花を用いた心理療法で撮影された生け花画像に関する 距離分析と印象評価分析の検討

○内田誠也<sup>1</sup> 田中英明<sup>1</sup> 本村明嘉<sup>2</sup> (非会員)

(<sup>1</sup>一般財団法人 MOA 健康科学センター <sup>2</sup>一般社団法人 MOA インターナショナル)

キーワード：心理療法、花画像、評価法

## 【背景および目的】

東京都内にある日本統合医療学会認定施設では、精神疾患を有する患者に対して、花を用いた心理療法が行われている。この療法では、画材を花に置き換え、花を用いて造形を行うことから、アートセラピーに類似していると考えられる。花は自然のエネルギーを吸収して育つため、本療法ではそれを活用し、人間の自然治癒力を高め、自己成長を促すことを目的としている。具体的には、患者とその保護者がペアとなり、それぞれが一輪の花をいけ、それらを並べて配置し、鑑賞しながら語り合い、楽しむ方法である。2023年より、本療法で得られた写真画像を用いて、患者と保護者がいけた花の配置関係や印象を定量的に評価する手法を開発し、両者の心理状態および関係性との関連について検討を進めている。

本研究の目的は、分析対象の例数を増やし、花を用いた心理療法で生けられた花の写真画像を解析することで、患者と保護者の心理状態との関連を明らかにすることである。

## 【方法】

本研究は当財団の倫理審査委員会の承認を得た上で実施され、患者およびその保護者に対して書面により研究の詳細を説明し、同意を取得した。

対象は精神疾患を有する患者とその保護者からなる5組(A~E親子)で、各組とも本施設にて花を用いた心理療法を5~6回体験した。療法では、まず患者が花を2杯生け、次に保護者が花を2杯生けた。その後、患者が4杯の花を配置し、写真撮影を行い、同様に保護者も4杯を配置して写真を撮影した。

写真画像の分析は、「距離分析」と「印象評価分析」に分けて行った。距離分析では、写真に写る4杯の生け花の距離を計測し、平均距離(Mean Distance: MD)を算出した。また、患者が生けた2杯の花の中心と、保護者が生けた2杯の花の中心との距離を、患者-保護者間距離(Patient-Guardian Distance: PGD)として定義した。たとえば、患者の生けた花を保護者の花が挟み込むように配置された場合、MDに比べてPGDは短くなる。印象評価分析では、写真画像の印象について問う20項目からなるアンケートを作成し、「あてはまる」「少しあてはまる」「あてはまらない」の3段階で評価した。評価者は、患者および保護者と面識のない男女各2名(計4名)であり、患者の状態についても情報を持たない状況で回答を行った。4名の平均得点を、その画像の印象評価スコア(Flower Impression Score: FIS)とし、FISが高いほどポジティブな印象を受けたことを示す。

また、セラピストは各回のセッションごとに、患者の状態、保護者の状態、両者の関係性(Patient-Guardian Relationship Score: PGRS)、およびセラピー後の両者の状態を7段階尺度で評価した。これらのスコアと距離分析および印象評価分析とのSpearmanの相関係数を算出し、関連を検討した。

## 【結果】

表1に、PGRSとPGDおよびFISのSpearman相関の結果を示す。A親子では、PGRSとPGDとの間に正の相関が認められ、両者の関係が良好になるほど、両者が生けた花の距離が長くなる傾向が示された。また、PGRSとFISとの間にも正

の相関傾向がみられ、関係が良好なほど、他者がその花の画像からポジティブな印象を受けやすいことが示唆された。

B親子では、PGRSと患者が配置した花のPGDに正の相関がみられた一方で、保護者が配置した花のPGDとは弱い負の相関がみられた。すなわち、関係が良くなるほど、患者の花の距離は広がり、保護者の花の距離は縮まる傾向があることを示す。また、PGRSとFISにも正の相関傾向がみられた。

C親子は、PGRSが常に高値で一定であったため、相関分析は行えなかった(表中“-”は解析不能を示す)。

D親子では、PGRSと保護者が配置した花のPGDに弱い負の相関がみられ、関係が良好になるほど保護者の花の距離が短くなる傾向が示された。また、PGRSとFISとの間には弱い負の相関がみられた。

E親子でも、PGRSと保護者が配置した花のPGDに負の相関がみられ、関係が良好になるほど保護者の花の距離が短くなることが示唆された。一方、PGRSと保護者のFISには正の相関が認められた。

表1 PGRSとPGDおよびFISとのspearman相関

	患者が配置した 花の写真		保護者が配置した 花の写真	
	PGD	FIS	PGD	FIS
A親子	0.866	0.444	0.866	0.444
B親子	0.791	0.527	-0.105	0.369
C親子	—	—	—	—
D親子	0.000	-0.577	-0.577	-0.577
E親子	—	—	-0.800	1.000

## 【考察】

本研究で用いた評価手法により、4例(うち1例は弱い相関)において、セラピストが評価した患者と保護者の心理状態と、花の配置における患者-保護者間距離(PGD)との間に正および負の相関が認められた。これは、患者が言語で十分に表現できない保護者への心理的態度が、花の配置という非言語的な表現に反映された可能性を示唆している。

相関分析が行えなかった1例については、初回の体験時からすでに患者と保護者の関係性が良好であったため、花の配置に心理的变化が表れにくかった可能性がある。

花の写真画像を用いた距離分析および印象評価分析によって、患者と保護者の心理的關係を客観的に可視化・定量化できる可能性が示されたと考えられる。今後はさらに対象者数を増やし、継続的な検討を行っていきたい。

【利益相反】本研究に関する利益相反(conflict of interest; COI)はありません。

(うちだ せいや・たなか ひであき・もとむら はるか)

# 介護士を対象としたソーシャルスキル尺度の階層構造の検討

○三宅沙侑美<sup>1</sup> 山野洋一<sup>2</sup> 田中共子<sup>1</sup>

(1 岡山大学 2 京都産業大学)

キーワード：ソーシャルスキル，介護士，尺度開発

## 【目的】

少子高齢化の進行に伴い、介護現場における介護士の役割は一層重要となっている。介護士は対人援助職であり、介護を行う上でソーシャルスキル（以下、SS）が必要とされる。我々はこれまで、介護現場における SS 向上のための教育プログラムの基盤を構築すべく、デイサービス介護士の SS 尺度群（Day service Care workers' Social skills Inventories：以下、DCSI）を開発した（三宅ら，2024）。同時に同報告では、尺度群を1つの尺度にまとめた24項目版（DCSI-24）を作成している。

本研究では、DCSI-24の因子構造および因子間の関係性を検討することを目的とした。DCSI-24は、その項目内容からデイサービス以外の介護士にも適用可能と考え、デイサービス介護士を対象とした三宅ら（2024）の調査に、介護士全般を対象とした追加調査のデータを加えて分析を行った。

## 【方法】

**対象者と方法：**調査は Web 調査会社を通じて実施し、A 社には 2023 年 12 月にデイサービス介護士調査、B 社には 2025 年 2 月に他の介護職調査を依頼した。なお、A 社のデータは三宅ら（2024）と同一のデータセットである。分析対象者は分析項目に完全回答した介護職に従事する 1069 名とした。

**調査項目：**属性、DCSI-24、KiSS-18（菊池，1988）等について評価を求めた。DCSI-24は表1の項目から構成されている。

**倫理的配慮：**調査は調査会社とモニター間で契約されたプライバシー保護の規約に従った。調査は任意であること、研究目的で回答データを使用することを説明し、同意を得た。

## 【結果】

施設内訳はデイサービスセンター655名、デイケアセンター40名、介護老人福祉施設（特養）131名、介護老人福祉施設（老健）67名、介護療養型医療施設21名、介護医療院21名、介護付有料老人ホーム99名、グループホーム77名、その他11名であった（複数回答）。平均年齢は47.32±11.46歳、介護士平均経験月数は133.8±115.6カ月であった。

DCSI-24の各項目の記述統計量と三宅ら（2024）から想定される構造を表1にまとめた。想定される構造をもとに確認的因子分析（高次因子分析）を行った結果、基礎スキルは実用スキルに影響するとしてモデルのRMSEAとSRMRは.100を下回った。DCSI-24の各項目とKiSS-18と相関は.215～.409で、いずれも有意であった（ $p<.01$ ）。

## 【考察】

DCSI-24の高次因子分析の適合度は許容の範囲内であると考えられる。加えて、DCSI-24には、基礎的スキルが実用的スキルに影響する階層構造が認められた。基礎スキルが実用スキルの土台となるという階層性の示唆は、介護士におけるソーシャルスキルの段階的な習得や教育設計において有用な知見である。今後は、この階層性を踏まえて、基礎スキルから体系的に学習可能な教育プログラムの開発と、その有効性の実証的検討が求められる。

## 【利益相反】

本研究において開示すべきCOIはない。

## 【引用文献】

三宅沙侑美・山野洋一・田中共子（2024）「介護士が介護サービス利用者と信頼関係を構築するためのソーシャルスキル—デイサービスセンターにおける対人関係形成に関する心理教育法の開発に向けて—」『SOMPO 福祉財団 2022 年度福祉諸科学事業【ジェロントロジー研究助成】研究報告書』147-173。

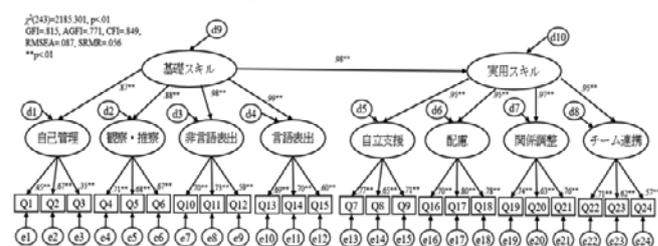
## 【謝辞】

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム（JPMJSP2126）の支援を受けました。本研究の一部は、公益財団法人 SOMPO 福祉財団 2022 年度福祉諸科学事業「ジェロントロジー研究助成」の助成を受けました。

表 1 DCSI-24 の記述統計量と想定される因子

想定因子	項目	平均値	標準偏差	KiSS-18 との相関
自己管理 $\alpha=.486$	1 時間内に自分の仕事を終わらせ、他の職員へ負担をかけないようにする	4.87	1.14	.215**
	2 苦手な利用者や接する時は、相手の良い所を探す	4.19	1.20	.371**
	3 仕事上でのストレスは、溜め込まず発散して忘れる	3.96	1.37	.325**
	4 利用者の表情や態度から感情を推し量る	4.77	1.01	.269**
観察・推察 $\alpha=.707$	5 利用者と接する前にその人に関する情報を読み込んで、不明点は下調べをしておく	4.42	1.16	.294**
	6 フロア全体の利用者の中でレクリエーションを指導する時は、皆を見渡して準備ができていないか確認する	4.29	1.44	.324**
	7 利用者に説明をする時は、利用者の注意を引いてから説明する	4.58	1.12	.401**
自立支援 $\alpha=.752$	8 小さな目標を立てて、利用者自身に達成を目指してもらう	3.99	1.25	.403**
	9 利用者にレクリエーションの説明をする時は、大部分をゆっくり話す	4.46	1.32	.325**
	10 利用者と話すときは、しゃがんだりかがんだりして、目線の高さを同じか下にする	4.94	1.08	.268**
	11 フロア全体の利用者へ声をかける時は、目立つ所に立つ	4.53	1.33	.342**
非言語表出 $\alpha=.712$	12 利用者と話している時は、他の利用者に向けて背中を向けないようにする	4.28	1.31	.313**
	13 フロア全体の利用者へ話をする時は、利用者への質問を交えながら会話を展開する	4.27	1.29	.383**
	14 利用者と目が合った時は、会釈や声かけをする	5.02	1.01	.311**
言語表出 $\alpha=.702$	15 天気、ニュース、新聞の記事を話題にする	4.65	1.14	.279**
	16 お茶を出すときは位置に気を付け、危険が少なく、飲みやすい、中身が見えやすい場所に置く	4.85	1.15	.305**
	17 利用者の性格や特性に合わせた声掛けをする	4.92	1.03	.381**
配慮 $\alpha=.802$	18 利用者にとって良くないことを伝える時は、周囲に筒抜けにならないように配慮する	4.83	1.08	.353**
	19 利用者の要望にすぐ対応できない時は、具体的な代替案を示しておく	4.37	1.11	.409**
	20 関係が悪化している利用者同士は距離を離す	4.75	1.12	.293**
関係調整 $\alpha=.749$	21 利用者が不満を溜め込まないように、気軽になんでも話せるような関係を作っておく	4.58	1.07	.420**
	22 利用者の情報は、自分だけでなく、職員間での共有を心掛ける	4.95	1.02	.339**
	23 利用者の家族に、普段家にいるときの利用者の様子を見せる	4.18	1.35	.404**
チーム連携 $\alpha=.693$	24 ケアマネージャーと、利用者に関する情報交換をこまめに行う	4.16	1.45	.338**

図 1 DCSI-24 の高次因子分析



（みやけさゆみ・やまのよういち・たなかともこ）

# コロナ禍を過ごしてきた大学生の友人ネットワークと大学適応過程

2019年度・2020年度入学者のTEM図

○上田仁<sup>1</sup> 松浦均<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>愛知県庁 <sup>2</sup>星槎大学大学院教育学研究科)

キーワード：コロナ禍、TEM図、友人ネットワーク

## 【目的】

2020年から新型コロナウイルス感染症が拡大をし、大学生の学生生活には大きな影響が及ぼされた。2020年度の入学式は多くの大学で中止となり、新入生はしばらく学校に登校できず友人関係がつくる機会が少なく、また、他の学年の学生もオンラインで自宅から授業に参加することになった。こうした影響を受け、大学生の孤立感や社会的に大きな問題となっていた。そこで、本研究では、2020年度大学生の大学適応過程を明らかにすることとした。大学生の適応過程の研究において、友人の存在は大きいとされている(大久保, 2005)。そこで、友人関係の形成・関係性の深化にも着目した。具体的に、2020年度入学さらには、2019年度入学者にインタビューを行いTEM図を基に検討を行った。

## 【方法】

**調査時期** 2024年9月から2025年1月にかけて実施。  
**調査対象者** A大学を卒業した者4名(2020年度入学者2名・2019年度入学者2名で、男性1名・女性3名)。  
**調査方法** オンラインにて実施。  
**研究倫理** 調査の概要、調査協力は自由であることや中断が可能であることを説明し、同意を得た方には同意書に記入してもらった。また、第2著者が所属している大学の研究倫理審査委員会にて承認を得た(承認番号2024-18)。  
**調査項目** 半構造化面接で①友人関係の変化②日常生活の過ごし方③学習の仕方④ソーシャルサポートの有無⑤精神状態⑥その他を設定してインタビューを行った。また、友人ネットワークを尋ねるために、同心円状に友人がどこに位置するか心理的距離を尋ねた。

## 【結果】

4名のインタビューから作成したTEM図は、図1に記した。EFPを「同じ大学に友人ネットワークがある(EFP①)」、「友人サポートを得る(EFP②)」、「コロナ禍の大学を

渡々受け入れる(EFP③)」、「人と会う喜びを感じる(2nd-EFP)」とした。また、コロナ禍初期では全員が友人と心理的距離ができていた。2020年度入学者の語りから、大学入学は友人ネットワークがない状態から始まり、オンラインで交流する機会はあるが、より関係性が深化するのは対面授業で同じ共有の話題ができた、同じ学科の人と対面授業終わり雑談をしたりすることであると明らかになった。2021年度入学者については、コロナ禍初期では心理的距離ができ、すでに友人ネットワークは形成されているがわざわざ連絡をする機会が少ないことが心理的距離を生む背景であった。これらの結果から、コロナ禍というのが心理的距離を生むことはどちらの学年にも起きていたが、その理由が異なることが明らかになった。

## 【考察】

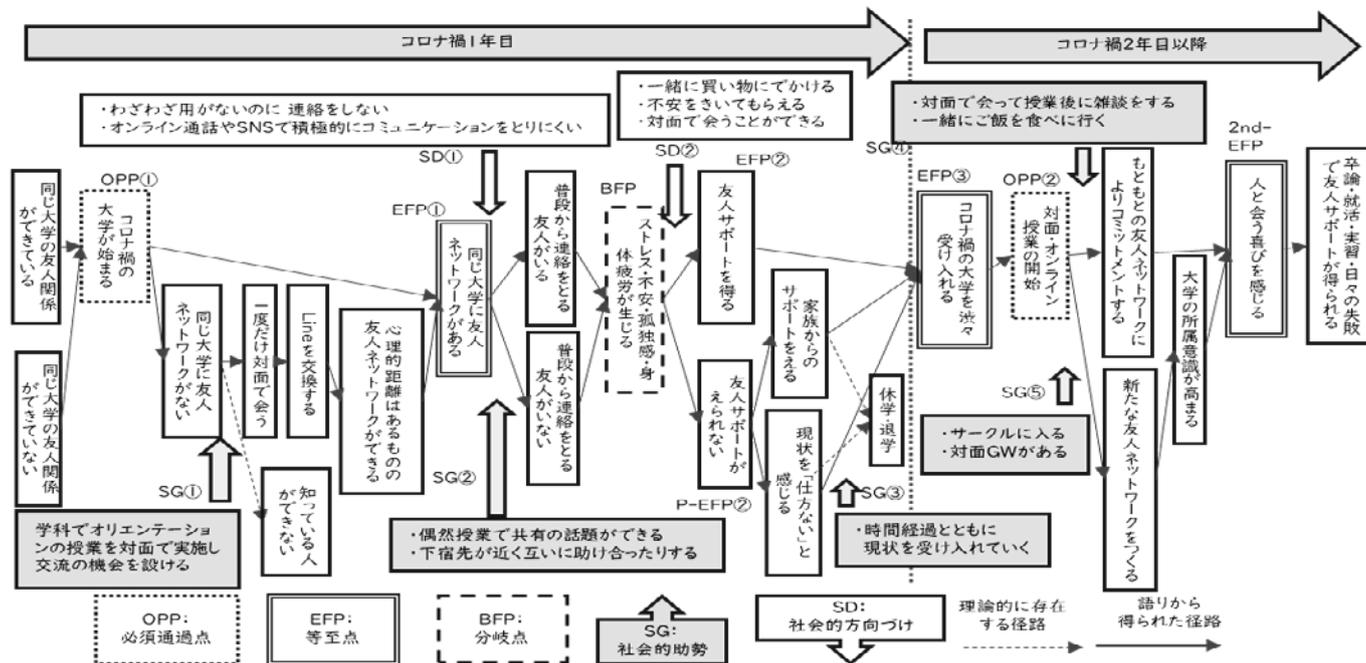
大学生の適応過程において友人ネットワークを形成することは重点的な課題であるが、2020年度入学者にとってはオンライン授業だけでは関係性は形成できるが深化しにくいと考えられる。また、2019年度入学者にとっても、すでにある友人ネットワークを利用することの敷居の高さがあった。以上のことから、単に授業だけの交流ではなく、雑談や共通の話題など、コンパニオンシップを高めた交流ができると大学の適応過程につながると考えられる。

## 【利益相反】

本研究に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

## 【引用文献】

大久保 智生 (2005). 青年の学生への適応感とその規定要因——青年用適応感尺度の作成と学校別の検討—— 教育心理学研究, 53(3), 307-319.  
[https://doi.org/10.5926/jjep1953.53.3\\_307](https://doi.org/10.5926/jjep1953.53.3_307)  
 (うえだ じん・まつうら ひとし)



# 子育て期におけるワーク・ライフ・バランスの関連要因の検討(1)

## 職場認知と子育て意識の関連

○池田琴恵<sup>1</sup> 谷口まち子<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>豊田工業大学 <sup>2</sup>南山大学)

キーワード：キャリア・子育て・職場環境

### 【目的】

2007年、内閣府の仕事と生活の調和推進官民トップ会議において「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス、以下WLB）憲章」が策定され、制度的枠組みの構築や環境整備などの促進・支援策に積極的に取り組むことが示された。この策定から約20年が経過し、様々な制度・意識変革が進んでいるものの、現在も実生活の場では仕事と子育ての両立に困難や悩みを抱える親は少なくない。こうしたWLBの実現においては、仕事特性、職場特性、上司特性のすべての職場環境要因が影響を与えていることが示されている（加藤，2009）。しかしWLBは職場の要因だけではなく、生活と仕事との相互作用が想定されている考え方であり、生活の要因も影響を及ぼすと考えられるが、両者の関連は十分に検討されていない。

そこで本研究では、子育て期の親に着目し、職場認知と子育て意識がどのように関連しているかを検討することを目的とした。

### 【方法】

**調査対象者：**A市在住の就業している親を対象とした。調査協力者数は285名（女性238名(84%)、男性42名(15%)、その他/未記入3名(1%)）であった。

**調査実施時期：**2024年9月・10月

**調査方法：**A市教育委員会を通じて、市内の保育所・幼稚園・小学校で調査協力依頼書を配付した。調査協力依頼書には調査目的、調査実施者などと併せて、調査用WebサイトのQRコードを掲載した。当該調査用Webサイトを通じて回答を回収した。

**調査内容：**以下の質問項目を用いて、職場に対する認知と子育てに関する意識をたずねた。

(1)職場認知：川村・鈴木(2016)の看護職のワーク・ライフ・バランス尺度の26項目について、一部の看護職という表現を従業員と変更して用いた。また、職場におけるキャリアアップ、出産・育児、性別による昇進・昇給の差異に関する5項目を追加した31項目について、そう思う(4点)～そう思わない(1点)の4件法で実施した。

(2)子育て意識：佐藤ら(2020)の家族エンパワメント尺度を用いた。合計26項目について、かなり当てはまる(7点)～全く当てはまらない(1点)の7件法で実施した。

**分析方法：**因子分析およびα係数の算出による各下位尺度の信頼性を確認した後、下位尺度間の相関係数を算出したうえで、共分散構造分析を行った。

**倫理的配慮：**本研究は研究倫理審査【豊工大倫理第24-04号】を受けて実施された。

### 【結果】

(1)職場認知および子育て意識に関する尺度の信頼性の確認

職場認知の31項目について、まず天井・床効果のみられた5項目を除いて因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った結果、固有値1.0以上の因子が5つ抽出された。川村・鈴木(2016)の因子構造と対照し、「上司の管理行動・キャリア/能力開発・生活尊重・職場への信頼・待遇/生活満足」の5つを下位尺度とした。

子育て意識の26項目について、天井・床効果のみられた6項目を除いて同様の因子分析を行った結果、3因子が抽出された。佐藤ら(2020)の因子構造と対照し、「親役割効力

感・地域とのつながり・育児支援サービスの活用」の3つを下位尺度とした。

(2)下位尺度間の関連性

職場認知および子育て意識の下位尺度間の相関係数を算出したところ、いずれの下位尺度にも有意な相関関係が認められた。次に共分散構造分析を行った結果、「親役割効力感」に対して、「生活尊重」および「待遇/生活満足」からなる職場の『WLB』のみが有意なパス(.46,  $p<.01$ )を示し、「上司の管理行動」と「職場への信頼」からなる『組織経営』、「キャリア/能力開発」から「親役割効力感」へのパスは有意ではなかった。ただし、『WLB』と『組織経営』および「キャリア/能力開発」は高い相関関係にあり、勤務形態や休暇申請、待遇などのWLBが高い状態の職場は、組織経営も高く、従業員が将来像を描きながら仕事ができる職場であることも示された。

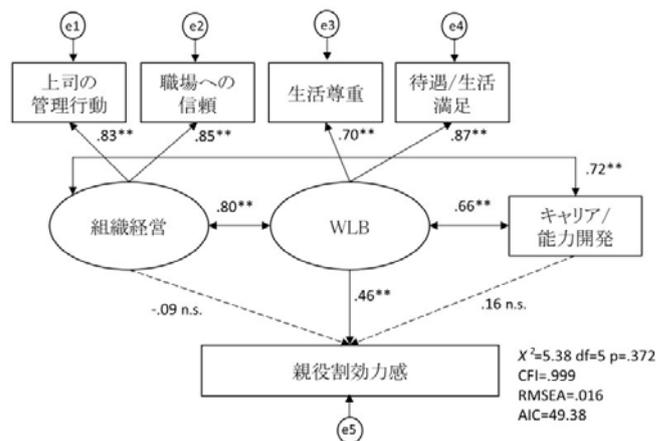


Figure 1 職場認知と親役割効力感の共分散構造分析の結果

### 【考察】

本研究の結果、自信をもって子育てができたり子育てを通じて自分も成長していると感じる『親役割効力感』に、気兼ねなく休暇をとることができたり出産や育児を歓迎する雰囲気を感じる「生活尊重」と給与や働き方の満足を示す「待遇/生活満足」からなる『WLB』が重要である可能性が示された。産休・育休制度が整備される中、制度を職場に入れるだけではなく制度の活用がしやすい風土づくりが重要であると考えられる。

**【利益相反】**本調査はA市の商工会議所と共同で行い、A市商工会議所から調査に係る費用の一部が筆者らに支払われた。またA市の教育委員会の後援(無償)を得て実施した。ただし本協力関係は調査内容や分析を歪めるものではない。

### 【引用文献】

加藤純子 (2009) ワーク・ライフ・バランスを実現する職場環境 日本労働研究雑誌, 583, 47-56.

川村晴美・鈴木英子 (2016) 看護職のワーク・ライフ・バランス尺度の信頼性・妥当性の検証 日本保健福祉学会誌, 22(2), 19-26.

佐藤美樹・荒木田美香子・金子仁子・三輪眞知子 (2020) 幼児を持つ親の家族エンパワメント尺度の開発 日本公衆衛生雑誌, 67(2), 121-133.

(いけだ ことえ・たにぐち まちこ)

# 子育て期におけるワーク・ライフ・バランスの関連要因の検討(2)

## 仕事と子育ての両立のバランスの再構成のプロセス

○谷口まち子<sup>1</sup> 池田琴恵<sup>2</sup>

(<sup>1</sup> 南山大学 <sup>2</sup> 豊田工業大学)

キーワード：ワーク・ライフ・バランス・職場風土・アイデンティティ

### 【目的】

2007年、内閣府の仕事と生活の調和推進官民トップ会議において「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス、以下WLB）憲章」が策定され、制度的枠組みの構築や環境整備などの促進・支援策に積極的に取り組むことが示された。この策定から約20年が経過し、様々な制度・意識変革が進んでいるものの、現在も実生活の場では仕事と子育ての両立に困難や悩みを抱える親は少なくない。WLBの実現においては、仕事特性、職場特性、上司特性の全ての職場環境要因が影響を与えていることが示されている（加藤，2009）。しかし、WLBは、職場の要因に加えて、個人の生活や価値観といった要因にも規定されるため、ライフステージの移行と共に変化していくと考えられる。それにもかかわらず、その過程は十分に検討されていない。

そこで、本研究では、働く子育て期の親に着目し、仕事と子育ての両立のバランスの再構成のプロセスを検討することを目的とする。

### 【方法】

**調査対象者：**A市在住の就業している親を対象とした。調査協力者数は285名（女性238名(84%)、男性42名(15%)、その他/未記入3名(1%)）であった。

**調査実施時期：**2024年9月・10月

**調査方法：**A市教育委員会を通じて、市内の保育所・幼稚園・小学校で調査協力依頼書を配付した。調査協力依頼書には調査目的、調査実施者などと併せて、調査用WebサイトのQRコードを掲載した。当該調査用Webサイトを通じて回答を回収した。

**調査内容：**A市で実施した仕事と子育てに関する調査の一部として、以下の文章を提示し、回答を自由記述で求めた。「子育てと仕事をする上で、今お勤めになっている会社や組織に対してどのような考えや要望がありますか。あなたの要望やお考えを自由に記入してください。」「その他、この調査を通じて伝えたいこと、知って欲しいことなどがあれば、自由にご記入ください。」

**分析方法：**修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA；木下2003, 2020)を援用して分析を行った。

**倫理的配慮：**本研究は研究倫理審査【豊工大倫理第24-04号】を受けて実施された。

### 【結果】

190名から自由記述が得られた。M-GTAにより32概念が生成され、13サブカテゴリー、6カテゴリーにまとめられ、ストーリーラインが作成された。なお、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを「」で表記した。

親は「子どもの誕生に伴う変化」の中で【仕事と子育ての両立のバランスの模索】を始める。これは家族構成員として子どもが増えることで、「子どもとの時間への希求」が生じ、「働く理由」に占める<キャリア>、<生活>、<社会参加>の比率に変化が生じること、子どもにかかる<継続型ケアタスク><予定型ケアタスク><突発型ケアタスク>の混在する「家庭内のケアタスク」が急増するためである。その際、「旧来の価値観に基づく性別役割」が職場にあると、<制度の未整備><利用しづらい制度>といった「多様性を前提としない勤務形態」となることで、<人手不足><休暇のとりづ

らさ><業務量の多さ><長時間労働>による「労働環境の悪循環」が生じる。「労働環境の悪循環」に加え、「両立への理解の不足」や「ロールモデルの少なさ」が【仕事と子育ての両立を阻害する風土】になり、【仕事と子育てのバランスの不調和】を生じさせる。その結果、仕事や家庭など<多方面への負い目>や<両立に伴う葛藤>をもつこととなり、<望まない働き方>や<子育てのしづらさ>へとつながる。この【仕事と子育てのバランスの不調和】のみが続くこともあるが、【仕事と子育ての両立のバランスの模索】が並走する。

この時、<多様な勤務形態><休暇制度の整備>など「多様性を尊重する仕組み」と、職場内の<良好な関係性>を基盤とした<家族を大切にする会社><両立への理解がある上司><子育て経験のある社員の多さ><子育て経験のない社員の理解><理解のある取引先>といった「両立への理解」を感じる【仕事と子育ての両立を支える職場風土】の中では、<早く休みを取得させてくれる>と思えるため、<気兼ねなく休みをとることができる>ようになる。【仕事と子育ての両立を支える職場風土】においては、親が「新たなバランスの受容」ができている状態であると、<コントロール感><心理的安心感>を伴う【仕事と子育てのバランスの安定的再構成】につながる。ただし、親の「理想と現実のバランスが不一致」である場合、職場での<コントロール感><心理的安心感>はあるものの、自身の生き方としては<両立への葛藤><選択に伴う後悔>といった【仕事と子育ての両立のバランスの一時的安定】にとどまる。こうした状態は永続的なものとは限らず、【仕事と子育ての両立のバランスの模索】と循環しながら進む。

### 【考察】

子どもの誕生は、親のWLBに混乱をもたらすアイデンティティの危機として捉えることもできる。子育てをしながら働く親にとって、旧来の性別役割に対する価値観に基づいた職場風土は両立を阻害し、WLBの不調和を生み出すことが示された。これは自分の生き方を問い直す危機といえよう。こうした危機を乗り越えていくために、職場におけるWLB支援においては、多様性を前提とした柔軟な制度設計と、家庭生活を尊重してくれる仕事と子育ての両立への理解の両方が機能する職場風土の形成が重要である。ただし、両立支援的な職場風土があっても、個人内で理想と現実のずれがみられる場合は、WLBの安定は一時的なものに留まる可能性がある。従って、ライフステージの移行に伴う親の価値観・生活状況の変化への理解を基盤とした多層的・包括的なアプローチが不可欠である。今後は職場のあり方と個人の価値観の相互作用を捉え、個人が主体的にWLBを再構築できる支援の在り方を検討することが求められる。

### 【利益相反】

本調査は、A市の商工会議所と共同で行い、A市商工会議所から調査に係る費用の一部が筆者らに支払われた。また、A市の教育委員会の後援（無報酬）を得て実施した。ただし、本協力関係は調査内容や分析を歪めるものではない。

### 【引用文献】

加藤 純子 (2009) ワーク・ライフ・バランスを実現する職場環境 日本労働研究雑誌, 583, 47-56.

(いけだ ことえ・たにぐち まちこ)

# 留学生との交流における意思決定バランスと行動変容ステージの関係

○田中共子<sup>1</sup> 山野洋一<sup>2</sup> 三宅沙侖美<sup>1</sup>  
(<sup>1</sup>岡山大学 <sup>2</sup>京都産業大学)

キーワード：Pros と Cons、日本人大学生、異文化交流

## 【目的】

近年の留学生政策の拡大やグローバル人材育成の必要性が注目される中で、日本人学生の異文化交流への消極性が課題となっている。我々は、彼らが実際に留学生との交流に踏み出していく過程を段階的に把握し、段階を進んでいく際の意思決定に注目した。行動の意思決定において、恩恵と負担の知覚バランスに変化が生じて、行動変容が進むとみるトランスセオリアルモデルの意思決定バランス理論 (Prochaska & DiClemente, 1983) を用いて、その心理的機序を探る。本研究の目的は、日本人大学生を対象に、留学生との交流における Pros (恩恵) と Cons (負担) の認識が、その交流の行動変容ステージでどう異なるのかを明らかにすることであった。

## 【方法】

**対象者と手続き：**A 大学 (国立の総合大学) 所属の日本人学生及びその近隣の大学に所属する日本人学生 126 名 (平均年齢と標準偏差は 20.05±2.50 歳) であった。調査システムは Google Forms による無記名自記式で、2 つの講義時間中と縁故法で参加者を募集した。調査は 2024 年 11 月 14 日から 2 週間であった。なお、本研究は山野ら (2025) の調査と同様のデータセットである。

**質問項目：**「日本人大学生における留学生との交流意欲に関する意思決定バランス尺度 (以下、意思決定バランス尺度)、交流ステージなどから構成した。

**意思決定バランス (表 1)：**田中 (2025) の質的調査で明らかとなったカテゴリから 22 項目を作成し、因子分析により、Pros 7 項目、Cons 7 項目の 2 因子から構成される尺度である。Pros と Cons は独立した因子とされる (山野ら, 2025)。

**交流ステージ：**「外国人留学生との交流について、今のあなたの考え方や状況についてお聞きします。」という問いに「1. 留学生と交流しておらず、特に交流を始めたいと考えてはいない」、「2. 留学生と交流してみたいが、自分で交流の機会を探すほどではない」、「3. 留学生と交流してみたいので、自分から機会を探してみようと思う」、「4. 留学生と交流して、半年以内である」、「5. 留学生と交流して、半年以上である」の 5 件法で回答を求めた。TTM に倣い、1 は前熟考期、2 は熟考期、3 は準備期、4 は実行期、5 は維持期と想定した。

**倫理的配慮：**調査への参加は任意であることを説明し、回答データを研究目的で使用することに同意を得た。

## 【結果】

対象者の属性は 1 年生 63 名、2 年生 12 名、3 年生 24 名、4 年生 23 名、その他が 4 名であった。学部は文系 73 名、理系 30 名、国際系 1 名、その他 22 名であった。交流ステージは前熟考期 26 名、熟考期 77 名、準備期 6 名、実行期 6 名、維持期 15 名であった。該当者が少ないステージがあったため、「前熟考期：26 名」「熟考・準備期：83 名」「実行・維持期：17 名」に集約して分析に用いた。

留学生交流の Pros 得点及び Cons 得点 (T スコア：平均点を 50、標準偏差を 10) を従属変数、3 段階の行動変容ステージを独立変数として分散分析を行った。分散分析の結果、図 2 に示す Cons 得点において、ステージの主効果がみられた ( $F(2,123) = 23.23, p < .001$ )。

表 1 意思決定バランス尺度の項目：山野ら(2025)より作成

留学生との交流のPros	
Q6.	外国人留学生と交流することは、視野を広げるきっかけになる
Q9.	外国人留学生と交流することは、語学の上達に役立つ
Q11.	外国人留学生と交流することは、将来役に立つ
Q18.	外国人留学生と交流することは、自分を振り返る機会になる
Q19.	外国人留学生と交流することは、交友関係を広げる
Q20.	外国人留学生と交流することは、コミュニケーション力を向上させる
Q22.	外国人留学生と交流することは、異文化を知る機会になる
留学生との交流のCons	
Q1.	外国人留学生と交流することは、疲れる
Q2.	外国人留学生と交流することは、高度なコミュニケーション力が求められる
Q5.	外国人留学生と交流することは、言語の壁がある
Q10.	外国人留学生と交流することは、緊張する
Q15.	外国人留学生と交流することは、怖い
Q16.	外国人留学生と交流することは、勇気が要る
Q21.	外国人留学生と交流することは、気恥ずかしい

教示文：留学生と交流することについて、あなたは以下のことを、どのくらい感じますか。『6. 非常にそう感じる』『5. そう感じる』『4. 少しそう感じる』『3. あまりそう感じない』『2. そう感じない』『1. 全くそう感じない』の中から一つを選んでください。」

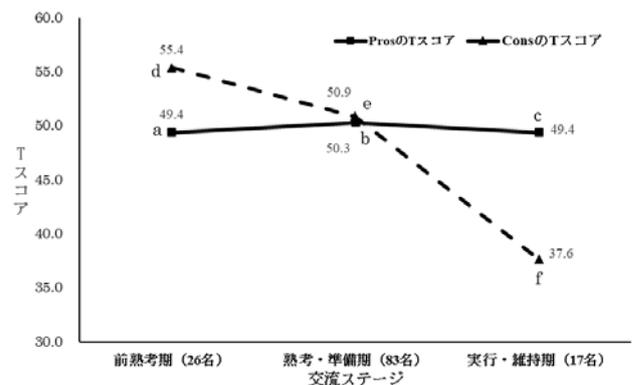


図 1 交流ステージ別の Pros と Cons の得点

## 【考察】

段階を追っての Pros と Cons の逆転現象は、意思決定バランスに関する従来知見と一致するが、Pros 得点に変化に乏しい一方、Cons 得点は段階を追って有意な低下を示した。回答分布からは交流と非交流の二極化が伺われる。日本人学生が留学生との交流に踏み出していくには、Cons 得点を Pros 得点より下げる介入が有用で、異文化接触の予習機能を持つ異文化間教育として文化アシミレーターなどが役立つであろう。

## 【利益相反】

本研究において開示すべき COI はない。

## 【引用文献】

- Prochaska & DiClemente, 1983 The transtheoretical model of health behavior change. *American J. of Health Promotion*, 12, 38-48.
- 田中共子 (2025) 「日本人大学生における留学生との交流認識に関する探索的検討」『異文化間教育学会第 46 回大会』東京大学(2025.6.21~22)
- 山野洋一・三宅沙侖美・田中共子 (2025) 「日本人学生における留学生との交流に関する意思決定バランス尺度の作成」『日本アカデミック・アドバイジング協会 第 5 回年次大会』同志社大学(2025.8.23)
- [謝辞] 岡山大学の太倉七菜さんの卒業研究データを再構成しました。発表のご快諾とご協力に感謝いたします。  
(たなか ともこ・やまの よういち・みやけ さゆみ)

# 「きょうだい児」に関する態度分析 —YouTube のコメント欄を用いて—

○工藤 咲

(立正大学大学院 心理学研究科)

キーワード：きょうだい児 内容分析 障害者

## 【目的】

「きょうだい児」とは、障害児・障害者の兄弟姉妹を指す (Sibkoto, 2023)。きょうだい児は「同胞」「きょうだい」などさまざまな表記のされ方があるが、本研究では全ての年齢の当事者を含め「きょうだい児」と記す。

戸田 (2005) は、きょうだい児が家庭内で「親に負担をかけないこと」や「親の負担を軽減すること」などの役割を担っていると指摘している。そのような役割を負うきょうだい児は他者に配慮して行動する他者志向性が強いとされる (清水・板倉, 2021)。そのため、困難を抱えている際に顕在化しにくいと推測される。また、滝島 (2022) はきょうだい児に対する社会の理解が十分でないことを示しており、それが彼らの生きづらさに影響を与えていると推測される。きょうだい児の生きづらさを理解し状況を改善するためには、きょうだい児に対する一般の人々の認識を把握することが必要である。そこで本研究では、YouTube 上のコメント欄を対象に、きょうだい児に対する一般の人々の態度を分析することを目的とする。

## 【方法】

**データ収集** 「きょうだい児」をキーワードに、YouTube にアップロードされた動画を検索し、その中から最もコメント数の多かった番組 (ABEMA Prime 「障害児を兄弟姉妹に持つ“きょうだい児”進路や恋愛も左右? 必要な理解は」/2021年1月11日放送) を分析対象として選定した。

**調査時期と分析対象** この番組に寄せられたコメント 3,072 件 (2025年3月24日までに投稿されたもの) のうち、「いいね」数が多い上位 100 件を抽出し、内容分析を行った。その中で、番組構成に対する意見やゲストに関する言及が主となっている 29 件は分析対象から除外し、残り 71 件のコメントを分析対象とした。各コメントを意味ごとに区切り、合計 94 件の有効記述が得られた。

**回答者の立場** コメント内に「きょうだい児である」と明記されているものを「本人」による回答とし、それ以外を「その他」と分類した。本研究では「きょうだい児を育てる親」など、間接的に当事者とも言える投稿も全て「その他」に分類した。これは、きょうだい児本人の視点とそれ以外の視点の違いを明らかにしたいと考えたためである。

## 【結果】

KJ 法を用いてコメントを分類したところ、全体は 6 つの大カテゴリーと 15 の中カテゴリーにまとめられた (Table 1)。大カテゴリーのうち「障害者家族の役割」は家族が当然に担うべきとされる障害者に関する責任、「きょうだい児の実態」はきょうだい児の体験を記述したものであった。「社会の現状と望まれること」は現状の支援制度の不備、「結婚と遺伝」は遺伝や将来への不安、「きょうだい児への第三者側の視点」は共感や同情などを記述したものであった。

さらに 15 の中カテゴリーに含まれるコメントの比率が「きょうだい児」「その他」で異なるか  $\chi^2$  乗検定を行なった。その結果、有意差が確認され ( $\chi^2(5) = 19.61, p < 0.001$ )、コメントの内容が立場により異なることが示され

た。残差分析の結果、きょうだい児では「きょうだい児の実態」、その他では「社会の現状と望まれること」が有意に高かった。

Table 1 回答者の立場別に見た抽出されたカテゴリー

大カテゴリー	中カテゴリー	きょうだい児 (31件, N=19)	その他 (63件, N=52)
障害者家族の役割	障害者家族の実態	41.9% (13)	33.3% (21)
	親の責任		
きょうだい児の実態	障害者の面倒は見たくない	41.9% (13) ↑	11.1% (7) ↓
	役割を果たせない罪悪感		
社会の現状と望まれること	社会が家族に負わせている責任	0% (0) ↓	19.1% (12) ↑
	きょうだい児である辛さ		
結婚と遺伝	きょうだい児である役割からの解放	16.3% (5)	27.0% (17)
	きょうだい児であることの良いこと		
きょうだい児への第三者側の視点	進路の不自由さ	0% (0)	4.8% (3)
	行政に望まれることと現実		
その他	障害者に対する措置	0% (0)	4.8% (3)
	障害者家族との結婚に対する考え	0% (0)	4.8% (3)
	きょうだい児に対する気持ち	0% (0)	4.8% (3)

## 【考察】

本研究は、きょうだい児に対する一般の人々の態度構造を分析することを目的とし、動画に寄せられたコメントを分類・量的に分析を行なった。その結果、きょうだい児に対する態度はきょうだい児本人とその他では注目する視点に差がみられることが明らかになった。当事者は「きょうだい児の実態」を言及していたが、その他は「社会の現状と望まれること」について多く言及していた。これは、誤った理解や期待が当事者に無自覚に押しつけられている可能性を示唆している。今後は、一般の人々がきょうだい児に対してどのような認識や態度を持っているかを定量的に明らかにし、当事者の困難の可視化と理解促進につながる社会的支援のあり方を検討していくことが必要である。

本論文において開示すべき利益相反関連事項はない。

## 【引用文献】

- Shibkoto (2023). きょうだい児とは <https://sibkoto.org/about-sibling> (2025年6月2日アクセス)
- 清水 溪介・板倉 憲政 (2021). 障害児・者のきょうだいの子ども時期における家族内役割と青年期における過剰適応との関連. 家族心理学研究, 34(2), 142-156.
- 滝島 真優 (2022). 学校教育における慢性疾患や障害のある子どものきょうだい支援の課題——教員によるきょうだい児の認識とかかわりの現状分析から—— 社会福祉学, 62(4), 44-57.
- 戸田 竜也 (2005). 『「よい子」じゃなくていいんだよ—障害児のきょうだいの育ちと支援—』新読書社.  
(くどう さき)

# 17歳身長分布での変動係数の経年増大等

関与及び影響する諸領域での応用心理学的考察

○廣島 克佳  
(マンション管理士)

キーワード：ジェンダーステレオタイプ 人間工学 認知能力

**【目的】**近年の日本人若年層の身長の高さが大きい印象を受ける。平均身長のみならず、身長分布からの影響及び分布に影響を与える要因が様々に考え得る。そこで、同一年齢コホート内での身長分布が経年的に変化しているかを統計的に検討し、結果に対し応用心理学的な考察を加える。

## 【方法】

### (1) 分析対象

統計法に基づいて文部科学省が実施する「学校保健統計調査」においては、調査年度毎に性別年齢コホート毎の児童生徒の発育状況及び健康状態のサンプリングデータが収集・公開されている。最高齢である17歳コホートデータは成人に近いものと期待でき、サンプリング率も全生徒数の5.2% (2024年度)程度である。1976年度以降は身長分布データが公開されており、これらの内1996年度以降最新の2024年度分までは表計算データとして公開されている。本発表ではこの1996年度以降分を分析対象とした。

### (2) 分析方法

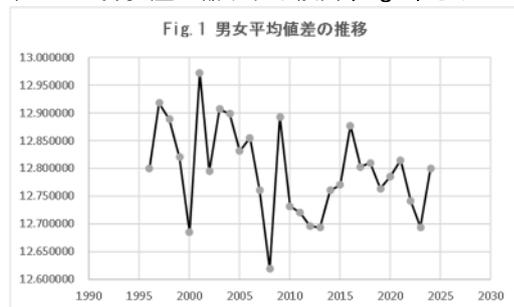
肥田野他(1961)により、17歳年齢コホートの男女毎に平均値・変動係数(変異係数)・歪度・尖度及び年度毎男女平均値差を算出し、それらの経年変化等に関わる検定等を実施した。各計算にはMicrosoft Excel 2019及び超漢字V表計算機能を用いた。

本データは身長を1cm単位に四捨五入したものを各級としており、また、年度毎の年齢コホート・男女別毎の調査実施者数を1000人に換算した値を掲載しており、小数点2桁以下を四捨五入している。よって各級の換算人数の合計が1000に合致しない場合が多々あり、この場合は計算上の人数として各級毎の換算人数を合計した値を用いた。

年度による各指標の推移に関し直線回帰係数等を算出し、両側5%を有意水準とするt検定を行った。自由度は全て27であり、閾となる $t_0$ は約±2.0518となる。

## 【結果】

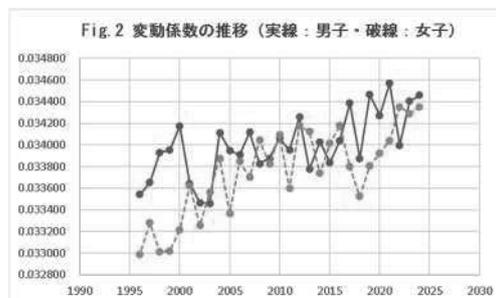
男子平均値は $\gamma \approx -0.6797$ ,  $t \approx -4.8157 < -t_0$ , 女子平均値は $\gamma \approx -0.4041$ ,  $t \approx -2.2957 < -t_0$ , 年度「男子平均値-女子平均値」は $\gamma \approx -0.3684$ ,  $t \approx -2.0592 < -t_0$ となり、平均身長が両性共低下しつつ男女差が縮小する傾向(Fig. 1)を示した。



男子の変動係数は $\gamma \approx 0.6755$ ,  $t \approx 4.7601 > t_0$ , 女子の変動係数は $\gamma \approx 0.8047$ ,  $t \approx 7.0430 > t_0$ であり、いずれも年々増大即ち身長分布の広がりが拡大する傾向を示した。(Fig. 2)

男子の歪度及び尖度は有意ではなかった。女子の歪度は $\gamma \approx 0.4633$ ,  $t \approx 2.7165 > t_0$ で0より大の領域で増大即ち分布が高身長側に傾いていく傾向を示した。尖度は有意ではなかった。

なお、何れの年度・性別においても歪度は3.0をやや超える程度であり、正規分布に近かった。



**【考察】**いわゆるバブル経済崩壊の後、男女各集団内での身長格差が拡大する一方、男女共身長が減少しつつ男女差が縮小する傾向が認められた。これらの現象の要因及び影響について、以下のように考察した。

### (1) 栄養及び経済的要因について

栄養状態とその要因としての経済状況が成人の身長に及ぼす影響が明らかである(Perkins 他, 2016)。よって、変動係数の経時的増大は、経済格差の拡大を強く示唆する。

### (2) ジェンダー関連

女子歪度の上昇の効果もあり、男性よりも高身長な女性の比率が上昇していくと予想される。井上他(2002)はジェンダーステレオタイプの定義を記述している。この一つとして男は女に比べて高身長であるべきとの観念を認識し得るが、変更が迫られる。近年、sanorin(2025)に見られるように男性よりも大柄の女性が自然な状態で登場するコミック作品が散見され、変更が進行している可能性がある。

他方、親の栄養等における男女への態度差が、身長減少の男女差を生じている可能性がある。

### (3) 身体計測的人間工学上の問題

服飾等の消耗品よりも、建築物や公共交通機関等での身体計測的領域の問題が大きくなり続けると考えられる。

### (4) 逆フリン効果及び知能分布の拡大

Magnusso 他(2006)が身長と最終到達学歴の間に関連を見出す等、身長と認知能力の間に相関が認められる。身長の縮小及び変動係数の増大は知能の低下及び格差を伴い、多様な困難を生じる可能性がある。

**【利益相反】**本研究及び発表に利益相反はない。

## 【引用文献】

- 肥田野直他(1961). 心理教育統計学, 培風館
- 井上輝子他編(2002). 岩波女性学事典, 岩波書店
- Magnusson, Patrik, et al(2006). Height at age 18 years is a strong predictor of attained education later in life: cohort study of over 950000 Swedish men. International Journal of Epidemiology. 35(3):658-663
- 文部科学省(1960). 学校保健統計調査. (URL省略)
- Perkins, Jessica, et al(2016). Adult height, nutrition, and population health. Nutrition Review. 74(3):149-165
- Sanorin(2025). 僕の彼女はデッサクワイイ. KADOKAWA (ひろしま かつよし)

# アタッチメントと他者のユーモアに対する魅力に関する日中調査

○中尾達馬<sup>1</sup> 李同归<sup>2,3</sup> (非会員)

(<sup>1</sup>琉球大学教育学部 <sup>2</sup>北京大学心理与认知科学学院 <sup>3</sup>行为与心理健康北京市重点实验室)

キーワード: アタッチメントスタイル ユーモアスタイル 日本・中国

アタッチメントとユーモアに関しては、アタッチメントの内的作業モデルが、ユーモアの生成や受容を方向付ける認知的な枠組みとして機能する、という視点から研究知見が蓄積されてきた。たとえば、Luevano et al. (2021)は、アタッチメントスタイルと潜在的パートナー (将来結婚をして家庭を築く可能性があるくらい自分にとって大切なパートナー) が示すユーモアスタイルへの魅力度との関連性について、アメリカで調査を実施した。その結果、アタッチメント不安(以下「不安」)とアタッチメント回避(以下「回避」)は、共に、潜在的パートナーが示すポジティブ・ユーモアスタイル (親和的ユーモアスタイル, 自己高揚的ユーモアスタイル) への魅力度とは有意な負の相関があり、潜在的パートナーが示すネガティブ・ユーモアスタイル (自虐的ユーモアスタイル, 攻撃的スタイル) への魅力度とは有意な正の相関があった (表1 上段)。したがって、不安定なアタッチメントを持つ人は、良好な関係性を育むユーモアスタイルには惹かれず、関係性に害をなす可能性のあるユーモアスタイルに惹かれるということが示唆された。

しかし、この現象は文化に関わらず生じることなのであるか。同じユーモアであっても、文化によっては受け取り方が異なるため (林, 2023)、先の西洋で得られた知見は、東洋では再現されない可能性がある。そこで本研究の目的は、Luevano et al. (2021)の結果が東アジア (日本、中国) でも再現されるかどうかを明らかにすることであった。

## 【方法】

**調査協力者** 調査協力者は、沖縄県の大学に通う日本人大学生 89名 ( $M=18.74$ , 男性 32名, 女性 56名, 答えたくない 1名) と北京市・河南省・湖南省北京市・河南省・湖南省の短大・大学に通う中国人短大・大学生 561名 ( $M=19.19$ , 男性 319名, 女性 242名) であった。恋愛経験のある者は、日本人大学生 44名, 中国人短大生・大学生 433名であった。

**質問紙** 質問紙は人口統計的質問 (学部, 学年, 年齢, 性別, 恋人の有無) と以下の尺度から構成されていた。

**アタッチメント不安・アタッチメント回避 (以下「不安」「回避」, ECR: Brennan et al., 1998)** 日本語版は中尾・加藤 (2004), 中国語版は李・加藤 (2006) を用いた (36項目・7件法)。

**潜在的パートナーのユーモアスタイルへの魅力度 (Luevano et al., 2021)** Luevano et al. (2021)はHSQ (Humor Styles Questionnaire, Martin et al., 2003)に基づき、本指標を作成した。日本語版は、日本語版HSQ (吉田, 2012)に基づき第一著者がこの指標を作成した (教示: これからいくつかのセリフが出てきます。それぞれについて「将来付き合うかもしれない恋人候補が、もしこれらのセリフのようなことを言ったとしたら...」、あなたはその人に対してどのくらいの魅力を感じますか。項目例: 「ふだんは人と一緒に笑ったり冗談を言いあったりはしない」と言うその人 (恋人候補) に、私は...、評定尺度: 1=「全く魅力を感じない」から7=「とても魅力を感じる」(32項目・7件法)。中国語版は、第二著者がこの指標を作成した。

**手続き・COI** 2025年5-6月にweb調査を実施した。本研究に関して開示すべき利益相反はない。

## 【結果と考察】

先行研究に基づき、各下位尺度得点 (加算平均値) を算出した。 $\alpha$ 係数は、日本人=.67-.91, 中国人=.72-.93と概ね許容範囲の内的整合性が得られた (親和的ユーモアと攻撃的ユーモアは、全項目版では $\alpha$ 係数が低かったため、本研究では、数項目を削除した短縮版を用いた)。

2 (国: 日本, 中国)  $\times$  2 (性別, 男性, 女性)  $\times$  2 (恋愛経験: 有, 無) を独立変数とし、潜在的パートナーのユーモアスタイルへの魅力度を従属変数とする3要因分散分析を行った。これら3要因は全て調査対象者間要因である。分析の結果、(1)親和的ユーモアで、国 $\times$ 性別の交互作用が、(2)自己高揚的ユーモアで、国の主効果、国 $\times$ 性別と国 $\times$ 恋愛経験の交互作用が、(3)攻撃的ユーモアへの魅力度で、国の主効果が有意であった。下位検定の結果、次の結果が得られた: (1)日本人女性は、日本人男性や中国人男性・女性に比べて、親和的ユーモアへの魅力度が有意に高かった (それぞれ  $M=4.67$ ,  $M=4.01$ ,  $M=4.18$ ,  $M=4.09$ )。 (2)日本人は、中国人に比べて、自己高揚的ユーモアへの魅力度が有意に高かった (それぞれ  $M=4.73$ ,  $M=4.16$ )。日本人は男女で、自己高揚的ユーモアへの魅力度に有意差はなかったが (それぞれ  $M=4.85$ ,  $M=4.67$ )、中国人においては、女性は、男性に比べて、自己高揚的ユーモアへの魅力度は有意に高かった (それぞれ  $M=4.35$ ,  $M=4.01$ )。日本人の恋愛経験あり群は、日本人の恋愛関係なし群や中国人の恋愛関係あり群・なし群に比べて、自己高揚的ユーモアへの魅力度が有意に高かった (それぞれ  $M=4.95$ ,  $M=4.52$ ,  $M=4.15$ ,  $M=4.17$ )。 (3)中国人は、日本人に比べて、攻撃的ユーモアへの魅力度が有意に高かった (それぞれ  $M=3.59$ ,  $M=2.57$ )。

アタッチメントスタイルと潜在的パートナーのユーモアスタイルへの魅力度とのピアソンの相関係数を算出した (Table 1)。その結果、アメリカと日本は、「不安」「回避」はポジティブ・ユーモアスタイルと有意な負の相関があり、ネガティブ・ユーモアスタイルとは有意な正の相関があるという類似した方向性での結果が得られた。しかし、中国に関しては、予測に反して、「不安」と潜在的パートナーが示す自己高揚的ユーモアとの間には有意な正の相関が、攻撃的ユーモアとは負の相関が得られた。今後は、なぜこのような結果が得られるのか、中国文化の特徴 (面子と個人的な関係 (グアンシー)、など) を考慮しながら、さらなる検討が必要であろう。

Table 1 アタッチメントスタイルと潜在的パートナーのユーモアスタイルへの魅力度

アタッチメント	ポジティブユーモアスタイル		ネガティブユーモアスタイル	
	親和的	自己高揚的	自虐的	攻撃的
アメリカ N=788	「不安」 -.36**	-.14**	.44**	.22**
	「回避」 -.54**	-.27**	.41**	.27**
日本 N=89	「不安」 -.23*	.04	.23*	.12
	「回避」 .06	-.25*	-.15	-.03
中国 N=561	「不安」 -.52**	.40**	.49**	-.30**
	「回避」 .03	-.27**	-.05	.28**

注) 表中の数字は、ピアソンの積率相関係数である。アメリカデータはLuevano et al. (2021)より抜粋した。\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ 。

(なかお たつま・りとき)

# ありのまま信念が新規職場適応に与える影響

谷口 淳一

(帝塚山大学心理学部)

キーワード：ありのまま信念、新規職場適応、真正の自己表現

【目的】本研究では、社会人を対象として、ありのまま信念の強さが新たな対人関係の形成を阻害するのかを検討した。

新規の環境に適応し、新たな対人関係を形成する際には、効果的な自己呈示を行うことが重要な課題となる。効果的な自己呈示とは、自己確認目標と自己高揚目標という2つの目標をともに充足するような自己呈示であり、本研究では、真正の自己表現とポジティブな部分の呈示として扱う。新たな人間関係を形成しようとする初対面場面では、ポジティブな評価を得ることが求められ、自己高揚目標が高まりやすい。そのため、自己確認目標との間に葛藤が生じ、自己呈示の選択に制約資源が消費され、結果として、効果的な自己呈示が行えないと推測される。また、自尊心が低い場合により2つの目標の葛藤が大きくなると考えられる。

自己確認目標を高める個人差として、「ありのまま信念」が挙げられる。ありのまま信念とは、「ありのまま」に他者に接することが望ましいという価値観を内在化している個人差である(谷口, 2017)。ありのまま信念が強ければ自己確認目標が活性化しやすいと予測される。つまり、自尊心が低い場合にありのまま信念が強ければ、自己確認目標と自己高揚目標の葛藤はより大きくなり、適切な自己呈示を行えず、結果として新規職場環境へ適応できないと予測される。仮説：自尊心が低い場合に、ありのまま信念が強いほど真正の自己表現、自分のポジティブな部分の自己呈示を行えず、新規の職場環境に適応できないだろう。

また、非真正の自己表現、ネガティブな部分の呈示、自己呈示のポジティブさの程度についても探索的に検討する。

【方法】分析対象者 インターネット調査会社の登録モニターで、「現在、特定の企業・組織に勤務しており、その企業・組織に勤め始めてから6ヶ月以内の20代~40代」の646名(男性301名、女性345名、平均年齢35.60 ( $SD=8.33$ )歳)を分析対象とした。(谷口他(2024/社心大会)と同一データ)調査項目 1)自尊心(山本ら,1982, 9項目, 5件法)、2)ありのまま信念(谷口, 2017, 12項目, 5件法)、3)現在の職場の同僚に対する真正・非真正の自己表現の程度(谷口・宮川, 2023, 8項目, 6件法)、4)同僚へのポジティブ/ネガティブな部分の呈示、自己呈示のポジティブさ(谷口他, 2022, 各1項目, 5件法)、6)現在の職場への適応(高木, 2003, 13項目, 5件法)。

【結果】ありのまま信念12項目について因子分析を行ったところ、谷口(2017)同様に「ありのまま保持」と「ありのまま呈示」の2因子が得られた。本発表では「ありのまま呈示」を用いた分析のみを報告する。「誰に対しても、ありのままの自分を見せるべきである」など5項目から構成されており、合成変数を求めて分析に用いた( $\alpha=.75$ )。

「ありのまま呈示」と自尊心、交互作用項を説明変数、職場適応と5種類の自己呈示をそれぞれ目的変数とする重回帰分析を行った(Table参照)。職場適応、真正の表現、非真正の自己表現、ポジティブな部分の呈示、自己呈示のポジティブさについて、自尊心が正の有意な関連を示していた。また、職場適応、真正の自己表現、ポジティブな部分の呈示、ネガティブな部分の呈示については「ありのまま呈示」が正の有意な関連を示していた。さらに、非真正の自己表現については交互作用項が有意となっていた。下位検定を行ったところ、自尊心が高い(+1SD)場合には、ありのまま呈示の有

意な正の関連が示されていたが( $b=0.18, p=.005$ )、自尊心が低い(-1SD)場合には、ありのまま呈示は有意な関連を示していなかった( $b=-0.03, p=.590$ ) (Figure参照)。

【考察】自尊心の高低に関わらず、ありのまま信念が強いほど真正の自己表現、ポジティブな部分の自己呈示を行い、また職場に適応しているという結果から、仮説は支持されなかった。ありのまま信念が強いことで自己確認目標と自己高揚目標が葛藤すると予測したが、実際は葛藤していないのかもしれない。ありのまま信念が強いほど、ネガティブな部分の自己呈示もより行っていたが、自らのポジティブな部分についてもまさにありのままに呈示しようとすることで、自己高揚目標を充足し、結果として職場にも適応できていたとも考えられる。

また、非真正の自己表現に関わる交互作用の結果も興味深い。自尊心が高い場合に、ありのまま信念が強いほど非真正の自己表現をより行っているというのは一見、理解しがたい結果であるが、次のようにも解釈できる。自尊心が高い人は相手から受容されているという安心感もあることから、ありのまま信念が強いほど、相手もありのままにふるまえるように配慮し、非真正の自己表現をより行うとも考えられる。

※本研究は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号16K04277)の助成を受け実施した。

(たにぐち じゅんいち)

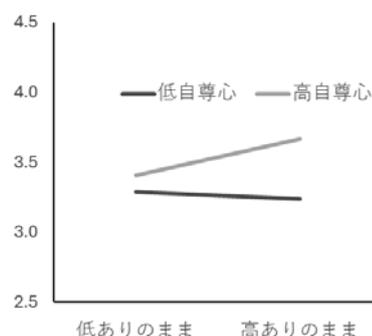
Table 各自己呈示についての重回帰分析結果

	職場適応	AE	IAE	Posi呈示	Nega呈示	Positivity
自尊心	.24 ***	.32 ***	.15 ***	.30 ***	.05	.18 ***
ありのまま呈示	.08 *	.25 ***	.06	.14 ***	.14 ***	.00
群×ありのまま呈示	.06	.05	.11 **	.00	-.02	.01
$R^2$	.07 ***	.19 ***	.04 ***	.12 ***	.03 ***	.03 ***

表の数値は、標準化偏回帰係数 \*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

AE：真正の自己表現、IAE：非真正の自己表現、Posi呈示：ポジティブな部分の自己呈示、Nega呈示：ネガティブな部分の自己呈示、Positivity：自己呈示のポジティブさ

Figure 自尊心×ありのまま呈示の新たな職場の同僚に対する非真正の自己表現



# マッチングアプリに対して大学生が持つ印象

——地域差と NIMBY の関連——

○ 井川純一<sup>1</sup>

(<sup>1</sup> 東北学院大学)

キーワード：マッチングアプリ，地域差，NIMBY

## 【目的】

2023 年の調査 (MMD,2023) では、特に若年層においてはマッチングアプリの利用頻度が高くなり、すでにネットにおける出会いは一般化していることが示唆される。

本研究では、オンライン上の出会いと対面上 (以下リアル) の出会いに関するイメージの差異について検討する上で、NIMBY (Not In My Back Yard : 全体としては賛成だが、身近な人には反対する傾向) と地域差に着目して検討する。

ネット恋愛に関するイメージ調査 (2020) では、オンラインによる出会いに対しての抵抗やネガティブな印象を持つ人々が多いことが分かっている。しかし、ネット上での出会いが一般化しつつある現状では、そのネガティブな印象は減少しつつあると考えられる。しかし、一般論としてはネガティブな印象が減っていたとしても、自己の交際相手など親密な他者に関連する場面では依然としてネガティブな印象が残っている可能性がある。また、若者人口が多い都市圏においてはリアルでの出会いの機会が高く、人口の少ない地方都市と比較するとネット上での出会いを選択する必要性は低くなる。この観点から考えると、地方都市のほうがネットでの出会いを求める可能性が高く、ネガティブな印象が小さくなるかもしれない。一方、コミュニティが小さい場合には、他者からの評判の影響が大きいため、地方都市のほうがネットでの出会いにネガティブな印象を持つことが予測される。

## 【方法】

**調査参加者** 東京都内 (N=74)、及び地方都市 (N=246) の国公立大学生 (男性 194 名、女性 126 名、平均年齢 20.853 歳) を対象とした。

**手続き** 2025 年 1 月-3 月、学習支援サービス上のコースニュースで調査サイトを公開し、学生は適宜調査に参加した。

**オンラインでの出会いに関する実態調査** 出会い系アプリを利用した恋愛経験 (あり・なし・恋愛経験なし)、アプリ利用への抵抗感、評判懸念 (アプリを利用していることを周囲に知らせる程度)、友人の利用経験。それぞれ 5 件法。

**シナリオ実験** 対象条件 (恋愛感情を持つ異性の元恋人 / 異性の友人の元恋人)、手段条件 (アプリ / 対面) を操作した 4 種類の短文シナリオを使用し、特性形容詞尺度 (林, 1978) 20 項目 (SD 法 7 段階) を用いて、対象人物の A さんの印象を評定した。

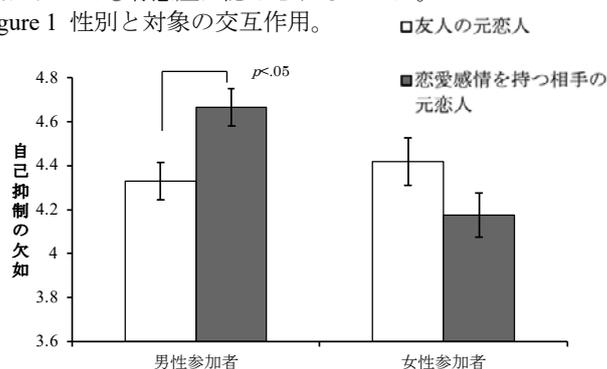
## 【結果】

調査対象者のうち、マッチングアプリを通じた恋愛経験があるのは都市圏 (11.8%) よりも地方都市 (5.4%) が低かったが、有意差は認められなかった ( $\chi^2(2)=3.47, V=.10, p=.18$ )。一方、友人のアプリ利用者は都市部が高くなった ( $t(214.05)=7.20, r=.29, p<.01$ )。評判懸念を従属変数、性別及び地域を独立変数とした分散分析を行ったところ、性別 ( $F(1, 316)=6.02, \eta^2=.02, p<.05$ )、地域差 ( $F(1, 316)=10.96, \eta^2=.03, p<.01$ ) 及び交互作用 ( $F(1, 316)=6.58, \eta^2=.02, p<.05$ ) が認められ、地方都市及び女性のほうがマッチングアプリの利用を周囲に隠す傾向が明らかとなった。また、抵抗感についても同様の分析を行ったところ、地域差は認められなかったものの ( $F(1, 316)=0.38, \eta^2=.00, p=.54$ )、女性の

ほうが抵抗感があることが明らかとなった ( $F(1, 316)=5.37, \eta^2=.02, p<.05$ )。

シナリオ実験における印象評定尺度について、探索的因子分析を行ったところ、「軽率、恥知らず、責任感のない」などの得点が高くなる自己抑制の欠如 ( $\alpha=.82$ )、「近づきたい、非社会的・沈んだ」などの得点が高くなる対人回避傾向 ( $\alpha=.81$ ) が抽出された。両尺度得点を従属変数とし、対象条件 (恋愛感情を持つ異性 / 異性の友人)、手段条件 (アプリ / 対面) 及び調査参加者の性別の 3 要因及び地域差を共変数として投入した分散分析を行った。自己抑制の欠如については、アプリ利用者 ( $F(1, 311)=15.47, \eta^2=.05, p<.01$ ) のほうが高く認知され、男性参加者のほうが高く評定 ( $F(1, 311)=4.47, \eta^2=.01, p<.05$ ) する傾向が認められた。また、対象条件と性別の交互作用に着目したところ、女性参加者の場合には、友人と恋人の間で差は認められなかったが、男性参加者の場合には、恋愛感情を持つ相手の元恋人に対する自己抑制の欠如の評定が高くなっていた ( $F(1, 311)=9.41, \eta^2=.03, p<.01, \text{Figure 1}$ )。なお、対人回避傾向についてはどの変数においても有意差は認められなかった。

Figure 1 性別と対象の交互作用。



## 【考察】

出会い系アプリ利用に対する抵抗感、評判懸念については都市部よりも地方都市、男性よりも女性のほうが高くなった。実際にアプリを利用した恋愛経験の割合からも、地方都市よりも都市部のほうがアプリ利用の一般化が伺える。

シナリオ実験を用いて、NIMBY と地域差について確認したところ、リアルよりもアプリの利用者のほうが自己抑制の欠如が高く評定され、ネガティブな印象が依然として継続していることがわかる。また、女性参加者では差が認められなかった手段の効果が、男性参加者では認められ、男性の場合が恋愛感情を持つ異性の恋愛相手に対してよりネガティブな印象を持つことが明らかとなった。

一方、想定したアプリと NIMBY の関係については認められなかった。本研究では、利用者への印象を間接的に検討するため、対象の元恋人という設定としたため、明らかな効果は認められなかった可能性がある。

**【利益相反】** 本研究において、開示すべき利益相反 (conflict of interest; COI) はない。

## 【引用文献】

林 文俊 (1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察. 名古屋大学教育学部紀要, 25, 233-247.

(いがわ じゅんいち)

# 若手リーダーはいつ「矛盾」を活かせるのか？

## —パラドキシカル・リーダー行動に与える年上部下比率の曲線効果と外向性の調整効果

竹内 規彦

(早稲田大学商学大学院)

キーワード：上司部下間の年齢逆転現象、パラドキシカル・リーダー行動、リーダー関係エネルギー

**【目的】** 日本の総人口に占める 65 歳以上の比率は 2024 年に 29% を超え、55 歳以上の就業者数も過去 10 年で約 1.4 倍に拡大した (総務省統計局, 2014, 2024a, 2024b)。加えて、大企業では役職定年制が普及し、管理職ポストを離れたシニアが「専門職」や「嘱託」として在籍し続ける傾向が強まっている。この結果、課長級・部長級の若手リーダーが自分より年上の部下を抱える「年齢逆転現象」が多くの職場で散見されている。地位特性理論 (status characteristics theory) では、年齢は文化的に一般化された能力期待 (例えば、年長者は経験豊富で有能という期待) を抱かせる属性であり、年上部下の存在は若手リーダーに地位脅威をもたらすと説明している (Berger & Zelditch, 1966)。一方で、年上部下はリーダーに対して豊富な経験や外部ネットワークという資源も提供するため、その比率が適度であればリーダーの柔軟な行動や部下との関係性から得られる活力を促進するだろう。資源保存理論 (conservation of resources theory) では、人は保有資源が脅威を上回るときに探究的な行動を取り、資源喪失を予防すると防衛的になると説明している (Hobfoll, 1989)。これら両理論を統合すると、職場における年上部下比率が低い状況では資源効果が優勢である一方、一定点を超えると脅威が資源を凌駕することが想定される。

そこで本研究では、資源と脅威の均衡バランスを反映する年上部下比率が、上司のパラドキシカル・リーダーシップ行動 (paradoxical leader behavior: 以下、PLB) の発揮度に曲線的 (逆U字型) 影響を与え、その結果、部下から得られるリーダーの関係エネルギー (leader relational energy: 以下、LRE) を促すことを仮定する曲線媒介モデルを提起する。PLB とは、距離と近接、統制と自律、自己志向と他者志向など相反する要求を同時に満たすリーダー行動であり (Zhang et al., 2015)、複雑な組織・職場環境に適応する上で不可欠とされる。また、LRE は、上司が部下との相互作用によって得られる活力状態を指す (Owens et al., 2016; Zhang & Chen, 2022)。

さらに、本研究は、性格 5 大因子の「外向性」が年上部下比率と PLB の逆 U 字曲線の関係をどのように調整するかを検証する。外向性は社会的接触を通じ活力を獲得できる個人資源である一方、他者からの評価に敏感で地位脅威を感じやすい (Judge et al., 2002)。最近のメタ分析結果では、外向性が仕事場面のポジティブ感情と強く結びつく一方、対人ストレスの高い状況下では負の影響を及ぼす二面性を示唆している (Zhou et al., 2021)。したがって、外向性が高いリーダーは年上部下が少数派の時に資源を最大化し PLB が高まるが、多数派になると脅威感受性が増幅し PLB の低下が急激になると仮定する。以上から、本研究では、地位特性理論と資源保存理論の視点を組み込んだ曲線効果を含む調整媒介モデル (図 1) を提起し、縦断データを用いた検証を行う。

**【方法】** 従業員 100 名以上の日本企業に勤める課長・部長級のリーダーを対象として、6 か月間に複数回の定点観測を含めた縦断的調査を実施した。本研究では調査期間に直属部下のメンバー構成に変化がなかった 893 名 (平均年齢 43.6 歳、部下 2~11 名) を分析に使用した。測定尺度は以下の通りである。年上部下年齢比率 (%) は Time 1 時点において、①直

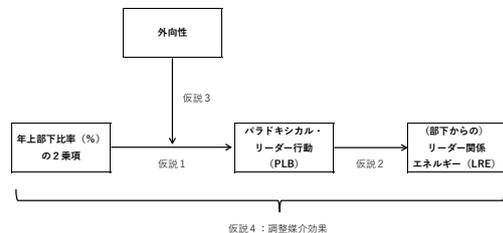


図 1. 本研究の仮説モデル

属の部下総数と ② 自分より年上の部下数の回答を求め、 $② \div ① \times 100$  により算出した。

**PLB** は

Time 2 時点にて、Zhang et al. (2015) の 22 項目 ( $\alpha = .95$ ) により測定した。**LRE** は Time 3 時点において、Huang et al. (2023) の 5 項目 ( $\alpha = .91$ ) をもとに測定した。**外向性** は Time 1 にて、Wallace & Chen (2006) の 8 項目 ( $\alpha = .81$ ) を使用した。**統制変数**：性別、年齢、勤続年数、学歴、企業規模、部下数、年上部下比率 (線形項)。なお、年上部下比率の 2 乗項は、事前に変数を中心化 (Aiken & West, 1991) を行っている。

**【結果】** SPSS の Process Macro による解析の結果、年上部下比率の 2 乗項は PLB に有意な負の効果 ( $b = -.06, p < .05$ ) を示し、PLB は LRE に有意な正の効果 ( $b = .24, p < .001$ ) を示した。また、年上部下比率 (2 乗項) と外向性 (線形項) の交互作用項は、PLB に対して、有意な負の効果 ( $b = -.047, p < .05$ ) を持つことが明らかとなった。上記の調整媒介効果 (ブートストラップ:  $n = 5000$ ) は、 $MM = -.011 [-.025, .001]$  で 95% 信頼区間に 0 含まず有意であった。具体的には、高外向性 (+1SD) 条件において、年上部下比率 (2 乗項) の負の効果が最も強く、低外向性 (-1SD) 条件では非有意であった。図 2 のプロットより、高外向性リーダーは年上部下比率が約

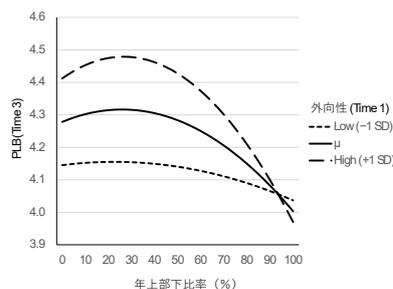


図 2. リーダーの外向性が年上部下比率とパラドキシカル・リーダー行動 (PLB) の関係に与える調整効果

25% の時に PLB がピークに達し、6 割を超えると急降下し、更に 9 割を超えた付近で低外向性のラインを下回ることが観察された。最後に PLB を介した LRE への間接効果は高外向性で最大で、低外向性では検出されなかった。

**【考察】** 外向性が高いリーダーは社交性を通じて少数の年上部下から得られる知識資源を最大化し PLB を高めるが、年上部下が多数派になると自己に対する評価不安が増幅し、脅威が資源を上回って PLB が急減するものと推察される。一方、外向性の低いリーダーは獲得する資源が少なく PLB の発揮度は相対的に低いものの、脅威に対する感受性も低いため下降幅が小さいと考えられる。したがって、外向性の高い若手リーダーを配置する際は、年上部下比率を 4 分の 1 程度とすると最も矛盾を生かしたリーダー行動を発揮し、自身の関係エネルギーを高められる一方、過半数を超えるような職場への配置には負の側面が顕在化するため注意が必要である。

(たけうち のりひこ)

# 推し活の行動的側面の構造と推しの対象の関連について

—探索的因子分析と多重コレスポネン分析による検討—

○山村豊<sup>1</sup> 菅野智子<sup>2</sup> 大森哲至<sup>3</sup> 田宮憲<sup>3</sup>

(<sup>1</sup>桜美林大学 <sup>2</sup>立正大学 <sup>3</sup>帝京大学)

キーワード：推し活 推しの対象 多重コレスポネン分析

## 【問題と目的】

**問題** 推し活とは、強く気に入った人や物を応援する、支えるといった活動全般を指す。菅野・山村(2024)は、推し活の心理的側面について検討した結果、「熱中」、「疑似恋愛」、「憧れ」、「情報収集(情報欲求)」、「同調」の5因子から構成されることが示唆された。しかし、推し活は「活動」であることから、心理的側面だけではなく行動的側面からの検討が必要であろう。またその活動は、何を推しているのかという対象によって違いがあると予想される。

**目的** 本研究では、推しの行動的側面(推し行動)に関する質問項目を作成し構造を検討するとともに、推しの対象との関連について検討する。

## 【方法】

**調査対象者** 推し活をしている大学生188名(男性55名、女性81名、その他2名)、平均年齢19.51±1.17歳であった。

**実施時期・場所** 2024年10~12月にかけて関東圏内の大学の授業で募集をし、授業後Googleフォームにて実施した。

**質問項目** 推し活については、ファン行動に関する先行研究(例えば、小城,2004; 向居ら,2016)で使用された質問項目などを参考に41項目を作成した。選択肢は、「いつもしている」(4点)から「まったくしていない」(1点)の4件法であった。また、推しの対象については、13種類(Fig.の□の12種類と「それ以外」)の中から最も推している対象を選択する単一回答法による質問項目を作成した。

**手続き** 調査対象者に承諾を得た上で、Googleフォームで作成した質問紙に回答を求めた。

## 【結果と考察】

**推し行動の構造** 推し活に関する41項目について、平均と標準偏差を算出したところ、天井効果や床効果がある項目はなかったため探索的因子分析(最尤法・Promax回転)をおこなったところ、因子負荷量の低い項目があった。それらを除いて再度探索的因子分析をおこなったところ、解釈可能な4因子が抽出された(累積寄与率57.39%)。

因子1は項目「推しの写真や動画を観る」など写真・動画の視聴、メディア情報のチェック、習慣的な思考など、見る・知る・考えるという生活に溶け込む内容となっていることから「日常的接触行動」、因子2は項目「推しのグッズをコレクションにする」などモノを通じた推しとの結びつきや物理的な推しの取り込みを求める内容となっていることから「アイテム所有行動」、因子3は項目「推しの言動を真似たり、取り入れたりする」など推しの言動・外見を取り入れ、その世界に没入する内容となっていることから「同一化・模倣行動」、因子4は項目「知人や友人を推しのライブやコンサートに誘う」など実際にコンサートやライブ、イベントに参加する内容となっていることから「現場参加行動」と解釈できる。

**推し行動と対象との関連** 因子分析で得られた4因子それぞれの下位尺度得点と推しの対象との関連を検討するため、各下位尺度得点の平均と標準偏差を算出し、平均+0.5標準偏差以上を高群、平均+0.5標準偏差未満~平均-0.5標準偏差以上を中群、平均-0.5標準偏差未満を低群としたうえで、推

しの対象12種類とのクロス集計にもとづいて、多重コレスポネン分析をおこなった(Fig.)。その結果、寄与率が次元1で48.22%、次元2で30.91%であり、累積寄与率70%以上であったことから、2次元プロットによって因子と推しの対象との構造的関係を十分に可視化できると判断した。

次元1は、どの因子も得点が高いほど高群が、低いほど低群が、そしてその中間部に中群が布置していることから、推しへの関与度の軸と解釈できる。一方、次元2は、得点が高いほど「ドラマ・舞台」や「アニメ」「ボーカロイド」など架空性が高い推しの対象が布置であるのに対し、得点が高いほど「コミック」や「スポーツ」「お笑い」など直接的な体験や娯楽性の高い推しの対象が布置していることから、バーチャル体験的リアルの軸と解釈できる。これらを踏まえると、「ボーカロイド」「アイドル」「ノベル」「ドラマ舞台」は「接触高」「同一化高」「所有高」などと近いことから没入感が強く創作/フィクション的要素への共感が高い推し活、「K-POP」「スポーツ」は「現場中」「所有中」に近いことから現実的な活動とメディア消費がバランスした推し活、「お笑い」「ゲーム」「コミック」は「接触中」「同一化中」「所有低」などと近いことから日常娯楽的な推しで、強い没入はせずに楽しむ推し活と解釈できるだろう。

推し活は、その背景に心理的側面がある。本研究では行動的側面のみに焦点をあてて分析したが、今後は、菅野・山村(2024)がおこなった推し心理との関連も含めて検討したい。

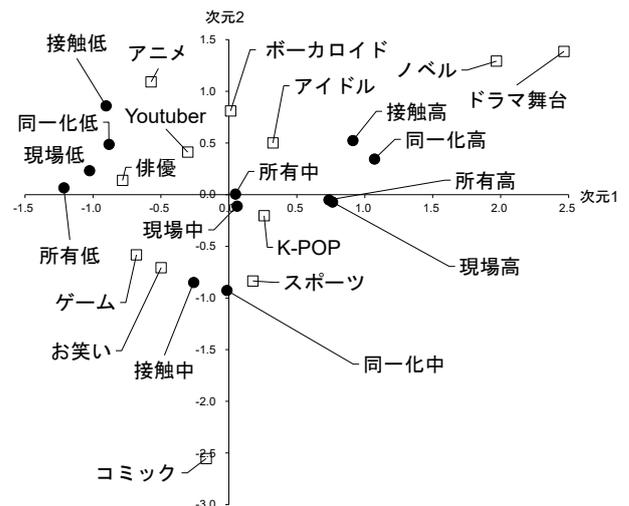


Fig. 多重コレスポネン分析の結果

## 【主要引用文献】

菅野智子・山村豊(2024)「推し」の心理構造に関する探索的研究. 日本心理学会第88回大会.

(やまむらゆたか・すがのともこ・おおもりてつじ・たみやけん)

# 推し活の心理的側面と行動的側面の関連について

ークラスター分析とコレスポネンス分析による検討ー

○菅野智子<sup>1</sup> 大森哲至<sup>2</sup> 田宮憲<sup>2</sup> 山村豊<sup>3</sup>

(<sup>1</sup>立正大学 <sup>2</sup>帝京大学 <sup>3</sup>桜美林大学)

キーワード：推し活 推し心理 推し行動

## 【問題と目的】

**問題** 推し活とは、強く気に入った人や物を応援する、支えるといった活動全般を指す。ファンに関する先行研究（例えば、小城,2004; 向居ら,2016）がファン心理とファン行動を区分するように、推し活についても心理的側面（推し心理）と行動的側面（推し行動）に分けて検討する必要がある。菅野・山村(2024)は推し心理について、山村・菅野ら(2025)は推し行動を検討したが、両者の関連については検討していない。

**目的** 本研究では、菅野・山村(2024)と山村・菅野ら(2025)にもとづいて、推し心理と推し行動の関連について検討した。

## 【方法】

**調査対象者** 推し活をしている関東圏内の大学生 55 名（男性 24 名、女性 31 名）、平均年齢 18.56±0.68 歳であった。

**実施時期・場所** 2024 年 10 月中旬に関東圏内の大学の授業で調査対象者を募集した。

**質問項目** 推し活の心理的側面については、菅野・山村 (2024) の 30 項目（選択肢は「とても当てはまる」(5 点)～「まったく当てはまらない」(1 点)の 5 件法）を使用した。また、行動的側面については、山村・菅野ら (2025) の 17 項目（選択肢は「いつもしている」(4 点)から「まったくしていない」(1 点)の 4 件法）を使用した。

**手続き** 承諾を得られた調査対象者に対して、授業終了後に Google フォームで作成した質問紙に回答を求めた。

## 【結果と考察】

**推し心理によるタイプ分け** 菅野・山村 (2024) に基づいて算出した各因子（熱中、疑似恋愛、憧れ、情報収集（情報欲求）、同調の 5 因子）の下位尺度得点によって調査対象者の階層性クラスター分析を行った。その結果 3 クラスターに分類することが適切だと判断した。

各クラスターの下位尺度得点の平均と標準偏差を算出したところ (Fig.1)、クラスター1 は全般に得点が低く、低関与的であることから「ライトフォロアー型」、クラスター2 は中程度の関与でありながら同調が最も高いことから「仲間・同調型」、クラスター3 は熱中・憧れ・情報収集が高く同調が低いことから「没入・個人型」と解釈した。

**推し心理と行動の関連** 推し心理のタイプと推し行動との関連を検討するため、山村・菅野ら (2025) に基づき「推し活」各因子（日常的接触行動、アイテム所有行動、同一化模倣行動、現場参加行動）の下位尺度得点からそれぞれ平均と標準偏差を算出し、平均+0.5 標準偏差以上を高群、平均+0.5 標準偏差未満～平均-0.5 標準偏差以上を中群、平均-0.5 標準偏差未満を低群とした。これら 3 群と推し心理のタイプについてコレスポネンス分析をおこなったところ、次元 1 の寄与率が 99～82% で、強い一次元構造が示された (Fig.2)。

推し心理の各タイプにおける推し行動をみると、ライトフォロアー型は、過度な経済的な負担をかけずに推し活を楽しんでいる群といえる。アイテム購入も現場参加もその都度選んで行っているタイプであった。一方、没入・個人型は、アイテム購入や現場参加が多く、同一化模倣行動も高い熱心な推し活をしている群である。推し対象に心酔しており、多く

の時間とお金を投入しているタイプである。そして、仲間・同調型は情報収集(情報欲求)が多いものの、アイテム購入や現場参加が少ない、時間的経済的負担が少ないような活動をしている群である。仲間とワイワイ推しを愛でることに重点を置いているタイプであった。これらのことから、推し心理と推し行動は一定の対応関係があり、推し心理のタイプによって推し行動が影響を受けることが示唆された。

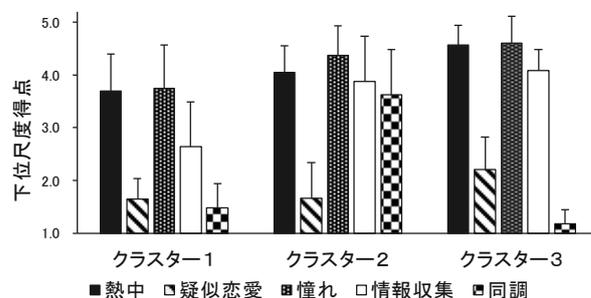


Fig.1 各クラスターの「推し心理」平均下位尺度得点

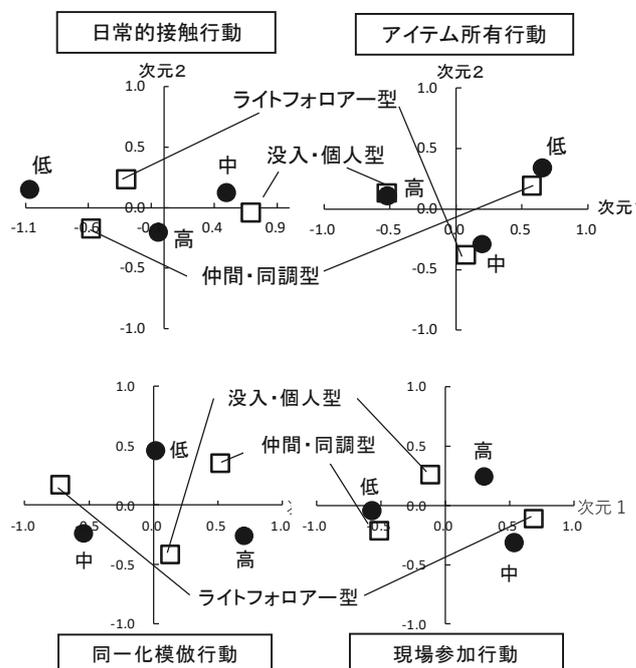


Fig.2 コレスポネンス分析の結果

## 【主要引用文献】

菅野智子・山村豊 (2024) 「推し」の心理構造に関する探索的研究. 日本心理学会第 88 回大会.

山村豊・菅野智子・大森哲至・田宮憲 (2025) 推し活の行動的側面の構造と推しの対象の関連について. 日本応用心理学会第 91 回大会.

(すがのともこ・おおもりてつじ・たみやけん・やまむらゆたか)

# あおり運転を誘発する運転行動の要因の検討

## —STAXI を用いた怒り表出傾向との関連—

○今井靖雄<sup>1</sup> 小島治幸<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>金沢大学大学院人間社会環境研究科 <sup>2</sup>金沢大学人文学系)

キーワード：あおり運転・攻撃的行動・怒り感情

### 【目的】

近年、あおり運転は報告数が増加していることから、交通分野における重大な課題として注目されている。あおり運転によって、あおる側とあおられる側の両者とも危険な運転になっているだけでなく、当事者以外の交通参加者を事故に巻き込む可能性もあることから、その危険性が指摘されている。

あおり運転減少のため、これまではあおり運転を行う運転者の心理的な発生メカニズムや心理特性が検討されてきた。例えば、あおり運転に関する研究論文をレビューした中井(2021)は、運転中の他車とのコミュニケーション不足や他車の挑発的な運転行動が、運転者に強い怒りを引き起こし、結果として攻撃的な運転行動へと発展するプロセスが分析されている。さらにこの論文では、運転者の情動制御能力の低さという個人特性が、あおり運転を実施する重要な要因となりえると指摘している。

過去の判例や報告事例をレビューした川本(2017)は、他車の行動を不快に感じるのが、あおり運転のきっかけとなっていることや、あおり運転行動が単なる報復的な反応ではなく、“他の運転者に自らの行動を見直させる”という教育的観点があると示唆している。以上のように、あおり運転の研究は、あおり運転を行う運転者が対象とされてきた。

しかし、あおり運転は他車の行動によって誘発されていることが示唆されており、“思い知らせる”といった行動があおり運転になっている可能性がある。それに対して、全国の運転者 2,230 人を対象にチューリッヒ保険会社が行ったオンライン調査(2024年6月実施)によると、あおられた 76.3%の運転者があおられた理由について“思い当たらない”と回答しており、あおられる側は無自覚に怒り感情を生起させる行動を行っていることが推測できる。このことから、あおり運転の減少のためには、あおり運転を誘発する運転行動を明らかにし、その行動を減少させるアプローチを取ることが有効と考えられた。

本研究では、“あおり運転”という運転場面における怒り感情の要因に注目している。怒りの要因は運転場面に特有ではなく、日常場面で感じる一般的な怒りの要因と共通する部分があることが指摘されている。たとえば藤井(2014)では、運転中に運転者が怒りを感じる状況を検討しており、“運転マナー”といった因子を抽出している。これらは日常場面の“他者への配慮がないことへの怒り”の因子と対応させて考えることができる。つまり、怒りを引き起こす要因は、場面が異なっても、心理的背景が共通する可能性があるといえる。本研究では、運転場面で使われてきた怒り誘発刺激だけでなく、幅広い怒り誘発刺激を作成するために、日常場面の怒りを扱った研究も参考にすることとした。

### 【方法】

#### “あおり運転を誘発する運転行動”の質問項目の作成

あおり運転を生起させる他車の行動を明らかにするため、以下の二段階の手続きを踏んで、「あおり運転を誘発する他車の行動」尺度を作成する。

場面を運転場面に限定せず、国内外の怒りと攻撃的行動に関する先行研究を精査する。それらの先行研究で示された怒りを生起させる因子を収集する。例えば、不公平に関する因

子や侮辱に関する因子などがあつた。このフェーズにおいて、日常場面では注目されにくいものの、運転場面では影響を及ぼすと考えられる”しつこい行動”と”突発的な行動”の因子を加えることとした。

次に、有識者および運転頻度の高い大学生とグループディスカッションを行いながら、先行研究から得られた各因子を基に、運転場面において怒りを生起させる具体的な行動をあげていく。例えば、侮辱に関する因子においては、「追い越しの際、こちらをみてにやにやしていた。」といった行動があげられた。

以上の手続きを経て、怒り感情を生起させる運転行動を 100 項目程度作成する。具体的な運転行動内容には、車間距離の極端な接近、ウインカーを使用しない車線変更、速度超過、長時間のクラクション使用、急な割り込み、追越し時の無理な加速などが含まれる。

### 怒り傾向の測定

参加者の個人差を評価するために、State-Trait Anger Expression Inventory (STAXI; Spielberger, 1999) 日本語版(44項目)を用いる。尺度は、状態怒り(State Anger)、特性怒り(Trait Anger)、怒りの表出(Anger-Out, Anger-In)、および怒りの制御(Anger-Control)に関する下位尺度が含まれていた。

### 手続き

実験参加者は“あおり運転を誘発する運転行動”質問紙に回答させる。これらの質問項目に対して、実験参加者は「あなたがこれらの運転行動を見た時、この運転者はあおられると感じるか」の質問に 0(まったくお思わない)から 5(まったくそう思う)の 6 件法で回答させる。

続いて、STAXI を実施する。質問に対して、あてはまった程度を 1(まったくあてはまらない)から 4(非常によくあてはまる)の 4 件法で回答させる。

### 分析手法

”他車の行動に対する評価”のデータに因子分析を行い、因子得点を算出する。STAXI スコアを説明変数、得られた因子得点を目的変数とした重回帰分析またはおおよび相関分析を用いて、怒りの種類や表出パターンの違いが他車の行動に対して不快感を感じる程度に影響を及ぼしているか検討する。

【利益相反】利益相反はありません。

### 【引用文献】

藤井義久(2014). ドライバーの怒り感情とその対処行動に関する研究. (Doctoral dissertation, iwate University).

川本哲郎(2019). 交通犯罪としての「あおり運転」の抑止に向けて. (Doctoral dissertation, Doshisha University).

中井宏(2021). あおり運転に関する研究の概観と抑止策の提案. 交通科学, 52(1), 3-12.

チューリッヒ保険会社(2024). あおり運転実態調査, <http://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000115.000042390.html> (最終アクセス 2025.6.13)

(いまい やすお・こじま はるゆき)

# チーム・パラドックス・マインドセット尺度作成の試み

—パラドキシカル・リーダー行動の影響を中心に—

○新保 智之<sup>1)</sup> 竹内 規彦<sup>2)</sup>

(<sup>1)</sup> 早稲田大学大学院商学研究科 (<sup>2)</sup> 早稲田大学商学学術院)

キーワード：パラドキシカル・リーダー行動、パラドックス・マインドセット、リーダー・メンバー交換関係

**【目的】** 製造業では組織横断的に編成されるクロス・ファンクショナル・チーム (cross-functional team: 以下、CFT) の導入事例が増えている。CFT は各組織から必要に応じて召集され、役割の終了と共に解散される時限的なチームである。CFT は部署の壁を越えて全社的な課題解決を推進できる点がメリットである。一方、CFT で取り扱う問題・課題が、自部署の利害に反することもあり、それぞれの部署が集団浅慮に陥る可能性がある。従って、CFT で成果を出すためには、部署間の異なる利害関係がある状況、つまりパラドキシカルな(対立・矛盾するが相互に関連している) 状況をうまくマネジメントすることができるリーダーシップが必要不可欠である。

近年、パラドキシカル要素を同時に追求するリーダーシップとして、パラドキシカル・リーダー行動(paradoxical leader behavior: 以下 PLB)が注目されている。PLB とは、「一見矛盾しているように見えるが相互に関連し、矛盾する要求を同時かつ長期的に満たすリーダーの行動である」(Zhang et al., 2015, p. 539)。Yang et al (2023) は、PLB がメンバー個人のパラドックス・マインドセット(individual-level Paradox Mindset: 以下、I-PM)を媒介して創造的逸脱に正の影響を与えると報告している。I-PM とは、「矛盾する要素間のテンションを受け入れ、活力を得る程度」(Miron-Spektor et al., 2018, p. 27)である。一方、これまでの先行研究はリーダーとメンバーの1対1の関係性を前提とした個人ないしは2者間レベルでの研究がほとんどである。CFT をはじめとするチームレベルにおいては、個人のマインドセットに加えて、チーム・パラドックス・マインドセット (team-level PM: 以下、T-PM)、すなわち「所属するチームが緊張状態を受け入れ、緊張によって活力を得ることができるとメンバー個人が感じている程度」が重要な役割を果たすと考えられる。

そこで、本研究では(1)T-PM 概念及び測定尺度の提起、(2)PLB が I-PM に与える効果の CFT における追試、及び(3)PLB が T-PM に与える効果の検証を目的とする。(2)に関しては、社会的学習理論(Bandura, 1977; Neubert et al., 2013; Weiss, 1977, 1978)に基づき、リーダー・メンバー交換関係(leader-member exchange: 以下、LMX)が、PLB と I-PM との正の関係を正の方向に調整 (moderate) すると考えられる。LMX は、リーダーとメンバーの関係の質を表す (Graen & Uhl-Bien, 1995)。また、(3)の PLB が T-PM に影響を与えると仮説を立てた理由として、①Zhang et al. (2015) は、PLB が仕事の結果に影響を与える経路として、チーム環境を構造化すると同時に自律的な仕事ができる雰囲気を作り出すことを指摘している。CFT のリーダーがこのような職場環境づくりを行う過程で、メンバーがパラドックスな状況を肯定的に受け止め、その状況に適応するような態度や言動が増えることが想定される。ついで、②そのような周囲のメンバーの態度や言動を見聞きすることで、自身が所属する CFT は、緊張状態を受け入れ、緊張によって活力を得ることができるチームであるという知覚に至ると考えられる。以上の議論より、本研究では図1の分析枠組みを設定した。

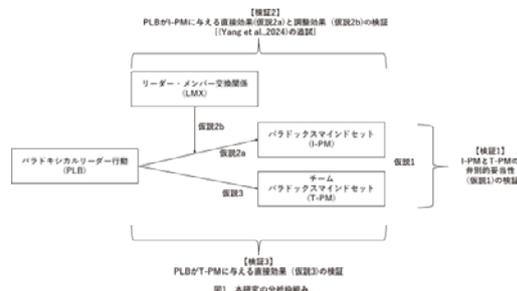


図1 本研究の分析枠組み

**【方法】** (1) 調査対象：民間企業のCFTに従事する正規従業員を対象とした質問紙調査を実施した。オンライン調査を利用し、以下の4条件を満たすサンプルを収集した。[条件1]職位が一般クラスから次長クラス[条件2]従業員総数が1,000名以上の製造業に所属[条件3]CFTに現在かかわっている、あるいはここ1年でかかわった経験があり、かつチームメンバー[条件4]社内の2部署以上からメンバーを招集し、かつチームメンバー数が4名以上。結果、303名の回答を得た。

(2) 測定尺度：**PLB** Zhang et al. (2015) によって開発された22項目の尺度を使用した。確認的二次因子分析をもとに5つの下位次元全体のスコアを平均値化し、PLBの単一尺度を設定した。 $(\alpha = .95)$  **I-PM/T-PM** I-PMの測定には、Miron-Spektor et al. (2018) によって開発された9項目を使用した。また、T-PMの測定には、上記I-PMの尺度を参考に筆者が、I-PM尺度の主語である「私は」を「私のチームは」とするなどの修正し作成した。**LMX** Jung & Takeuchi (2016) で使用したLMX-7 (Graen & Uhl-Bien, 1995) の7項目の日本語版尺度を使用した $(\alpha = .89)$ 。 **統制変数** メンバーの性別、年代、最終学歴、職位、勤続年数、所属部署に加え、CFTのメンバー数、会社規模、リーダーの性別及び年代を設定した。

**【結果と考察】** 最初に、I-PMとT-PMの弁別性を検証するために確認的因子分析を実施した結果、I-PMの9項目中、1項目の因子負荷量が低いことが判明した。そのため、I-PMの1項目及びT-PMの該当する項目の2項目を削除して再分析した。結果、想定された2因子モデルが1因子モデルよりも適合度が有意に高く、I-PMとT-PMの弁別性が確認された。I-PM、T-PMの信頼係数も良好であり、仮説1は支持された。次に、階層的重回帰分析の結果から、PLBはI-PMに正の影響を与えていたため、仮説2aは支持された。一方、LMXがPLBとI-PMの正の関係を正の方向に調整する効果は有意でなく、仮説2bは不支持であった。LMXの調整効果を確認したYang et al. (2023)の先行研究と異なる結果を示した背景には、長期的な信頼関係を必ずしも前提としないCFTのような時限的なリーダーとメンバーの関係性ではPLBがI-PMに与える直接効果が増幅しなかったと推察される。第2にPLBがT-PMに正の影響を与え、仮説3は支持された。この結果はPLBがリーダーとメンバーの2者間の関係性における個人のマインドセット醸成を超え、チーム全体でのマインドセット醸成・共有に効果がある可能性を示すものであり、既存のPLB研究に部分的ではあるが付加価値を提供できた。(しんぼ と もゆき・たけうち のりひこ)

# フロー体験が導く主観的キャリア成功

## —ポジティブ感情と外部参照型目標難易度の媒介メカニズム

○劉 徳嘯<sup>1)</sup> 竹内 規彦<sup>2)</sup>

(<sup>1)</sup>デル・テクノロジーズ株式会社 <sup>2)</sup>早稲田大学商学大学院)

キーワード：フロー体験、主観的キャリア成功、職務特性

**【研究目的】** キャリアは、個人にとって単なる職業の選択や働く手段にとどまらず、目標の達成、自己成長、価値観の醸成、さらには社会的な地位の構築など、幅広い機能を果たす重要な概念である(e.g., Greenhaus et al., 1995; Hommelhoff et al., Li et al., 2023; 2020)。

このような多面的な機能を持つキャリアの成功指標として、伝統的なキャリア研究で重視されてきた昇進回数や報酬水準などの客観的な指標では十分に捉えることができず、新たに「主観的キャリア成功」概念が提唱され注目を集めている(Ng & Feldman, 2014; Spurk et al., 2019)。

主観的キャリア成功は、個人が自身のキャリアに対して抱く満足感や幸福感であり、仕事上での成果や達成感、成就感といったポジティブな体験が積み重なった結果である(Greenhaus & Callanan, 2013)。その根底にはポジティブな心理状態との密接な繋がりと指摘されている (Judge et al. 1995)。このことは、主観的キャリア成功を導くための心理的なメカニズムの解明に「ポジティブ心理学」が応用できる可能性を示唆するものである。特に、ポジティブ心理学におけるフロー理論では、「フロー体験」(課題の挑戦度と個人のスキルレベルの最適な均衡状態で生じる「没入感」などの心理状態)が自己肯定感や心理的レジリエンスと正の相関を持つことが確認されており (Schmidt, 2003)、キャリアにおける内的な成功感の向上にも寄与することが推察される。

また、フロー体験は楽しさや充実感とも関連していることから (Asakawa, 2004)、その影響を評価する際にはポジティブ感情の働きにも注目する必要がある。一方で、ネガティブ感情 (たとえば、怒り・恐れ・嫌悪・悲しみなど)は、ポジティブ感情とは対極の位置づけで語られてきたが (Ekman, 1992)、キャリアの文脈においてもこれらがどのように影響を及ぼすかを明らかにすることは、主観的キャリア成功を包括的に理解するうえで意味のある試みであるといえる。

さらに、外発的な基準に基づく外部参照型の高難易度な目標が、個人による自己設定目標 (personal goals) に対して肯定的な影響を与えることが示されており (Lee & Bobko, 1992)、このことから、外発的動機づけが喚起されることで、キャリアにおける動機の活性化や意欲の向上に結びつく可能性があると考えられる。

その他、職務特性理論においては、業務内容や構造、業務の進行方法が従業員のモチベーションやパフォーマンス、満足感、健康などに与える影響が長年にわたり研究されてきた。特に、自律性の高い職務は、ストレスや不安、バーンアウトの軽減に寄与するとともに、職務満足感や組織へのコミット

メント、仕事への意欲向上に正の効果をもたらすことが知られている (Humphrey et al., 2007)。したがって、職務における自律性やフィードバックのあり方が、フロー体験の発生やその効果を調整する要因となる可能性がある。

以上の理論的背景を踏まえ、本研究では、現在就労中の日本人を対象に、フロー体験が主観的キャリア成功に及ぼす影響とその内的メカニズムを実証的に検討することを目的とする。図1は本研究で検証する仮説モデルである。

**【方法】** 調査対象は、日本国内に居住し就労している有職者である。企業に勤務する正規社員の他、今日多様化するキャリア形態を鑑み、派遣社員、契約社員、パート・アルバイト、個人事業主なども対象に含めた。調査は2024年10月に専門調査会社を通じてオンラインにて匿名性を確保し実施された。無作為抽出による機会サンプリングにより調査票が配信され、300名から有効回答を得た。

本研究の仮説の検証には以下の5つの尺度を用いた。フロー体験の頻度は **The Flow Questionnaire** (Asakawa, 2004) による7段階評価で測定した ( $\alpha=.73$ )。ポジティブ・ネガティブ感情は **Positive and Negative Affect Schedule** (Andrew et al., 1999) を使用し(それぞれ、 $\alpha=.77$ 、 $\alpha=.74$ )、7段階評価で測定した。外部参照型目標難易度は **Externally-referenced Goal Difficulty Perception** (Kwan et al., 2013) を使用し、5段階・4項目で測定した ( $\alpha=.90$ )。主観的キャリア成功は **Subjective Career Success Inventory** (Shockley & Rosh, 2015) を用い、5段階で測定した ( $\alpha=.96$ )。職務特性は意思決定の **Work Design Questionnaire** (Morgeson & Humphrey, 2006) に含まれる意思決定の自主性、作業方法の自律性、ジョブからのフィードバック、他者からのフィードバックの4下位尺度で測定した(それぞれ、 $\alpha=.89$ 、 $\alpha=.89$ 、 $\alpha=.88$ )。

**【結果と考察】** 本研究では、階層的重回帰分析を用いて各仮説の検証を行った。まず、フロー体験の頻度が主観的キャリア成功に正の影響を与えることが示され、仮説1が支持された。さらに、フロー体験はポジティブ感情および外部参照型目標難易度にも有意な正の影響を与え、仮説2aと仮説3が支持されたが、ネガティブ感情への影響を示す仮説2bは支持されなかった。続いて、ポジティブ感情が外部参照型目標難易度および主観的キャリア成功に影響する仮説4a、4bは支持された。一方、ネガティブ感情関連の仮説4c、4dは不支持となった。また、外部参照型目標難易度が主観的キャリア成功に与える影響も確認され、仮説5は支持された。さらに、職務特性による調整効果の分析では、意思決定の自主性が高い職務では、フロー体験の頻度と外部参照型目標難易度の関係が強まることが確認された。また、作業方法の自律性が高い場合には、ポジティブ感情および外部参照型目標難易度との正の関係が強まることがわかった。なお、他者からのフィードバックが高い職務では、ポジティブ感情との正の関係が強まることが示された。結論として、フロー体験が主観的キャリア成功に直接・間接的に肯定的な影響を与えることが明らかとなった。今後、従業員のキャリア成功感の維持・向上を説明する枠組みとしてフロー理論の更なる応用が期待される。(りゅう とくしょう・たけうち のりひこ)

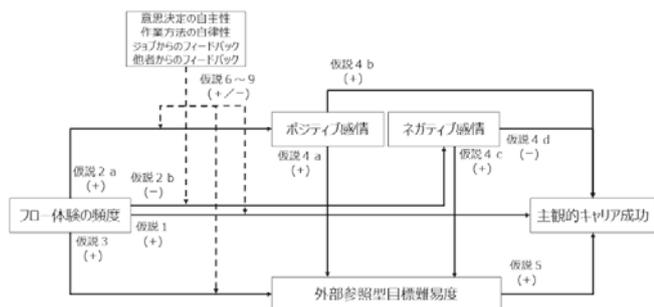


図1 本研究の分析枠組み

# 大学剣道男子部員の心理的特性と身体的特性の研究

○井上雄貴<sup>1</sup> 新里知佳野<sup>1</sup> 古澤伸晃<sup>1</sup> 百田尚史<sup>1</sup> 八木沢誠<sup>1</sup> 軽部幸浩<sup>2</sup> 藤田主一<sup>1</sup>

(<sup>1</sup> 日本体育大学, <sup>2</sup> 東京富士大学)

キーワード: 大学男子剣道 心理的特性 身体的特性

## 【目的】

これまでに我々は、本学会において大学剣道に関する理論的側面、競技的側面等について具体的・実践的研究を積み重ねてきた(新里他, 2023, 2024 等)。身体的側面について、例えば打突開始動作の違いによる選択反応時間・打突動作時間の研究が報告されている(椿他, 2009)。

そこで、本研究は、大学剣道男子部員の心理的特性と身体的特性について 2・3 年生と 1 年生で比較検討し、その結果に基づいて今後の剣道選手育成へ貢献することを目的として計画された。

## 【方法】

1. 対象者: 都内 A 大学剣道部男子部員 41 名(平均 19.8 歳)。このうち特別練習生(2・3 年生)は 22 名、非特別練習生(1 年生)は 19 名であった。

2. 指標: 心理的特性を測定するために YG 性格検査, TAIS (スポーツ特性-状態不安診断検査), DIPCA (心理的競技能力診断検査), 新版 STAI を使用した。身体的特性を測定するために次の指標を用いた (Table1)。

Table 1 測定指標

① 反応時間(光刺激, 全身反応; 踏み込み)	② 反応時間(光刺激, 部分反応; キー押し)
③ 反応時間(音刺激, 全身反応; 踏み込み)	④ 反応時間(音刺激, 部分反応; キー押し)
⑤ 動体視力(ランドルト環の判別)	⑥ タッピング(心地良さ・利き手 1 分間早押し・非利き手 1 分間早押し)

3. 手続き: 2025 (令和 7) 年 2 月 3 日, 2 月 4 日に、男子剣道部員に各種心理検査ならびに反応時間 (RT) の測定を実施した。RT は、全身反応測定器 IV 型 (竹井機器工業; T.K.K.1264p) を使用し、音 (1000Hz, 60dB) と光 (赤色) を要反応刺激とし、実験参加者にできるだけ早く反応させた。反応は全身反応 (踏み込み) と部分反応 (キー押し) であった。全身反応の測定時は、剣道着・袴, 剣道具 (胴・垂) を着用し、実際に竹刀を持たせ、より実戦を想定しておこなわせた。動体視力は、対象者から 5m 離れたコンピューターのモニター上に左から右にランドルト環 (視角 1°) を移動させ、切れ目を判断させた。タッピングは心地良い速度、利き手および非利き手で 1 分間にできるだけ早く打叩させた。

本研究は、A 大学倫理審査委員会の承認 (024-H006) を受け、男子部員に研究計画を説明し参加の同意を得て実施した。なお、本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

## 【結果と考察】

Table 2 は、光刺激の全身・部分反応時間、音刺激の全身・部分反応時間の標準得点の平均値と標準偏差、タッピング(心地良さ・利き手 1 分間早押し・非利き手 1 分間早押し) の打叩回数の平均値と標準偏差を示したものである。反応時間に関して 2・3 年生は、1 年生よりも反応時間が速かった。 $t$  検定をおこなったところ、全身反応 (踏み込み) に限り有意差は認められなかった。部分反応 (キー押し) に関しては、光・音刺

激ともに 2・3 年生は、1 年生よりも反応時間が有意に速かった。 $(t=-3.412, df=39, p<.01)$

タッピングに関して、心地良さ、利き手 1 分間早押し、非利き手 1 分間早押しの打叩回数を選手と非選手で比較したところ、心地よさに関しては、2・3 年生は 1 年生よりもゆつくりと打叩していたことが明らかとなった。また、利き手 1 分間早押しと非利き手 1 分間早押しの打叩回数を選手と非選手で比較したところ、2・3 年生は 1 年生よりも打叩回数が少ないことが明らかとなった。タッピングの打叩回数の結果について、2・3 年生と 1 年生の間で  $t$  検定をおこなったところ、利き手と非利き手の打叩回数に有意差は認められなかった。しかし、心地良い打叩回数に関しては、有意差が認められた。 $(t=-3.719, df=39, p<.01)$

Table 2 測定結果

	2・3 年生		1 年生	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
反応時間 (ms)				
全身反応 (光)	257.9	34.57	273.6	35.75
部分反応 (光)	183.0	16.93	202.0	18.83
全身反応 (音)	259.1	40.97	279.5	40.82
部分反応 (音)	174.3	16.84	203.0	24.96
タッピング (打叩数)				
心地良さ	97.7	36.30	143.5	41.14
利き手 1 分間	290.4	45.11	310.3	47.17
非利き手 1 分間	343.9	36.20	345.4	31.66

今回の発表に関しては、身体的特性に関して発表を行なうが、A 大学剣道部男子部員は、2・3 年生と 1 年生の全身反応時間の差は僅かであった。しかし、部分反応に関しては 2・3 年生が 1 年生よりも早く、有意差も認められたことから、2・3 年生の方が 1 年生よりも「追い込み」(短距離を連続で早く打ち込む) 稽古を多く行なっていたことが速かった原因だと考えられる。一方でタッピングに関しては、2・3 年生は 1 年生よりも 3 項目とも打叩回数が少なかったことは、2・3 年生の方が心理的余裕を意図して持つようにしていたことが考えられる。光刺激の全身・部分反応時間、音刺激の全身・部分反応時間は、2・3 年生の方が 1 年生よりも若干ではあるものの、その反応時間が速かったことが A 大学剣道部に入部後の身体的特性の変化に繋がっていたのではないかと考えられる。

## 【参考文献】

- 新里知佳野・古澤伸晃・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一 (2023). 大学剣道女子選手の心理的特性と身体的特性—特に反応時間について—. 日本応用心理学会第 89 回大会発表論文集, 70.
- 新里知佳野・古澤伸晃・井上雄貴・百田尚史・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一 (2024). 大学剣道女子選手の心理的特性と身体的特性の研究. 日本応用心理学会第 90 回大会発表論文集, 2.
- 椿武・下川美佳・前阪茂樹・前田明 (2009). 大学トップレベル剣道選手の全身選択反応時間, 移動時間, 動作時間の特徴. 武道学研究, 40(2), 35-41.
- (いのうえ ゆうき・しんざと ちかの・ふるさわ のぶあき・他)

# 大学剣道部員の心理的特性と身体的特性の研究

## — 男子部員と女子部員の比較 —

○新里知佳野<sup>1</sup> 古澤伸晃<sup>1</sup> 井上雄貴<sup>1</sup> 百田尚史<sup>1</sup> 八木沢誠<sup>1</sup> 軽部幸浩<sup>2</sup> 藤田主一<sup>1</sup>  
(<sup>1</sup>日本体育大学 <sup>2</sup>東京富士大学)

キーワード：大学剣道部員 身体的特性 心理的特性

### 【目的】

これまでに我々は、本学会において大学剣道に関する理論的側面、競技的側面等について具体的・実践的研究を積み重ねてきた(新里他, 2023, 2024 等)。身体的側面について、例えば打突開始動作の違いによる選択反応時間・打突動作時間の研究が報告されている(椿他, 2009)。そこで、本研究は、大学剣道部員の心理的特性と身体的特性について男子部員と女子部員で比較検討し、その結果に基づいて今後の剣道選手育成へ貢献することを目的として計画された。

### 【方法】

1. 対象者：都内 A 大学剣道部男子部員 41 名、女子部員 24 名で、当時の学年は 1~3 年生であった。

2. 指標：心理的特性を測定するために YG 性格検査、TAIS (スポーツ特性-状態不安診断検査)、DIPCA (心理的競技能力診断検査)、新版 STAI を使用した。身体的特性を測定するために次の指標を用いた (Table1)。

Table 1 測定指標

① 反応時間 (光刺激, 全身反応; 踏み込み)	② 反応時間 (光刺激, 部分反応; キー押し)
③ 反応時間 (音刺激, 全身反応; 踏み込み)	④ 反応時間 (音刺激, 部分反応; キー押し)
⑤ 動体視力 (ランドルト環の判別)	⑥ タッピング (心地良さ・利き手 1 分間早押し・非利き手 1 分間早押し)

3. 手続き：2025 (令和 7) 年 2 月 3 日・4 日に、剣道部員 (男女) に各種心理検査ならびに反応時間 (RT) の測定を実施した。RT は、全身反応測定器 IV 型 (竹井機器工業; T.K.K.1264p) を使用し、音 (1000Hz, 60dB) と光 (赤色) を要反応刺激とし、実験参加者にできるだけ早く反応させた。反応は全身反応 (踏み込み) と部分反応 (キー押し) であった。全身反応の測定時は、剣道着・袴、剣道具 (胴・垂) を着用し、実際に竹刀を持たせ、より実戦を想定しておこなわせた。動体視力は、対象者から 5m 離れたコンピューターの

Table 2 男女部員の測定結果

	①光刺激の 踏み込み	②光刺激の キー押し	③音刺激の 踏み込み	④音刺激の キー押し	⑤動体視力	⑥タッピングの 心地良さ	⑦タッピングの利き手 1分間早押し	⑧タッピングの非利き手 1分間早押し
男子	265.2 (35.58)	191.9 (20.06)	268.57 (41.68)	187.601 (25.27)	61.1 (36.61)	118.73 (45.5)	299.63 (47.71)	344.58 (34.59)
女子	241.2 (29.27)	182.4 (16.22)	244.42 (31.79)	181.905 (15.64)	52.1 (40.32)	109.333 (37.03)	283.625 (62.27)	346.66 (45.78)

①~④の単位は ms。⑤の単位は %。⑥~⑧の単位は打叩数。( ) 内は SD。

### 【参考文献】

新里知佳野・古澤伸晃・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一 (2023). 大学剣道女子選手の心理的特性と身体的特性 —特に反応時間について—. 日本応用心理学会第 89 回大会発表論文集, 70.  
新里知佳野・古澤伸晃・八木沢誠・井上雄貴・百田尚史・軽部幸浩・藤田主一 (2024). 大学剣道女子選手の心理的特性

モニター上に左から右にランドルト環 (視角 1') を移動させ、切れ目を判断させた。タッピングは心地良い速度、利き手および非利き手で 1 分間にできるだけ早く打叩させた。

本研究は、A 大学倫理審査委員会の承認 (024-H006) を受け、剣道部員 (男女) に研究計画を説明し参加の同意を得て実施した。なお、本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

### 【結果と考察】

Table2 の結果を  $t$  検定したところ以下の事実が判明した。

①男子部員と女子部員の「光刺激の踏み込み」を比較したところ、女子の反応時間が男子の反応時間より有意に速かった ( $t=2.795$ ,  $df=63$ ,  $p<.01$ )。

②男子部員と女子部員の「光刺激のキー押し」を比較したところ、女子の反応時間が男子の反応時間よりも速かったものの検定の結果有意ではなかった ( $t=1.955$ ,  $df=63$ ,  $ns$ )。

③男子部員と女子部員の「音刺激の踏み込み」を比較したところ、女子の反応時間が男子の反応時間より有意に速かった ( $t=2.448$ ,  $df=63$ ,  $p<.05$ )。

④男子部員と女子部員の「音刺激のキー押し」を比較したところ、部員間に有意差は認められなかった ( $t=0.996$ ,  $df=63$ ,  $ns$ )。

⑤男子部員と女子部員の「動体視力」を比較したところ、部員間に有意差は認められなかった。 ( $t=0.926$ ,  $df=63$ ,  $ns$ )。

⑥男子部員と女子部員の「タッピングの心地良さ」を比較したところ、部員間に有意差は認められなかった ( $t=0.858$ ,  $df=63$ ,  $ns$ )。

⑦男子部員と女子部員の「タッピングの利き手 1 分間早押し」を比較したところ、部員間に有意差は認められなかった。 ( $t=1.164$ ,  $df=63$ ,  $ns$ )。

⑧男子部員と女子部員の「タッピングの非利き手 1 分間早押し」を比較したところ、部員間に有意差は認められなかった ( $t=0.207$ ,  $df=63$ ,  $ns$ )。

と身体的特性の研究. 日本応用心理学会第 90 回大会発表論文集, 2.

椿武・下川美佳・前阪茂樹・前田明 (2009). 大学トップレベル剣道選手の全身選択反応時間、移動時間、動作時間の特徴. 武道学研究, 40(2), 35-41.  
(しんざと ちかの・ふるさわ のぶあき・いのうえ ゆうき他)

# 大学柔道競技者が捉える「柔道の魅力」とは何か（1）

## — 因子分析の検討 —

○岡崎祐史<sup>1</sup> 大藤潤也<sup>2</sup> 大関貴久<sup>3</sup> 森脇保彦<sup>4</sup> 軽部幸浩<sup>5</sup> 藤田主一<sup>6</sup>

(<sup>1</sup>武庫川女子大学 <sup>2</sup>至誠館大学 <sup>3</sup>東日本国際大学 <sup>4</sup>国士館大学 <sup>5</sup>東京富士大学 <sup>6</sup>日本体育大学)

キーワード：柔道の魅力、大学柔道競技者、因子分析

### 【目的】

全日本柔道連盟個人登録者数の推移（2004～2024）によると、わが国の柔道人口（男女計）は、2004年の202,025人が2024年には123,839人となり、約40%の減少である。この背景には、多数の要因が重なっていると考えられるが、特に昨今の少子化問題に加え、柔道競技におけるハラスメント問題や、予期せぬ怪我や事故などの安全性への懸念も相まっているのではないかと推察される。

柔道人口の減少がもたらす影響として、競技力低下などといった負の要素が懸念される。そこで、「柔道人口の拡大には魅力ある柔道が求められる」と考えた。

佐藤（2022）は、中学生を対象とした演武や形を行うプロジェクト型柔道授業を通して、日本の武道の形や柔道の魅力について思考し、魅力を見出したことが生徒の学びの実感となったことを示唆している。彼らは、授業を通して礼法やそれらの背景にある奥深さ、武道における他者の存在の大切さを柔道の魅力として捉えていた。これは、武道必修化に伴う授業形態の中で、柔道の技の習得ではなく、柔道を「文化」として捉え、魅力とを感じる様子が垣間見えるが、実際に競技者として柔道に携わっている者が感じる「柔道の魅力」についての報告は見当たらない。

本研究は、大学柔道競技者を対象とした「柔道の魅力」調査から、彼らが捉える「柔道の魅力」について検討することを目的とする。

### 【方法】

(1) 調査対象者：（事前調査）福島県、東京都、兵庫県、山口県の大学生308名。（本調査）A大学柔道部員66名、B大学同8名、C大学同20名、D大学同15名、記載不明大学同35名の計143名（1年生～4年生の男女合計）。

(2) 調査期間：2024年8月18日～2025年4月14日。

(3) 事前調査：調査の目的や内容を十分に説明し承諾が得られた者に対し、Kuhn（1954）によるTwenty Statements Test（TST）を利用した調査用紙（「武道の魅力は…」という刺激語を20個）を与えて自由記述させた。

(4) 本調査：事前調査で得られた1,370個の自由記述を客観的に集約し、138項目の質問紙を作成した。

(5) 手続き：①本調査対象者に、本調査の質問紙138項目を4件法（「非常にそう思う」「そう思う」「そう思わない」「まったくそう思わない」）で回答させた。

(6) 本研究は、至誠館大学研究倫理委員会の承認（R7-6）を受けて実施した。なお、本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

### 【結果と考察】

調査結果を因子分析（プロマックス回転）したところ、柔道に対するイメージは3因子で構成されていたことが明らかになった（Table.1）。因子Iは、28項目（ $\alpha=0.974$ ）から構成され「柔道の精神」と命名し、柔道の哲学や価値観、自己修養に関する側面が強く反映された因子であると解釈できる。因子IIは28項目（ $\alpha=0.972$ ）から構成され「体躯」と名付け、柔道が持つ運動的特性やフィジカルな鍛錬に対する認識を反映しているものと示唆された。因子IIIは、10項目（ $\alpha=0.933$ ）から構成され「礼儀」と命名し、柔道における礼に始まり礼に終わるといふ理念を反映しており、柔道の文化的・道徳的

側面に対する肯定的な認識が存在していることが示された。

以上の結果より、大学柔道競技者が捉える柔道の魅力は、精神性・身体性・道徳性といった多面的な要素で構成されていることが明らかとなった。

Table.1 因子分析の結果

質問項目	Factor1	Factor2	Factor3
礼に始まり礼に終わることで相手を敬う心を育むからである。	<b>0.94074</b>	0.0085	-0.2956
相手への敬意である。	<b>0.89183</b>	-0.07851	-0.07496
精神の鍛錬である。	<b>0.83798</b>	0.07905	-0.16031
礼に始まり礼に終わることである。	<b>0.8296</b>	-0.09412	-0.03357
自己共栄の精神を感じたときである。	<b>0.79026</b>	0.07294	0.02037
相手への尊敬と感謝である。	<b>0.78831</b>	-0.05765	0.09488
精神力の向上である。	<b>0.78791</b>	-0.00247	0.10903
礼に始まり礼に終わる精神である。	<b>0.768</b>	-0.12044	0.15827
嘉納治五郎の教えにある。	<b>0.7643</b>	-0.01296	-0.10509
「柔よく剛を制す」の体現である。	<b>0.75253</b>	0.04973	0.07505
団体戦のときの団結力である。	<b>0.75216</b>	0.14634	-0.01615
自己共栄の精神にある。	<b>0.72352</b>	-0.07003	0.23075
体が小さくても大きな人に勝つたことである。	<b>0.71635</b>	0.04157	0.04227
挨拶や礼儀作法を学び日常生活でも活かせるからである。	<b>0.71564</b>	-0.11375	0.28053
相手を敬う心である。	<b>0.71546</b>	-0.10216	0.22512
世代を超えたつながりである。	<b>0.71126</b>	0.06668	0.11849
礼儀作法の美しさである。	<b>0.69279</b>	-0.00351	0.24089
集中力と心の鍛錬である。	<b>0.68079</b>	0.13494	0.05144
体格に関わらず活躍できることである。	<b>0.65085</b>	0.02992	0.1
相手を尊敬することができることである。	<b>0.64747</b>	-0.08023	0.19749
目標達成の喜びである。	<b>0.64389</b>	0.1767	0.05347
自己共栄の精神を培った姿勢である。	<b>0.64219</b>	-0.17358	0.22436
一本が決まったときである。	<b>0.62211</b>	0.08247	0.06842
美しい礼の姿勢である。	<b>0.61669</b>	0.0789	0.2185
精力善用・自己共栄の精神である。	<b>0.61074</b>	-0.11873	0.3804
助け合いと支え合いである。	<b>0.60731</b>	0.25597	0.11601
チームの団結力である。	<b>0.58673</b>	0.15395	0.14609
日本の伝統文化への理解を深めることができることである。	<b>0.56222</b>	0.15449	0.12283
体幹の強さである。	-0.05722	<b>0.86978</b>	0.06393
全身の筋力をバランスよく鍛えられることである。	-0.03577	<b>0.83586</b>	0.08098
全身を使う運動で体力が向上することである。	0.17796	<b>0.81595</b>	-0.22722
体つきが変わることである。	-0.11108	<b>0.81593</b>	-0.09933
柔軟性の向上である。	0.03743	<b>0.80584</b>	0.01685
長い時間戦える持久力である。	0.15082	<b>0.79875</b>	-0.28572
全身をバランスよく鍛えられることである。	0.23053	<b>0.78882</b>	-0.19191
筋持久力の向上である。	-0.04645	<b>0.78396</b>	-0.00274
全身を鍛えることである。	-0.04963	<b>0.78106</b>	0.15114
基礎体力の向上である。	0.22655	<b>0.77423</b>	-0.09699
全身の筋力をバランスよく鍛えることである。	-0.15919	<b>0.76275</b>	0.16041
筋肉量の増加である。	-0.15032	<b>0.75893</b>	-0.17509
怪我を乗り越える強さである。	0.05391	<b>0.75774</b>	-0.20699
健康的な身体づくりにつながることである。	0.0933	<b>0.75679</b>	0.10207
全身の筋力強化である。	-0.02035	<b>0.75059</b>	0.17211
引き手の強さである。	-0.00515	<b>0.74865</b>	0.04185
体力が向上することで怪我のリスクも減少することである。	-0.17082	<b>0.74846</b>	0.16788
全身をバランスよく鍛えた体である。	-0.01031	<b>0.70508</b>	0.1289
受身を通じた衝撃耐性である。	-0.13126	<b>0.70323</b>	0.255
基礎体力がつくことである。	0.11136	<b>0.70278</b>	-0.11736
男女で団体戦に参加できることである。	-0.06042	<b>0.69312</b>	0.02235
持久力の向上である。	0.25386	<b>0.68153</b>	-0.18281
自分の体が技を施すのに最も良い位置と姿勢をとることである。	0.03955	<b>0.6698</b>	0.21934
強靱な体力を得ることである。	0.02608	<b>0.66974</b>	0.27229
筋肉質になることである。	0.07907	<b>0.66925</b>	-0.04391
対人感覚である。	-0.03015	<b>0.61684</b>	0.354
身体に対する自信である。	-0.06011	<b>0.59521</b>	0.25916
背負い投である。	0.23484	<b>0.59121</b>	-0.23054
相手に敬意を表すことができることである。	0.24032	-0.03003	<b>0.67313</b>
礼儀の作法である。	0.20536	-0.02229	<b>0.67258</b>
礼儀作法が身につくことである。	0.32688	-0.04704	<b>0.66095</b>
精神力が身につくことである。	0.29816	0.04791	<b>0.64165</b>
礼（座礼・立礼）をする姿である。	0.20984	0.13957	<b>0.61986</b>
仲間と切磋琢磨できることである。	0.17651	0.17838	<b>0.61179</b>
体の小さい者が体の大きい者を投げる姿である。	0.25587	0.16238	<b>0.56852</b>
精神的成長である。	0.25739	0.16804	<b>0.54595</b>
チームメイトができることである。	0.14239	0.16029	<b>0.52322</b>
国際的な文化交流のツールである。	0.13509	0.24447	<b>0.52018</b>

### 【引用文献】

公益財団法人全日本柔道連盟「全日本柔道連盟個人登録者数推移2004年～2024年（男女計）」  
 Kuhn, M. H. and McPartland, T. S. (1954). An Empirical Investigation of Self-Attitudes. American Sociological Review, 19(1), 68-76.  
 佐藤吉高（2022）. 生徒が主体的に考え表現する学びの創造～プロジェクト型学習で展開する柔道単元～ お茶の水女子大学附属中学校研究紀要. 51, 223-238.  
 （おかざきゆうじ、おおふじじゅんや、おおぎきたかひさ、他）

# 大学柔道競技者が捉える「柔道の魅力」とは何か（2）

## — 男女間における魅力の差について —

○大藤潤也<sup>1</sup> 岡崎祐史<sup>2</sup> 大関貴久<sup>3</sup> 森脇保彦<sup>4</sup> 軽部幸浩<sup>5</sup> 藤田主一<sup>6</sup>  
(<sup>1</sup>至誠館大学 <sup>2</sup>武庫川女子大学 <sup>3</sup>東日本国際大学 <sup>4</sup>国士館大学 <sup>5</sup>東京富士大学 <sup>6</sup>日本体育大学)

キーワード：柔道の魅力、大学柔道競技者、男女の比較

### 【目的】

全日本柔道連盟個人登録者数の推移（2004～2024）によると、わが国の柔道人口（男女計）は、2004年の202,025人が2024年には123,839人となり、約40%の減少である。この背景には、多数の要因が重なっていると考えられるが、特に昨今の少子化問題に加え、柔道競技におけるハラスメント問題や、予期せぬ怪我や事故などの安全性への懸念も相まっているのではないかと推察される。

柔道人口の減少がもたらす影響として、競技力低下などといった負の要素が懸念される。そこで、「柔道人口の拡大には魅力ある柔道が求められる」と考えた。

佐藤（2022）は、中学生を対象とした演武や形を行うプロジェクト型柔道授業を通して、日本の武道の形や柔道の魅力について思考し、魅力を見出したことが生徒の学びの実感となったことを示唆している。彼らは、授業を通して礼法やそれらの背景にある奥深さ、武道における他者の存在の大切さを柔道の魅力として捉えていた。これは、武道必修化に伴う授業形態の中で、柔道の技の習得ではなく、柔道を「文化」として捉え、魅力とを感じる様子が垣間見えるが、実際に競技者として柔道に携わっている者が感じる「柔道の魅力」についての報告は見当たらない。

本研究は、大学柔道競技者を対象とした「柔道の魅力」調査から、彼らが捉える「柔道の魅力」について検討し、男女間における魅力の比較を検討し、知見を得ることとした。

### 【方法】

(1) 調査対象者：（事前調査）福島県、東京都、兵庫県、山口県の大学生308名。（本調査）A大学柔道部員66名、B大学同8名、C大学同20名、D大学同15名、記載不明大学同35名の計143名（1年生～4年生の男女合計）。

(2) 調査期間：2024年8月18日～2025年4月14日。

(3) 事前調査：調査の目的や内容を十分に説明し承諾が得られた者に対し、Kuhn (1954) による Twenty Statements Test (TST) を利用した調査用紙（「武道の魅力は…」という刺激語を20個）を与えて自由記述させた。

(4) 本調査：事前調査で得られた1370個の自由記述を客観的に集約し、138項目の質問紙を作成した。

(5) 手続き：①本調査対象者に、本調査の質問紙138項目を4件法（「非常にそう思う」「そう思う」「そう思わない」「まったくそう思わない」）で回答させた。

(6) 本研究は、至誠館大学研究倫理委員会の承認（R7-6）を受けて実施した。なお、本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

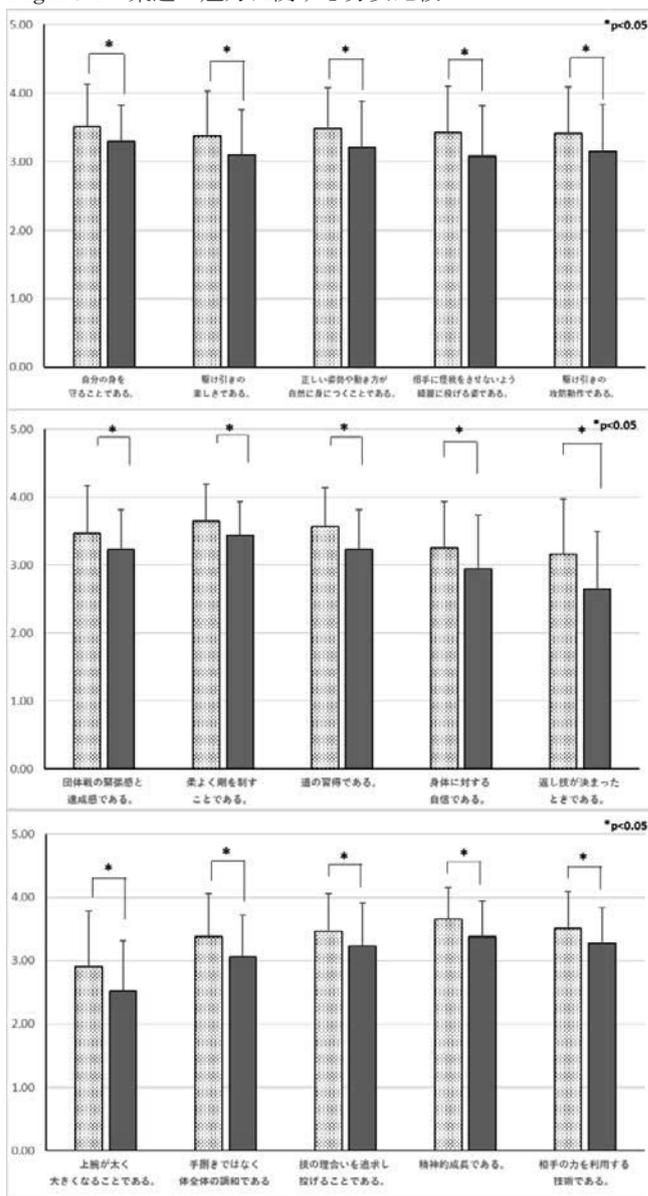
(7) 得られたデータは、IBM SPSS Statistics を用いて分析を行い、群間の平均値の差の検定には独立サンプル *t* 検定を用いることとした。

### 【結果と考察】

本研究では、柔道の魅力に関する138項目について男女間の認識差を検討した。その結果、138項目中15項目において独立サンプル *t* 検定により有意差 ( $p < 0.05$ ) が認められ、いずれも男子学生の平均値が、女子学生の平均を上回る結果となった (Figure 1)。これらの結果は、柔道の魅力に対する男女の評価に部分的な差異が生じていると推察される。また、女子学生の評価も全体として高水準にあり、柔道が男女問わず一定の魅力を持つ競技であることが垣間見えた。

今後は、性別のみならず、経験年数や競技レベルといった他の変数も加味し、柔道における魅力の多面的理解を深めていくことが求められるのではないかと考えられる。

Figure 1 柔道の魅力に関する男女比較



### 【引用文献】

公益財団法人全日本柔道連盟「全日本柔道連盟個人登録者数推移 2004年～2024年（男女計）」

Kuhn, M. H. and McPartland, T. S. (1954). An Empirical Investigation of Self-Attitudes. *American Sociological Review*, 19(1), 68-76.

佐藤吉高 (2022). 生徒が主体的に考え表現する学びの創造～プロジェクト型学習で展開する柔道単元～. *お茶の水女子大学附属中学校研究紀要*. 51, 223-238.

(おおふじじゅんや、おかざきゆうじ、おおぜきたかひさ他)

# 大学柔道競技者が捉える「柔道の魅力」とは何か（3）

## — 共起ネットワークによる分析 —

○大関貴久<sup>1</sup> 岡崎祐史<sup>2</sup> 大藤潤也<sup>3</sup> 森脇保彦<sup>4</sup> 軽部幸浩<sup>5</sup> 藤田主一<sup>6</sup>  
(<sup>1</sup>東日本国際大学 <sup>2</sup>武庫川女子大学 <sup>3</sup>至誠館大学 <sup>4</sup>国士館大学 <sup>5</sup>東京富士大学 <sup>6</sup>日本体育大学)

キーワード：大学柔道競技者、柔道の魅力、共起ネットワーク

### 【目的】

全日本柔道連盟個人登録者数の推移（2004～2024）によると、わが国の柔道人口（男女計）は、2004年の202,025人が2024年には123,839人となり、約40%の減少である。この背景には、多数の要因が重なっていると考えられるが、特に昨今の少子化問題に加え、柔道競技におけるハラスメント問題や、予期せぬ怪我や事故などの安全性への懸念も相まっているのではないかと推察される。

柔道人口の減少がもたらす影響として、競技力低下などといった負の要素が懸念される。そこで、「柔道人口の拡大には魅力ある柔道が求められる」と考えた。

佐藤（2022）は、中学生を対象とした演武や形を行うプロジェクト型柔道授業を通して、日本の武道の形や柔道の魅力について思考し、魅力を見出したことが生徒の学びの実感となったことを示唆している。彼らは、授業を通して礼法やそれらの背景にある奥深さ、武道における他者の存在の大切さを柔道の魅力として捉えていた。これは、武道必修化に伴う授業形態の中で、柔道の技の習得ではなく、柔道を「文化」として捉え、魅力とを感じる様子が垣間見えるが、実際に競技者として柔道に携わっている者が感じる「柔道の魅力」についての報告は見当たらない。

本研究は、大学柔道競技者を対象とした「柔道の魅力」調査から、彼らが捉える「柔道の魅力」について検討することを目的とする。

### 【方法】

(1) 調査対象者：（事前調査）福島県、東京都、兵庫県、山口県の大学生308名。（本調査）A大学柔道部員66名、B大学同8名、C大学同20名、D大学同15名、記載不明大学同35名の計143名（1年生～4年生の男女合計）。

(2) 調査期間：2024年8月18日～2025年4月14日。

(3) 事前調査：調査の目的や内容を十分に説明し承諾が得られた者に対し、Kuhn（1954）によるTwenty Statements Test（TST）を利用した調査用紙（「武道の魅力は…」という刺激語を20個）を与えて自由記述させた。

(4) 本調査：事前調査で得られた1,370個の自由記述を客観的に集約し、138項目の質問紙を作成した。

(5) 手続き：①本調査対象者に、本調査の質問紙138項目を4件法（「非常にそう思う」「そう思う」「そう思わない」「まったくそう思わない」）で回答させた。

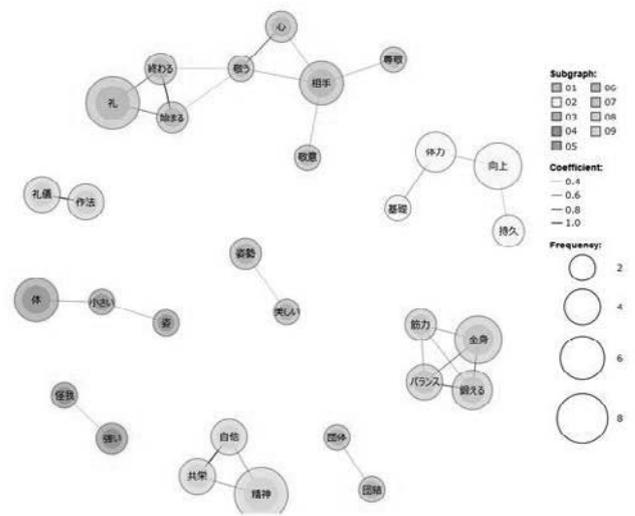
(6) 本研究は、至誠館大学研究倫理委員会の承認（R7-6）を受けて実施した。なお、本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

### 【結果と考察】

回答されたデータを基に、因子分析を行ったところ66個の質問が抽出された。その抽出された質問項目に着目し、さらに共起ネットワーク分析を行った。共起ネットワーク分析の結果、9個のサブグラフが抽出された（Figure 1）。1つ目

は「礼」「終わる」「始まる」「相手」「敬う」「心」「敬意」「尊敬」であった。2つ目は「向上」「体力」「持久」「基礎」であった。3つ目は「姿勢」「美しい」であった。4つ目は「強い」「怪我」であった。5つ目は「体」「小さい」「姿」であった。6つ目は「団体」「団結」であった。7つ目は「全身」「鍛える」「バランス」「筋力」であった。8つ目は「精神」「自他」「共栄」であった。9つ目は「礼儀」「作法」であった。

Figure 1 共起ネットワーク



これらの結果から、回答者たちは、柔道の魅力は「礼に始まり、礼に終わる」「相手を敬う心」「自他共栄の精神」という嘉納治五郎の教えに加えて、「礼儀作法」「体力向上」「全身の筋力をバランスよく鍛える」という日本古来の武道としての教えとスポーツとしての柔道というイメージを持っていることが明らかとなった。このことは、「柔道原理（自然体の理・柔の理・崩しの理）に基づいた攻防において、調和した体の使い方・動きを重視し体を護る日本古来の武道から、体力・筋力など強さが優先されるスポーツのイメージが顕著になったと考えられる。

### 【引用文献】

公益財団法人全日本柔道連盟「全日本柔道連盟個人登録者数推移2004年～2024年（男女計）」

Kuhn, M. H. and McPartland, T. S. (1954). An Empirical Investigation of Self-Attitudes. *American Sociological Review*, 19(1), 68-76.

佐藤吉高（2022）. 生徒が主体的に考え表現する学びの創造～プロジェクト型学習で展開する柔道単元～. *お茶の水女子大学附属中学校研究紀要*, 51, 223-238.

（おおぜきたかひさ, おかざきゆうじ, おおふじじゅんや他）

# 大学生における剣道の寒稽古が心理的能力に及ぼす可能性

○百田尚史<sup>1</sup> 古澤伸晃<sup>1</sup> 新里知佳野<sup>1</sup> 井上雄貴<sup>1</sup> 八木沢誠<sup>1</sup> 軽部幸浩<sup>2</sup> 藤田圭一<sup>1</sup>

(<sup>1</sup>日本体育大学 <sup>2</sup>東京富士大学)

キーワード：大学生、剣道、寒稽古

## 【目的】

剣道は武道としての精神を受け継いでおり、寒稽古や暑中稽古といった環境条件が厳しい時に行う伝統的な修練方法があり、今でも多くの場で実践されている。

このような伝統的な修練方法について、星川・恵土(1987)は冬期の早朝という過酷な条件で実施され、厳しい練習と寒さ、生活リズムの変化を克服し、精神面の向上を狙う武道独特の稽古法であると述べている。また小森(2020)は、寒気の厳しい時季に、一定期間継続して激しい稽古を行い、精神的鍛錬をかねて技能の向上をはかること、最も暑さが厳しい時季に一定期間継続して激しい稽古を行い、精神的鍛錬をかねて技能の向上をはかることであると述べている。

そこで、本研究では剣道の心理的側面を研究する一環として剣道の寒稽古に着目し、寒稽古期間中の初日・中日・最終日における心理的变化を明らかにし、これらの知見をもとに今後の剣道選手育成へ貢献することを目的とする。

## 【方法】

1. **対象者**：日本体育大学剣道部員男子46名(3年生・17名、2年生・12名、1年生・17名)、女子18名(3年生・4名、2年生・6名、1年生・8名)合計64名であった。

2. **方法**：事前事後アンケート、YG性格検査、VAS検査、剣道日誌を使用した。

3. **手続き**：調査は2025(令和7)年1月20日～29日の寒稽古期間に行い、1月18日に事前アンケート、1月29日に事後アンケート、寒稽古後にYG性格検査と剣道日誌を実施した。事前アンケートでは、[質問1]あなたは、今回の寒稽古に参加する目標(ゴール)は何ですか？[質問2]あなたの寒稽古に対する抱負(期待)は何ですか？[質問3]あなたは、今回の寒稽古をとおして、どんな自分になりたいですか？という3質問を用いた。事後アンケートでは[質問1]今回の寒稽古の目標(ゴール)は達成できましたか？[質問2]寒稽古に対する抱負(期待)は実現できましたか？[質問3]今回の寒稽古で、なりたいた自分になりましたか？という3質問を用いた。以上の質問項目への回答をKHCoderを用いてテキストマイニングし、共起ネットワークを作成した。

本研究は、日本体育大学倫理審査委員会に「人を対象とする研究倫理審査申請・研究計画書」を提出し、審査の結果、承認された(承認番号024-H156)。なお、本研究の利益相反はない。

## 【結果と考察】

ここでは男子事前事後質問1の内容について述べる。Fig.1事前質問(質問1)では、6つのサブグラフが抽出された。1つ目は、精神・技術・体力を総合的に高める姿から『心身の強化』と命名した。2つ目は、厳しい環境下における鍛錬意識が強く『自己鍛錬を目指す取り組み』と命名した。3つ目は、自身の弱さを乗り越える姿勢が強く『心・技・体の向上』と命名した。4つ目は、精神・技術・人間関係を重視した姿勢から『自己成長』と命名した。5つ目は、自身の弱さと向き合う姿勢が強く『心身の成長と課題克服』と命名した。6つ目は、基本動作や体力向上の目的が強く『個人の成長と目標』と命名した。

Fig.2事後質問(質問1)では、5つのサブグラフが抽出された。1つ目は、剣道面・生活面の成長から『心身の鍛錬と

自己成長』と命名した。2つ目は、精神・体力の強化や生活リズムの改善から『精神・体力強化と目標達成』と命名した。3つ目は、精神・技術・生活の課題と継続的な取り組みから『課題意識と継続による成長』と命名した。4つ目は、真摯な技術の習得と精神の鍛錬から『意識的な努力による技術・精神の成長』と命名した。5つ目は、継続力・礼節・主体性の向上から『精神・体力の成長と自己改善』と命名した。

以上、事前調査では「強くなりたい」などの目標志向が中心であったが、事後調査では「課題意識と継続による成長」など、具体的な行動の継続と成果を伴う成長が示された。また、事前調査では抽象的な目標が主であったが、事後調査では「途中で妥協した」「気持ちの弱さに負けなかった」など、自己理解と内省が深まり、現実的な課題と向き合う態度が養われた。次に、社会的な視点において事前調査では、個人の成長が主軸であったが、事後調査では「先輩・先生との関わり」「礼節」など、他者との関係性を重視する視点が強くなったと考えられる。さらに、「休まず参加」「生活リズムが整った」など、生活習慣の改善や実行力の向上が見られ、行動の具体化と習慣化が促進されたと考えられる。以上のように、寒稽古によって精神的、身体的成長・自己理解の深化・社会性の育成・行動の変容の4つが心理的变化として明らかとなった。今後は女子との比較、心理的变化が中長期的にどのような影響を与えるかについて調査をしていきたい。

Fig.1 事前質問(質問1)

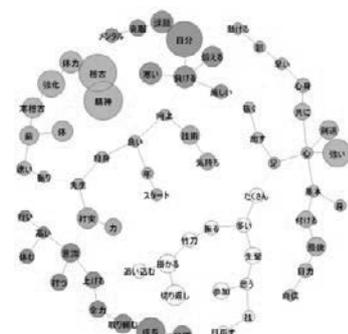


Fig.2 事後質問(質問1)



## 【参考文献】

- 星川保・恵土孝吉(1987). 剣道のトレーニング. 大修館書店. 124-125.  
小森富士登(2020). 剣道の指導法. 國士館大學武徳紀要, 36, 13-19.  
(ももた なおひと・ふるさわ のぶあき・しんざと ちかの他)

# 大学生の武道に対するイメージの研究 (1)

## — 初発反応の内容について —

○井上航人<sup>1</sup> 軽部幸浩<sup>1</sup> 藤田主一<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>東京富士大学,<sup>2</sup>日本体育大学)

キーワード: 武道イメージ 礼儀 大学生

### 【目的】

2014 (平成 26) 年、日本武道協議会によって制定された武道の定義では、「武道は、武士道の伝統に由来する日本で体系化された武技の修練による心技一如の運動文化で、心技体を一体として鍛え、人格を磨き、道徳心を高め、礼節を尊重する態度を養う、人間形成の道であり、柔道、剣道、弓道、相撲、空手道、合気道、少林寺拳法、なぎなた、銃剣道の総称を言う。」となっている。つまり、「武道」は柔道をはじめとする 9 種類の武技を総称するものであるが、「武道のイメージ」を研究する場合は、特定の武技を目的にすることが多い。たとえば、柔道 (石川他、2011)、剣道 (国吉他、2023) などがその例である。

我われは、特定の武技のイメージではなく、広く武道のイメージを明らかにするため、大学生を対象に調査した (井上他、2024)。その結果、大学生は武道を「日本の伝統・文化」と考えており、また「自分や人を守る力が身に付く」「心や体を鍛えることができる」「礼儀が学べる」と考えていることが推察できた。

今回の研究の目的は、TST (Twenty Statements Test) を利用し「武道は…」という刺激後に対する反応のうち、学生が最初に何をイメージするのかを分析し、そこから得られた知見を基にして、武道発展の一助としたい。

### 【方法】

1. 対象者:A 大学の学生 104 名 (男性 58 名、女性 46 名)。
2. 調査材料:Kuhn (1954) が開発した Twenty Statements Test (TST) を利用し、「武道は…」という刺激語を与えた。
3. 手続き:調査は、2024 年 5 月 9 日 ~ 5 月 17 日の間に実施した。対象者に目的や内容を説明した後、承諾を得たうえで無記名にて実施し回収した。
4. 分析方法:学生から得た 104 行の初発の回答を基にテキストマイニングソフト (KH Coder 3.02c official-package) を使用し、描画する共起関係の選択は、Jaccard 係数を基にして上位 60 を指定し行った。

本研究は、A 大学研究倫理委員会の承認 (2024-1) を受け、大学生に研究計画を説明し、参加の同意を得て実施した。

### 【結果】

クラスター分析では、学生から得た 104 行の初発の回答を非階層クラスターリングにより 5 つに分類した。出現頻度の多い単語は多い順に「礼儀」「日本」「スポーツ」「強い」「自分」「正しい」「心」であった。また、共起ネットワークによる分析の結果、一番出現頻度の多い単語は「礼儀」であり、関連するフレーズとして「正しい」「学ぶ」「作法」が挙げられる。次に出現頻度の多い単語は「日本」であり、関連するフレーズとして「スポーツ」「伝統」「文化」「続く」が挙げられる。それ以外では、「自分」とそれに関連する「守る」といったフ

レーズも出現した。

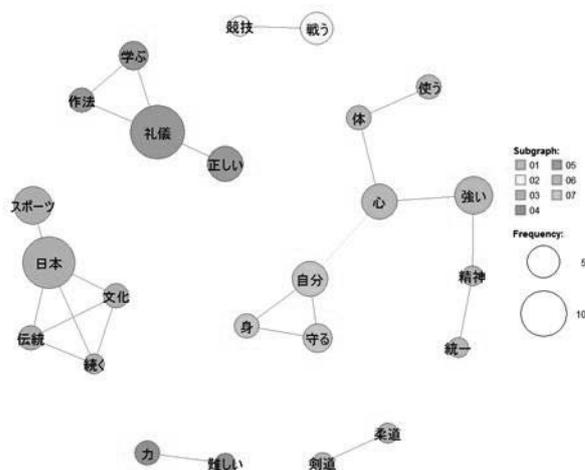


図 1.初発反応の共起ネットワーク

### 【考察】

分析結果から、大学生の多くが「武道は…」に対し最初にイメージするワードが「礼儀」であることが明らかになった。これは武道が礼法を特に重要視しており、中学高校における武道教育で礼儀に関する教育がなされていることが要因であると推察できる。また、「日本のスポーツ」「日本の伝統・文化」というワードを最初にイメージする学生が多いことも明らかになった。

井上他 (2024) の研究で得た 1,070 行の分析結果では、一番出現頻度の多かったワードは「スポーツ」であり、「人」「競技」といったワードも多く出現していた。これらの単語は初発反応では出現頻度が少なく、「武道」に対する初発反応とそれ以降にイメージするワードに違いがあることも明らかになった。

今回の研究では「武道は…」の刺激後に対する大学生の意識調査・初発反応を分析したが、今後はこれを「柔道は…」や「空手は…」という他の種目を刺激語に置き替えることで、各種目に対するイメージの比較を行っていきたい。

本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

### 【引用文献】

- 井上航人・軽部幸浩・藤田主一 (2024) .武道のイメージに関する研究 — 大学生は武道をどのようにとらえているのか — 日本応用心理学会第 90 回大会発表論文集, 4.
- 石川美久・遠藤知里・小田梓・坂本道人・鍋山隆弘・小俣幸嗣 (2011) .共通体育柔道における大学生の武道に対するイメージ変化 大学体育研究 33, 11-20, 2011.
- 国吉恵一・藤原靖浩 (2023) .大学生の武道に関するイメージに関する一考察 — 「剣道」の授業における学生のレポートから — 京都産業大学教職研究紀要 18, 15-25, 2023.
- (いのうえ こうと・かるべ ゆきひろ・ふじた しゅいち)

# 大学生の武道に対するイメージの研究 (2)

## — 最も強いイメージについて —

○軽部 幸浩<sup>1</sup> 井上 航人<sup>1</sup> 藤田 圭一<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>東京富士大学, <sup>2</sup>日本体育大学)

キーワード：武道イメージ, 大学生, 共起ネットワーク

### 【目的】

2014 (平成 26) 年, 日本武道協議会によって制定された武道の定義では, 「武道は, 武士道の伝統に由来する日本で体系化された武技の修練による心技一如の運動文化で, 心技体を一体として鍛え, 人格を磨き, 道徳心を高め, 礼節を尊重する態度を養う, 人間形成の道であり, 柔道, 剣道, 弓道, 相撲, 空手道, 合気道, 少林寺拳法, なぎなた, 銃剣道の総称を言う。」となっている。

つまり, 「武道」は柔道をはじめとする 9 種類の武技を総称するものであるが, 「武道のイメージ」を研究する場合は, 特定の武技を目的にすることが多い。たとえば, 柔道 (石川他, 2011), 剣道 (国吉他, 2023) などがある。我われは, 特定の武技のイメージではなく, 広く武道のイメージを明らかにするため, 大学生を対象に調査した (井上他, 2024)。その結果, 大学生は武道を「日本の伝統・文化」と考えており, また「自分や人を守る力が身に付く」「心や体を鍛えることができる」「礼儀が学べる」と考えていることが推察できた。

今回の研究の目的は, TST (Twenty Statements Test) を利用し「武道は…」という刺激後に対する反応のうち, 最も重要と考える反応文を検討することで, 「武道」が包含している本質を知るために学生への意識調査を行い, そこから得られた知見を基にして, 武道発展の一助としたい。

### 【方法】

1. 対象者: A 大学の学生 104 名 (男性 58 名, 女性 46 名)。
2. 調査材料: TST 利用し「武道は…」という刺激語を与えた。
3. 手続き: 調査は, 2024 年 5 月 9 日 ~ 5 月 17 日の間に実施した。対象者に目的や内容を説明した後, 承諾を得たうえで無記名にて実施し回収した。
4. 分析方法: 学生から得た最も強いイメージの 86 行の回答を基にテキストマイニングソフト (KH Coder 3.02c official-package) を使用し, 描画する共起関係の選択は, Jaccard 係数を基にして上位 60 を指定し行った。

本研究は, A 大学研究倫理委員会の承認 (2024-1) を受け, 大学生に研究計画を説明し, 参加の同意を得て実施した。

### 【結果】

クラスター分析では, 学生から得た 86 行の回答を非階層クラスターリングにより 6 つに分類した。出現頻度の多い単語は「日本」「礼儀」「スポーツ」「身」「守」であった。また, 共起ネットワークによる分析の結果, 一番出現頻度の多い単語は「日本」であり, 関連するフレーズとして「文化」「伝統」であった。次に出現頻度の多い単語は「礼儀」であり, 関連

するフレーズとして「正しい」や「学ぶ」「忍耐」が挙げられる。それ以外では, 「守る」とそれに関連する「身」「自分」といったフレーズが多く出現した。

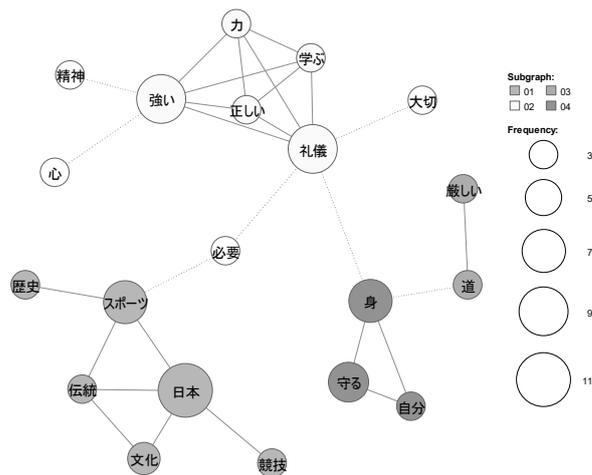


図 1. 武道の最も強いイメージの共起ネットワーク

### 【考察】

分析結果から, 大学生の多くは武道を漠然とはあるが, スポーツと考えており, 例えば「日本のスポーツ」「伝統のスポーツ」「忍耐のスポーツ」などと回答していた。武道を「日本の伝統・文化」と考えており, 「自分の身を守る」「礼儀正しい」「礼儀を学ぶ」と考えていることが推察できる。また武道を「道」と捉えていることで「厳しい」というイメージもあった。

今回の研究では「武道は…」という刺激語を与えた 20 答法による意識調査を実施し, その回答の中で最も重要と思われる回答についての分析をおこなった。今後は「柔道は…」や「空手は…」という他の種目を刺激語に置き替えることで, 各種目に対するイメージの比較を行ってみたい。

本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

### 【引用文献】

- 井上航人・軽部幸浩・藤田圭一 (2024). 武道のイメージに関する研究 — 大学生は武道をどのようにとらえているのか — 日本応用心理学会第 90 回大会発表論文集, 4.
- 石川美久・遠藤知里・小田梓・坂本道人・鍋山隆弘・小俣幸嗣 (2011). 共通体育柔道における大学生の武道に対するイメージ変化 大学体育研究, 33, 11-20, 2011.
- 国吉恵一・藤原靖浩 (2023). 大学生の武道に関するイメージに関する一考察 — 「剣道」の授業における学生のレポートから — 京都産業大学教職研究紀要, 18, 15-25.
- (かるべ ゆきひろ・いのうえ こうと・ふじた しゅいち)

# ニックス 日体大版剣道イメージ尺度 (NIKS) の作成 (5)

## — 信頼性について —

○古澤伸晃<sup>1</sup> 新里知佳野<sup>1</sup> 井上雄貴<sup>1</sup> 百田尚史<sup>1</sup> 八木沢誠<sup>1</sup> 軽部幸浩<sup>2</sup> 藤田主一<sup>1</sup>  
(<sup>1</sup>日本体育大学 <sup>2</sup>東京富士大学)

キーワード：剣道 イメージ NIKS

### 【目的】

これまで我々は、剣道イメージについて研究を進め、その知見をもとに剣道イメージの構造を明らかにしてきた（古澤他, 2023, 2024）。さらに、研究を進める過程で、剣道を「習う者」と「指導する者」との立場からその心理的構造を測定するために、日体大版剣道イメージ尺度 (NITTAIDAI Image of **K**ENDO **S**cale ; **NIKS**) を新しく作成した。

本研究の目的は、再テスト法により NIKS の質問項目について信頼性を明らかにすることである。

### 【方法】

**1. 調査対象者** 調査は、A 大学剣道部員と B 大学一般学生を対象として 2 回行われた。

A 大学剣道部員の 1 回目調査は 2024 年 6 月 24 日、2 回目調査は 2024 年 9 月 24 日に実施された。調査対象者は 1 回目 103 名、2 回目は 114 名であった。

B 大学一般学生の 1 回目調査は 2024 年 7 月 5 日、2 回目調査は 2024 年 10 月 4 日に実施された。調査対象者は 1 回目 45 名、2 回目は 57 名であった。

その中で、回答の不備などを除く 105 名を分析対象とした。

**2. 調査内容** 質問用紙 (A4 用紙 1 枚) は、フェイスシート (学籍番号、年齢、性別、剣道の経験、スポーツ歴) に続き、調査は Lie スケール 6 項目を追加した 40 項目の質問で実施した。回答方法を 4 件法 (4 非常にそう思う, 3 そう思う, 2 そう思わない, 1 まったくそう思わない) とし、実施した。

**3. 手続き** 調査への協力依頼は、次のように教示し同意を得ることで進められた。以下の質問内容を読んで、あなたがどう感じたかを答えてください。そう思ったところに○印をつけてください。正しい答えや、間違った答えはありませんので、気軽に思ったところに回答してください。

**4. 倫理的配慮** 調査の実施等については、日本体育大学倫理審査委員会へ、「人を対象とする研究倫理審査申請・研究計画書 (研究課題名: 剣道イメージの構造に関する分析的研究)」ならびに「説明書」「同意書」を提出し、審査の結果、承認された (承認番号 020-H172)。なお、本研究の利益相反はない。

### 【結果と考察】

**NIKS を構成する因子** 調査結果を因子分析したところ、剣道に対するイメージは 4 因子で構成されていたことが明らかになった (Table 1)。因子 I は、「剣道は正しい姿勢が養われる」などの 17 項目から構成されていた。因子 II は、「剣道は子どもから高齢者まで楽しめる武道である」などの 6 項目から構成されていた。因子 III は、「剣道は夏に稽古をするのはやめたほうがよい」などの 7 項目から構成されていた。因子 IV は、「剣道は比較的危険が少ない競技である」などの 4 項目から構成されていた。

1 回目と 2 回目の回答において、再テストによる有意な差が認められなかったことにより、NIKS の質問項目について信頼性が認められたと考えられる。

### 【参考文献】

- 古澤伸晃・新里知佳野・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一 (2023) 剣道イメージ尺度の作成と応用の可能性. 応用心理学研究, 49(1), 52-53.  
古澤伸晃・新里知佳野・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一 (2024) 日体大版剣道イメージ尺度 (NIKS) の作成 (4) —指導者を対象にして— . 日本応用心理学会第 90 回大会発表論文集, 1.  
(ふるさわ のぶあき・しんざと ちかの・いのうえ ゆうき他)

Table 1 因子分析の結果

質問内容	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV
1 剣道は正しい姿勢が養われる。	<b>0.83</b>	-0.12	0.03	0.00
2 剣道は姿勢が良くなる武道である。	<b>0.82</b>	-0.29	0.15	0.14
3 剣道は礼儀が身に付くようになる。	<b>0.75</b>	0.04	0.01	-0.05
4 剣道は礼儀作法が身に付く武道である。	<b>0.67</b>	0.14	-0.13	-0.13
5 剣道は返事ができるようになる。	<b>0.64</b>	0.09	0.08	0.00
6 剣道は挨拶ができるようになる。	<b>0.63</b>	0.15	0.00	0.00
7 剣道は剣道具姿がかっこいい。	<b>0.62</b>	0.00	-0.07	0.17
8 剣道は正座が身に付くようになる。	<b>0.60</b>	0.00	0.16	-0.01
9 剣道は剣道着・袴姿がかっこいい。	<b>0.58</b>	0.04	-0.06	0.09
10 剣道は礼節を重んじる武道である。	<b>0.58</b>	0.07	-0.21	-0.12
11 剣道は日本の心である。	<b>0.55</b>	0.12	-0.06	0.31
12 剣道は心身を鍛錬する武道である	<b>0.54</b>	0.25	-0.14	-0.06
13 剣道は相手を敬う心を養う武道である。	<b>0.54</b>	0.19	-0.17	0.00
14 剣道は凛とした美しい競技である。	<b>0.54</b>	0.05	-0.13	0.20
15 剣道は怪我予防のためにウォーミングアップが大切である。	<b>0.53</b>	0.17	-0.07	-0.22
16 剣道は鍛錬の度合いで品格に差が出る。	<b>0.52</b>	-0.05	0.11	0.18
17 剣道は怪我予防のためのトレーニングが必要である。	<b>0.51</b>	-0.19	0.18	0.00
18 剣道は子どもから高齢者まで楽しめる武道である。	-0.06	<b>0.77</b>	-0.17	0.07
19 剣道は生涯スポーツである。	-0.07	<b>0.71</b>	-0.14	0.14
20 剣道はアキレス腱を切る人が多いスポーツである。	-0.16	<b>0.67</b>	0.27	-0.03
21 剣道はやればやるほど奥が深い武道である。	0.18	<b>0.59</b>	-0.19	0.03
22 剣道は日本を代表する武道である。	0.13	<b>0.51</b>	-0.16	0.17
23 剣道は裸足で稽古することに意味がある。	0.08	<b>0.51</b>	0.05	0.22
24 剣道は夏に稽古をするのはやめたほうがよい。	-0.01	0.00	<b>0.78</b>	-0.03
25 剣道は発声がうるさい武道である。	0.03	0.04	<b>0.74</b>	-0.09
26 剣道は無駄に声を出す武道である。	0.03	-0.11	<b>0.71</b>	0.09
27 剣道は冬に稽古をするのはやめたほうがよい。	-0.05	0.05	<b>0.70</b>	0.12
28 剣道は冬は寒く夏は暑いので子どもたちには向かない。	-0.04	-0.06	<b>0.68</b>	0.10
29 剣道は体の一部に障がいができやすい。	-0.10	0.30	<b>0.55</b>	0.06
30 剣道は体が大きい人ほど有利である。	0.11	-0.05	<b>0.53</b>	0.18
31 剣道は比較的危険が少ない競技である。	-0.05	0.06	0.10	<b>0.66</b>
32 剣道は武道の中でも重大な事故は少ない。	0.02	0.03	0.19	<b>0.62</b>
33 剣道は面を打つことが一番大切である。	0.21	0.04	0.23	<b>0.50</b>
34 剣道は世界平和に貢献できる武道である。	0.16	0.31	0.03	<b>0.50</b>